
ポケットモンスター デスティニーエピソード1 ~憎しみを碎く絆~

absolute

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター デスティニー・ヒピソード1 ~憎しみを碎く絆~

【ZINEコード】

N6307W

【作者名】

absolute

【あらすじ】

舞台はホウエン地方。とある町から物語は始まる.....。

この物語の主人公「ハイク」は、故郷であるミシロタウンで母親と2人で暮らしていた。しかし、ある人物との出会いを機に平和な日常が崩れてしまう。

ホウエン地方の異変、凶暴化したポケモン、謎の組織の暗躍。そしてハイクの中に眠る「ポケモンと会話が出来る能力」の覚醒。

果たして、彼はホウエン地方の平和を取り戻す事は出来るのだろうか？

* 現在、第5章 連載中！

プロローグ・起じつわ出来事（前書き）

初めまして。absoluteという者です。

初めて書く小説なので、読みにくい所もあると思いますが、楽しんで頂けると嬉しいです。

*ちなみにこのプロローグは、22部目を更新した後に投稿したものです。

プロローグ・起じつわ出来事

薄暗い空間だった。

1人の少年が、目の前に存在する“何か”を、鋭い眼差しで睨みつけていた。

彼の傍らには1匹のポケモンの姿が。しかし、そのポケモンは既に体中傷だらけで、今にも倒れてしまいそうな状態だ。体毛には乾いてしまった自らの血がこびりついており、その姿はまるで、ぼろ雑巾のようだった。

息を切らしながらも、まだ光を失っていない瞳を持つ少年の横には、また1人の青年の姿があった。

だが、彼のパートナーであるポケモンは、彼のすぐ近くで力尽きており、既に戦える姿ではなかった。

戦える力が残っていない。何もできない自分に怒りを抱きつつも、青年は自らの意思を隣にいる少年に委ねる。

目の前の“何か”を止めなければならない。止めなければ、自分達の明日も、罪のない人達の未来も、すべて失ってしまう。

しかし、少年の士気は弱まりつつあった。

「俺たちは……」

少年がボソリと呟く。寿命がきてしまった電球のように、彼の瞳の輝きも弱まっていく。

既に、諦めかけていた.....。

——これは、起こうつる出来事。

これから始まる物語の、結末の一部の予言.....。

プロローグ・起じつひの出来事（後書き）

一応、プロローグはこれで終わりです。いかがだったでしょうか？

こんな感じで書いていくので、これから宜しくお願ひいたします！

出番(前書き)

プロローグは、これからのお話で起る一場面を描いたものです。

出会い

ミシロタウン。ホウエン地方の一角にある町だ。ポケモントレーナーの出発点とも言える町で、決して大きな町とは言えないが、ホウエン地方を代表するポケモン博士 オダマキ博士 の研究所がある事で有名である。

そんな町からまた1人、ポケモントレーナーが誕生した。そのトレーナーは半年ほど前、ホウエンリーグを制覇する事に成功した。彼の名はハイク。あまり目立つタイプではないが、真面目で、困っている人を放つてはおけない性格から周囲の人々からは好かれている15歳の少年だ。ハイクは現在、ミシロタウンに母親と2人で暮らしている。

今、ハイクは家の2階にある自分の部屋でモンスターボールの整理をしていた。

「ハイク、そろそろ研究所に行かなくていいの？今日はポケモン達の健康診断の日でしょ？」

1階から母親の声が聞こえた。そう、今日はポケモン達の健康診断がある日なのだ。そのためにハイクはモンスターボールの整理をしていたのだ。

「分かつてるよ」

そう言いつつ、ハイクは部屋を出て玄関に向かった。

「それじゃ、行ってきます」

ハイクは靴を履き、玄関を出た。

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

母親に見送られたハイクは研究所に向かって歩き始めた。

ハイクの今の格好は少し茶色がかったコートに、白っぽいズボン。
髪は焦げ茶色で長さは耳にかかるくらいで、瞳の色は黒だ。

「研究所は・・・」ちからの方が近いな

少しのんびりし過ぎたかと思ったハイクは近道を使う事にした。
大通りから人が少ない小さな道に入った。

「・・・なるほど」

途中、背後から不意に声をかけられた。

ハイクは「え？」と声を出した後、振り向いた。そこに立っていたのは1人の青年だった。髪は緑色で長く、黒っぽい帽子をかぶつており、白い上着にハイクのコートの色に似ているズボンをはいて

いる青年だった。

「君は、かなりポケモンに好かれているようだね」

青年がそう言った。

「中でも・・・彼はとても君になつていてみたいだ・・・」

「あの・・・あなたは誰なんですか?それに・・・いつたい何を言つて・・・」

ハイクが言い終わる前に青年は口を開いた。

「そんな事はいいじゃないか。一度君に会つておきたくてね、ハイク

「どうして俺の名前を・・・」

「フフフ・・・色々あつてね」

青年は話を続けた。

「ところで・・・君はもしこの平和な日常が崩れ、世界が破滅の道をたどるようになつてしまつた時、戦う覚悟があるかい?」

「一何の事ですか!世界の破滅なんて・・・そんな事・・・」

「ちよつと聞いてみただけだよ。・・・けど君は必ず戦う」

青年は目を閉じ、苦笑した。

「君と話ができるで楽しかったよ。引き止めて悪かったね。どこか行く用事があるんだろ？・・それじゃ僕はもう行くよ」

青年はそう言つて、ハイクに向かう方向とは逆の方向に歩き始めた。

「そういう、僕の名前だけでも教えておくよ」

しかし青年はもう一度振り向いた。

「僕の名前は乙。覚えておいて損はないと思つよ」

そう言つた後、青年は行ってしまった。

「何だったんだ・・・? と、早く研究所に向かわないと」

ハイクは研究所に少し駆け足で向かった。

出会い（後書き）

今回は都合上、少し短くなってしまったしました。次からはもう少し長くしたいとも思います。

感想やアドバイスも、お待ちしております！

練習（演習問題）

今回は演習問題を解いてみよう。

ハイクは研究所に向かう準備をしていた。ポケモン達を健康診断に出したのは昨日。診断にはポケモンの数が多いせいか、1日かかるらしい。なのでまた翌日、研究所に行く事になつたのだ。

「これでよし。さて、研究所に向かうか・・」

ハイクは家を出て、研究所に向かつた。

研究所に向かう途中、ハイクの頭に昨日Nと名乗った青年が言った言葉がよぎつた。「世界の破滅」Nは聞いてみただけ、と言つていたが、どうも何か深い意味があるんじやないか?と思つてならなかつた。・・・その時、

ドーン!

何か大きな音が轟いた。

「一なんだ、今の!?」

確実にただ事ではない。

ハイクはあたりを見渡した後、大きな音がした方に走り出した。・

大きな音の発生源と思われる場所に着いた時、ハイクは一瞬言葉を失つた。

そこでは1体のポケモンが建物を破壊していた。まるで岩に命が宿り、動き出したのではないか、と思つてしまつ見た目をした伝説級のポケモン、

「レジ・・ロック・・・？」

そう、レジロックだ。このホウエン地方のどこかに存在していると言っていたポケモンだか、無論、実際に見るのは初めてだ。

「本で見た事はあるけど、本当にいたなんて・・でもどうしてこんな事をしているんだ・・・!？」

グググ・・・

突然、レジロックが動きを止めたかと思うと、顔（？）をハイクの方へ向けた。

「へ？」

レジロックは片腕を振り上げ、その拳を地面に叩きつけた。すると地面が盛り上がり、先が鋭利の岩が連續して突きでてハイクに向ってきた。

「ちよつ・・ヤバ！」

ハイクは真横に飛び、頭から滑り込んだ。

「イテテ・・。」

顔が痛かったが、何とか紙一重で避けられたようだ。しかしレジロックはハイクに追撃しようと、右腕を振り上げていた。

（ヤバイ！）ハイクは本気でそう思った。しかしレジロックは攻撃を行う前に何者かの攻撃を受け、尻餅をついた。

「！なんだ！？」

ハイクの目の前に1匹のポケモンが着地した。体長はハイクと同じくらいか少し大きめで、緑色の体をしており、草のような尻尾を持つたポケモン、ジユカインだった。

ジユカインはハイクの方を振り向いた。右目に傷を負つており、開いていない。

「右目に・・・傷・・・？まさか・・・・！」

『・・・大丈夫か？』

「ん・・・へ！？」

ハイクは自分の耳を疑つた。ポケモンが人間の言葉を喋つたのだ。驚きのあまり息をするのも忘れそつた。

「し・・・喋つた・・人間の言葉を！？」

『！・・・アンタ、俺の言つている事が分かるのか！？』

「へ！？」

しかし、逆に驚いているのはジユカインの方だった。

「ちょっと待ってくれ・・君は人間の言葉を話せるポケモンとかじゃないのか？」

『いや違う・・・少なくとも具体的な話の内容がはつきり伝わ

つたのはこれが初めてだ』

「と・・・言つことは・・・」

ハイクは右手で頭をおさえた。

「俺がポケモンと会話が出来るよつになつた、て事か・・・!？」

何が何だか分からなくなってきた。こんな事は初めてだ。昨日まではいつもと同じ毎日だったのに、急に何かが変わつてしまつた気がした。

ゴ・・・ゴオ・・・

そう考へているうちに、レジロックがまた動き始めた。

『・・・しぶとい奴だな・・・』

ジユカインはそう言つとレジロックに接近した。そして手首にある葉の形をした物をトンファーのようにして斬り上げた。

ジユカインに斬られたレジロックはのけぞつた。ジユカインはその後もレジロックの腹部を何度も斬りつけた。

レジロックも黙つて攻撃を受けているわけではなく、岩の拳で殴りかかるてきたが、ジユカインはそれをバッグステップで素早く避けると距離をとつた。そして左手を前にだした。その左手に力を集中させ、緑色の球体を出現させた。

『・・・はあ!』

ジユカインはそのエナジーボールをレジロックに飛ばした。

グ・・グオオ・・・

エナジー ボールをもろに食らつたレジロックは大きくよろめいた。

『 とどめだ 』

ジュカインは手の爪でリーフトンファーとエナジー ボールを食らい、脆くなつていた部分を斬り裂いた。

レジロックは目（？）をチカチカと点滅させながら後ずさりした後、仰向けに倒れた。

襲撃（後書き）

オリジナルワザ炸裂！
リーフトンンファー・・・ネーミングセンス悪くてすいません（なんか毎回謝ってるような・・・）

感想、お待ちしております！

力の吸収（前書き）

お気づきかもしだせませんが、会話シーンで、ハイク達　人間の言葉は「」、ポケモンの言葉は『』で表しています。

力の吸収

ジュカインの連續攻撃を食らつたレジロックは耐えきれず、仰向けに倒れた。

「やつた・・のか？」

ハイクはレジロックが倒れている事を確認した。

『・・・・・』

ジュカインは攻撃態勢をといた。

「ジュカイン・・・」

ハイクはジュカインに確認したい事があった。自分は右目に傷のあるジュカインを知ってる。そう思つたのだ。
しかしジュカインはその瞬間、何かを感じたようにピクッ と動き、辺りを見渡した。

「ジュカイン?」

『・・・待て』

ジュカインはハイクにそつまつとレジロックに近づこうとした。
その時

グオオツ！

急にジュカインの周りに黒く、細長い柱の様な物が出現した。

『…何だ、これは！？』

考える間もなく、黒い柱からどす黒い雷が発生し、ジュカインを襲つた。

『グワアアアアー！…』

「ジユカイン！」

『ぐ・・そ・・油断した・・・ガアアアー！…』

しばらく攻撃をした後、雷はおさまった。そして黒い柱はジュカインを離れ、レジロックの方へ飛んで行つた。

『ハア・・・ハア・・・ハア・・・』

ジュカインは右膝をつき、左手で体重を支える様な形で座り込んだ。

「ジユカイン、大丈夫か！？」

ハイクはジュカインに駆け寄つた。

『・・ああ・・だが・・・』

ジュカインを攻撃し、さらじに黒さを増した柱がレジロックに

刺さった。

「なんだ？何が起きているんだ？」

黒い柱はレジロックに吸収される様な形で体内に入つていった。すると「ゴゴゴ」とレジロックから妙な音がしたかと思うと、それまで倒れていたレジロックが急に起き上がった。

『……なんだ……と……！？』

レジロックは田をチカチカさせながらハイクビジュカインの方に近づいてきた。

『わがつ……てい……ろ……』

ジュカインは無理矢理立ち上がりながらハイクにそう言った。

「待つて、そんな体で戦つたら……」

ハイクの言葉をジュカインは無視し、レジロックに接近した。そしてリーフトンファーで攻撃した。しかしレジロックはそれを難なく避けると、素早く殴りかかってきた。

『ぐはっ！』

レジロックのパンチをもう食らつたジュカインは地面に叩きつけられた。

その後もレジロックは攻撃を止めようとしなかった。レジロックが拳を地面に叩きつけると、倒れているジュカインの下から無数の小さな岩が飛び上がった。

『く・・そ・・』

ストーンホッジを食らひ、ジュカインはさりに飛ばされたが立ち上がるつとした。しかし、

『ぐ・・・は・・・!』

レジロックが地面に手をかざすと、地面が盛り上がり、岩の槍の様な物が出現した。レジロックはそれを、ジュカインに投げつけてきた。

槍はジュカインの腹部に直撃した。

ジュカインは口から血を吐き、その場にひざました。

「ジュカイン!!」

ハイクはもう一度ジュカインに駆け寄った。

「しつかりしる、ジュカイン!!」

『離れ・・・て・・・いろ・・・。あいつは普通じゃ・・・ない。アントも・・殺されるぞ・・・』

「田の前に苦しんでいる人がいるのに、放つとけるわけないだろ

!』

『!・・・まつたく・・お節・・介な奴だ・・・な・・・・・』

そう言つてジュカインは倒れた。

「ジユカイン？ジユカイン！」

息はかるうじてあるが、このままでは死んでしまうだろう。

（くそ・・・どうなつてゐんだ？急にジユカインの動きが鈍くなつたかと思つたら、レジロックの動きが変わつた？

・・・あの柱・・何か仕掛け・・・）

おそらくあの柱はジユカインを攻撃していいた訳ではなく、力を吸収していたのだろう。その柱をレジロックは取り込んだ。だから急に力が逆転したのだろう。

ジユカインを倒したレジロックは標的をハイクに変えた。

「もう、駄目なのか・・・？」

諦めかけたその時、ドゥオン！ といつ音とともにレジロックはよろめいた。本日2度目の不意打ちだ。

「この攻撃は・・だいもんじ大文字・・！？」

力の吸収（後書き）

いい忘れてましたが、原作に登場するキャラの設定や性格の記憶が曖昧で…もしかしたら性格が違うかもしれません。 そこの所は気にせず読んでくれるとありがたいです。

感想も待ってます。

逃走？（前書き）

どうも、absoluteです。

小説ばかり書いていたら、勉強が疎かになつていて、事に気がついた今日この頃です！（駄田じやん！）

今回は新キャラ登場です！

それでは、どうぞ！

逃走？

何者かの不意打ちを食らつたレジロックは後ろを振り向いた。そこには1匹のポケモンと1人の少女が立っていた。

ポケモンの方は、炎を模した様な頭と猿の様な見た目が特徴的なポケモン、ゴウカザルだつた。

そして、そのポケモンを連れた少女は、髪の色が黒に近い青で、長さは短くもないが、長すぎでもないくらい。丈が長く、明るい青色の「トート」を着ていた。

「・・・レイン！？」

ハイクは彼女を知つていた。

「ハイク！大丈夫！？」

レインと呼ばれた少女がそう言つた。

彼女はハイクの幼馴染みだつた。歳は15歳で、ハイクと同じポケモントレーナーだ。

レジロックは攻撃対象をレインのゴウカザルに変えた。

「やつぱりタイプは岩・・みたいね・・・」

レジロックはストーンヒッジを放とうとした。

「ゴウカザル、インファイト」

しかし、それより早くゴウカザルの守りを捨てた連續攻撃がレジ

ロックに直撃した。

「オオ・・・

インファイトをもろに食らつたレジロックは大きくのけぞつた。

「次は・・氣合い玉!」

「ウカザルは両手を前に出し、氣合いを集中させた。しばらく集中するとそこに玉ができた。そしてその玉をレジロックに向けて飛ばした。

ガーンッ!といつ音を立てて、これも直撃した。

グググ・・・

レジロックはよろめきながらも、拳を地面に叩きつけた。また攻撃が来る!と思つた瞬間、ブワッと音を立てて砂ぼこりがまつた。

「! 何!?」

そして砂ぼこりが引いた後、レジロックは姿を消していた。逃げたのだろうか?

「追い返した・・・のか?」

「ハイク!」

レインが駆け寄ってきた。

『ハ・・・イ・・ク・・?』

ハイクという名前に反応してジュカインがそう言ったが、ハイク達は気付かなかった。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「ああ・・俺は大丈夫だけど・・・ジュカインが・・・」

レインはジュカインを見た。

「！ デリしたの？ ひどい怪我じゃない！」

「レジロックと戦つて、それで・・・」

ハイクは言葉がつまつた。

「・・・そう・・」

「でもレインはデリしたんだ？ デリしてミシロタウンに？」

レインはコトキタウンに住んでいる。なぜここにいるのか疑問に思つたのだ。

「うん、ちょっとヤボ用でね。でも途中で変な男の人ミシロタウンで起きている事を教えてくれたの」

「変な男の人？」

「そう。黒っぽい帽子に髪が長くて緑色の人・・」

「えつー？まさか・・・。そいつ、何て言つてたんだ？」

「君の友達が危ない。早く助けに行つた方が良いって・・・」

「何だつて？・・・一体何を考えているんだ・・・？」

「ひょっとして、その人と知り合つて？』

「まあ・・・ちよつとな・・・」

「おーい、君達！」

話をしていると白衣を着た1人の男の人が走つてきた。

「オダマキ博士！」

そう、彼がオダマキだ。

「ハイク君に、レイン君も一緒だつたのかー・レジロックに襲われたそうだね。怪我はなかつたかい？・・と、そうでもないみたいだね・・・」

オダマキはジュカインを見て、すぐに状況を理解したようだ。

「レジロックにやられたのかい？」

「はい、そうです・・・」

「こいつは酷い・・・すぐに研究所に運ぼうーあそこなら役に立つ物が揃つてゐる

「はい。お願いします」

ハイクはジュカインをオダマキに預けた。

「それと、君達も研究所に来てほしい。話したい事があるんだ」

「はい、分かりました！」

ハイクとレインはオダマキと共に、研究所へと向かった。

逃走？（後書き）

やつとバトルが終わりました。 戦闘シーンって書くのが難しいな。。

感想、書いてくれたら嬉しいです！

異変（前書き）

今回はチョイ長めです。

研究所に着いてすぐ、ジュークайнは怪我の治療を受けた。幸い、命に別状はなく、しばらく安静にしていれば良くなるらしい。ジュークайнが無事だと聞いてホッとしたハイクとレインはオダマキに話したい事がある、と言っていたので、研究所の一室にいた。

「オダマキ博士って、情報収集早いよね」

レインがそう言った。

「あ、ああ」

こんな時に呑気な事を言つて、レインにハイクは少し呆れた。昔からレインは、しつかりしてそうだが、少し呑気と言つか、天然と言つか。そんな一面があった。まあ、そこもレインの良いところ、と言つてハイクは受け入れて來たのだが。

「話したい事、何のはね…」

オダマキは話し始めた。

「まずは、ハイク君。君に伝えなきやいけない事がある

「俺に、ですか？」

オダマキは静かにうなずいた。

「单刀直入に言おう。君が健康診断に連れてきてくれた6匹のポケモンが……忽然と姿を消した……」

「へー!?」

ハイクは頭の中を整理するのに時間がかかった。

横でレインが「ストレート過ぎですよ……」と言つて、ハイクの気持ちを気にしていた。

「それって……一体……どういつ……」

「すまない……分からんんだ。何者かが持ち出したのか、それとも彼らが自分達で抜け出したのか……。でも昨日から今日にかけて誰かが侵入したりとか、抜け出した形跡が無いんだ。それに姿を消したのは君のポケモンだけなんだ。全くの謎だよ……」

「そんな……」

ショックで言葉が出なかつた。共にホウエン地方を旅し、数々の戦いをくぐり抜けてきた、大切な仲間だったのだ。心に受けた傷は大きかつた。

「私達も今、全力で捜査している。必ず見つけ出して見せる! それまで……待つていてくれ」

「……はい」

その時、ハイクの心にある決意が生まれた。

「それと、2人に今回起きた事件について話そうと思つ

オダマキは話を続けた。

「今回のように伝説級のポケモンが人前に現れるという事は極めて稀^{まれ}であつて、ましてや人を襲うなんて事はほとんど記録されていないんだ」

するとオダマキはパソコンを操作し、何かのファイルを開いた。

「そして、ここからが重要だ」

ハイクは「クツ」と唾^{つば}を飲んだ。

「同じような事件が1時間22分前、ホウエン地方の2ヶ所で起きている」

「え！？」

ハイクとレインは2人同時に驚いた。

「そして、その場所は……」

オダマキはキー ボードをクリックした。

「//ナモシティとルネシティだ」

するとパソコンの画面に2つの映像が流れた。その映像は、やはり伝説級のポケモンが建物を破壊し、人々を襲つて いる映画だった。ミナモシティでは、鉄^{くろがね}ポケモンのレジスチルが、ルネシティでは、氷山ポケモンのレジアイスが暴れていた。

「そんな……！ 一体どうして……」

その映像を見た時、ハイクは愕然とした。

「今は騒ぎは収まっているようだかまだ詳しい情報は入ってきてないんだ。この映像も、ほんの数秒だしね」

「それにしても……ミシロタウンの事件とこの2つの騒ぎ、絶対何か関係していると思います。あの3体のポケモンは、大昔に何らかの理由で封印されたとポケモンと言われてますから……」

レインがそう言った。

「うん、私もそう思う。それにハイク君のポケモンが姿を消したという事も……関係はないかも知れないが……嫌な予感がする……」

「少し……」

ハイクが口を開いた。

「少し、心当たりがあるんです。何かを知つてそうなん……そんな奴を知つてるんです！」

「！ 誰だいそれは？」

ハイクは昨日から今日にかけての事を話した。乙と叫ぶ青年の事、彼が告げた不穏な言葉の事、しかし、オダマキとレインが一番驚いたのは……

「ポケモンの声が聞こえたみたいになつた！？」

と、いう事だろ。

「信じてもらえないかも知れないけど、本当なんですよ……。」

信じてもられないとかもしないけど、本当なんですよ……。」

「うーん、でもハイク君がこんな時に嘘をつく分けないし……本当なんだろうね」

「私も信じるよハイク」

しかし返ってきたのは意外な言葉だった。

「レイン……オダマキ博士……ありがとうございます。」

ハイクの言葉に対し、オダマキはウンッとうなずき、レインはニコッと笑って答えた。

「でも、ハイク君が言つていたジュカインの力を奪つた黒い柱、ところのが気になるな……。」

オダマキはそう言つて右手を口に当て、考えた。

「オダマキ博士、俺、力を探して来ます！あいつは絶対何かを知っています。会つて話を聞きます！」

「私も行きます！」

「レイン?」

「もう、関わってしまったんです。どうせなら、私も解決策を見つけたいんです!」

止められると思っていても、ハイクとレインはそう言った。

「分かった……」

しかし、オダマキはあっせりと許した。

「君達の事はよく知っている。止めたって無駄だろ?」

ハイクとレインはお互に向き合った後、オダマキにお礼を言った。

「だけど一つ約束してくれ。…絶対に無事 帰つてくるんだ。いいね?」

「はい!そんな事なら大丈夫です!」

ハイクはオダマキにそう言つた。

「でもそつなると、ハイク君には代わりのポケモンが必要だね」

『なら、俺が力を貸そつ』

誰かの声を聞いたハイクは部屋の入り口を見た。そこには怪我の治療を終え、傷口に包帯を巻いたジュカインがいた。

「ジュカイン!」

「『え?』」

オダマキとレインも振り向いた。

「怪我は……もう大丈夫なのか? 安静にしてないと……」

『大丈夫だ。問題ない』

ジュカインはハイクに近づきながらそう言った。

『それに、俺はアンタの父親のポケモンだ。アンタを助ける義務がある』

「やつぱり…父さんの…」

ハイクには父親がいない。5年前、ある事故に巻きこまれ、行方不明になってしまった。

行方不明になる前、父親は大怪我をした1匹のキモリを拾つてきただ。命は助かたが、右目の傷は治らなかつた。

キモリは父親についていたが、父親が行方不明になつた直後、自らも姿を消した。そのキモリがジュカインに進化し、帰つてきたのだ。

「すゞ……本当にポケモンの声が聞こえるんだね」

レインがそう言った。

「あ…ああ。怪我は大丈夫だつて。あと、俺に力を貸してくれるみたいなんだ」

と、ハイクは言った。

「ジュカイン、俺に力を貸すのは義務なんかじゃない……。無理にしなくても……」

『無理にではない。それに、俺を舐めてもらひちゃ、困るな……』

ジュカインは少し笑いながらそう言った。

「分かった。ありがとうございます、ジュカイン」

ハイクはジュカインの中の決意に気づいた。ハイクと共に戦う決意だ。その決意を無駄にできない、と考えたハイクはジュカインを受け入れる事にしたのだ。

「オダマキ博士。俺、ジュカインといきます！」

オダマキは何も言わずに頷いてくれた。

「けど、しばらくは戦わせちゃ、駄目だからね！」

「はい、分かってます」

「私のポケモンもいるので大丈夫です！」

ハイクとレインはそう言った。

「それじゃ、そろそろ行きますね」

荷物を整理したハイクはそういった。

「うん、行っておいで！」

「はい、行って来ます！」

ハイクとレインはジュカインを連れて研究所を後にした。

異変（後書き）

ポケモンは人間の言葉を理解できるみたいですね（笑）

次回、多分短いです。

感想、待ってます。

家族（前書き）

宣言通り！

ジュカイン『宣言通り、だな

おお、ジュカイン！前書きにまで登場ですか！

ジュカイン『……たまにはいいだろ……』

はい、それでは始まります。

ジュカイン『……スルーか……』

家族

ハイクは自分の家の前にいた。旅立つ前に母親に話しておいたと
思ったのだ。

ハイクはドアノブを回し、扉を開け、家に入った。

「ただいま」

いや、その言葉は今使つのは妥当ではなかつたのかかもしれない。

「ハイク…？ハイクなのね！？」

家の奥から母親が出てきた。今、ハイクがいるのは玄関だ。

「良かつた…心配したのよ？外で騒ぎが起きてるって聞いて…」

「そうか…ごめん、母さん。心配かけて…」

ハイクは少し黙り混んだ。

「でも良かつた。ハイクが無事ならそれで……」

母親がそう言つとハイクも口を開いた。

「ねえ、母さん」

「ん、どうしたの？」

「父さんの……キモリがさ、帰つて来たんだ。ほら、入つて来いよ

それまで外にいたジュークカインが中に入つて來た。

「まあ……」

「今はジュークカインだけど……」

母親は驚きを隠せずにいた。

「今まで何処に行つてたの？ いつの間にか大きくなつて……。顔の傷は、まだ治つてないのね……」

『ああ……大丈夫だ。不便はない……』

ジュークカインはそう言つたが母親には聞こえないだろう。

「母さん、それともひつ……」

「……今度は……どうしたの？」

「俺、もう一度ホウエーン地方を回らなきゃいけないんだ

「……」

「色々あつて……もしかしたら、世界に危機が迫つてるかもしれないんだ。やつる前に止めなきゃ……俺が止めなきゃいけないんだ」

母親は目をつぶり、下を向いて何かを考えた。

「……ちよつと待つてなれ。」

母親はそう言つて、家の奥へ入つて行つた。その後、何かを持って出てきた。

「「」れ、キモリくんの…今はジュカインくんね。モンスターボルよ。持つていきなさい」

そういうと、母親はハイクにモンスターボールを渡した。

「父さんが使つてた…でも、俺が出るの、止めたりしないの?」

ハイクがそう言つと、少し笑いながら母親は言った。

「もう、子供じゃないしね。あなたが決めた事なんでしょう?なら、母さんは止めたりしない…」

「母さん…」

「「」…あなたの父さんにそつくりね。いつもこう事があると、いつもたつてもいられず、すぐに飛び出して行つちゃう…」

母親には、ハイクとハイクの父親が重なつて見えたのだろう。

「わあ、言つてらっしゃい。…あなたの決意を…貫くのよ…」

「「」ん…行つてきます。必ず…帰つて来るよ」

やう言つて、ハイクは家から出た。

「もう…いいの？」

外で待っていたレインに聞かれたハイクは「うん…」と、答えた。その顔は後悔しているようにも、悔いのないようにも、見ることができた。

「……行こう…」

そう言つた後、ハイク達はミシロタウンを後にした。

家族（後書き）

ジュカイン『会話が多いな……大丈夫なのか?』

えへと、まあ、はい、すいませんく（ーー）>

感想、お待ちしております！

ジュカイン『日本語おかしくないか?』

……（言い訳が思いつかない）

少わな声（前書き）

えへ、先日更新した「異変」と「家族」ですが、色々とトラブルがありました…一部文字が消えたまま更新してしまいました。今は直しましたが、読者の方々にはご迷惑をかけ、申し訳ありませんでした。

はい、それでは始まります。

小さな声

ハイクとレインは、Nの手がかりを探すために、コトキタウンに向かっていた。

「サンダース、10万ボルト！」

今、101番道路で、レインの黄色い犬の様な姿をしたポケモン、サンダースはムクホークと戦っていた。ムクホークは飛行タイプなので、相性はいい。難なく倒す事ができた。しかし、気になる事があった。

「ムクホーク…ハーデリアの次はこいつか…」

ムクホークもハーデリアも、101番道路には生息していないポケモンなのだ。しかし、今日は本来生息しているはずのジグザグマやスバメといったポケモンはほとんど見かけず、逆に生息しているポケモンを大量に見かけたのだ。しかもほとんどのポケモンが人間を見た瞬間、殺氣立てて襲いかかってくるのだ。

「くそ、何が起きているんだ？たった1日でこんな…」

「うーん…突然変異したとか？」

「…いや…流石にそれはないと思つけど…」

レインの妙な発想は置いといて……ハイクの今の手持ちはジュカ

インのみだが、怪我をしているので戦わせる訳にはいかない。レインのポケモンのお陰でなんとか前に進めてはいるが…。

ガサガサ…

ムクホークを倒し、ほつとしたのも束の間、今度は別のポケモンが複数、草むらから飛び出してきた。

『！」…これじゃキリがないよお～』

サンダースが泣き言を言つたが、無理もない。

「とりあえず！」は逃げよつー…」

ハイクの提案に対してもうなずいて答えたレインは、サンダースをモンスター・ボールに戻し、ハイクと共に走つて草むらを通り抜けた。

「！」まで来れば大丈夫だろ…」

息を切らしながらも、ハイクはレインにそう言つた。

「多分、ね。コトキタウンも田の前だし…」

レインに言われ、コトキタウンの入り口がもう見えている事に気づいた。

「…行こや。この手がかりが見つかればいいけど…」

ハイク達はコトキタウンに向け、歩き始めた。が、その時、ハイクの耳に誰かの声が響いた。

「え？」

しかし、その声は弱々しく、今にも消えてしまいそうなロウソクの火のよくな……そんな声だった。

「どうかしたの？」

レインがハイクに尋ねた。

「今……声が……」

『助け……』

「！」

はつきりと聞こえた。誰かが助けを求めている！

「こっちだ！」

ハイクは近くの茂みに向かって走った。

「ちょっと待って、ハイク！」

レインも後に続いた。

茂みの中は確実に人が通るような場所ではない。木の枝を押し退

け、歩きにくい茂みを進む。

しばらく進むと、少し広い場所に出た。そこには一匹の小さなポケモンがつづくまつっていた。

「いじつは…」

そのポケモンをハイク達は知っていた。しかし、やはり101番道路にいるはずのないポケモンなのだ。そのポケモンは炎タイプで、火ネズミポケモンのヒノアラシだった。

「大丈夫か！？」

ハイクはヒノアラシに駆け寄り、声をかけたり、体を揺すつたりして生きているかどうかを確認する。

『う…う…』

かすかだか反応があつた。まだ死んではいないようだ。よく見ると体中に細かい傷があつた。

「ポケモンセンターに連れて行こう」

ハイクはそう言つと、ヒノアラシを抱きかかえた。

「大丈夫なの、その子？この辺では見ないポケモンだけど…さつきのポケモンみたいに凶暴なんじや…」

レインの考えは得策だ。この状況で慎重になる事に超したことはない。しかしハイクは、このヒノアラシが凶暴であろうとなからうと、関係なかつた。

「たとえそうだとしても、このまま放つておく訳にはいかない」

レインには、ハイクがそう言つとなんとなく分かっていた。ハイクは昔から困っている人、苦しんでいる人を見ると、意地でも助けようとしてしまう。そんな人だった。

今と同じ昔のハイクの姿を思い出し、レインは苦笑していた。

「どうかしたのか？」

ハイクにそう聞かれたが、「ううん、何でもない」と言つて首を横に振った。

しかしその直後、何かが急に茂みから飛び出し、ハイクに襲いかつた。アリクイの様な見た目をした炎タイプのポケモン、クイタランだ。

「なつ！？」

クイタランはハイクに飛びかかってきた。このスピードでは避けきれない。しかし次の瞬間、ハイクの腰辺りにあつたモンスターホールからジュカインが飛び出し、クイタランの攻撃を受け止めた。

「ジュカイン！？」

『今……内だ……！』

傷が完治していないせいか、かなり辛そうだ。

「レインー」

レインはうなずき、自分のモンスター・ボールを投げた。

「ミロカロス！」

レインが出したのは蛇の様な美しい姿をした水タイプのポケモン、ミロカロスだった。

「ジュカインを助けて！」

ミロカロスは自分の尻尾をムチの様にしならせ、クイタランに攻撃した。ミロカロスの攻撃を食らったクイタランは、ジュカインから手を離し、吹っ飛んだ。

「ハイドロポンプ！」

ミロカロスは吹っ飛んだクイタランに向か、ハイドロポンプを放つた。またもや攻撃を食らったクイタランは、とうとう倒れた。

『ぐつ……』

ジュカインは脇腹を抑え、片膝をついてその場に座り込んだ。

「ジュカイン、無理しちゃ駄目よー。」

レインがジュカインにそう告げた。

「まだ怪我が治つてないんだろ？」

ハイクの質問にジュカインは答える。

『傷もそつだが……、奪われた力もまだ戻ってきていない。これでは前のような力は出せない』

ジュカインは自らの体の異変に気づいているようだ。レジロックに奪われた力は一時的に消耗した訳ではなく、完全に消えてしまったようだ。それでも冷静に振る舞うジュカインに、ハイクは感心した。

「もしかしたらレジロックから力を取り戻せるかもしれない……。とりあえず今はモンスター・ボールの中に戻ってくれ」

『……分かった』

ジュカインはモンスター・ボールに戻った。

「ねえ、ハイク」

今まで話しに全く入ってこれなかつたレインがハイクに話しかけた。

「力を取り戻す、とか言つてたよね？ 本当にそんな事出来るの？」

ハイクの声だけで、そこは理解できたようだ。

「力を奪わたんだ。なら、その逆も出来るハズだ。まあ、もう一度レジロックに会わなきゃ分からないけど……」

確かに力が戻る、と言い切れる訳ではないが、奪う事ができたのだから取り戻す事もできるハズだ。

「やい、早くこいつをポケモンセンターに運ぼう」

やうやくハイク達は、ヒノアラシを助けるため、またこの手がかりを捜すため、コトキタウンに向かった。

小さな声（後書き）

今回から2章に突入です！

感想、待ってます！

新たな脅威（前書き）

ふう、やつと更新でもおしました。

それでは、話題、どうがー！

「コトキタウンに着いた後、ハイクはヒノアラシのためにポケモンセンターへ、レインはNの手がかりを探すため町へ行く、という2手に分かれて行動する事になった。

レインは誰かNを知つ見た人がいないか、色々な人に聞いて回つた。しかし、誰もNを見た、と言う人はいなかつた。
手がかりを失い、完全にNを見失つたレインはとぼとぼと大通りを歩いていた。

「……N…いないな…」

コトキタウンの町の大きさはシロタウンとほぼ同じ。レインとハイクが入つたのは南側の出入口だ。入つてすぐ目の前にポケモンセンターがあり、右に町が広がつていて感じだつた。そんな小さな町でもNを見つける事ができなかつた。よほど逃げ足が早いのか、それとも影が薄いのか…。

とりあえずレインはポケモンセンターに向かつ事にした。だがその途中にある小さな電気屋の前で足を止めた。その電気屋にガラス越しに展示されていたテレビから流れているニュースをみて、レインは驚愕した。

「……大変！ハイクに知らせなきや！」

レインはハイクと連絡をとるために、携帯電話を取り出した。

ハイクはポケモンセンターにいた。ヒノアラシの怪我を治すためだ。

幸い、怪我は大したことなかった。倒れていた大きな原因は極度の疲労だったらしい。そのため、治療は早めに終わり、ハイクはヒノアラシを受けとるためにカウンターに向かった。

「少し休めばすぐに良くなりますよ」

カウンターの人はそう言い、ヒノアラシをハイクに渡してくれた。

「ありがとうございます」

ハイクはお礼を言いつつ、ヒノアラシを受け取った。

ハイクはヒノアラシを抱きかかえたままポケモンセンターの外に出た。そしてコトキタウンの出入り口付近まで歩いた後、ヒノアラシを降ろした。

「わあ、これで君はもう大丈夫だ。自分の場所に、帰ってもいいよ」

ハイクはヒノアラシにそう言い残し、その場から立ち去ろうとした。

『あ、あのー。』

しかしハイクは、ヒノアラシに声をかけられたので、立ち止まり、振り向いた。

『助けてくれて……ありがとうございましたー。』

ヒノアラシはハイクにそう言った。

「へ？ああ、そんな事か。苦しんでいる人やポケモンを助けるのは、当然だろ？」

ハイクはヒノアラシにそう言った。

予想外の言葉だったのか、ヒノアラシは少し困惑したような素振りを見せたが、しばらくすると口を開いた。

『……やっぱり、ボク達の声、聞こえるんですね…』

「ま…まあ、色々あってね…」

ヒノアラシの質問にたいして、ハイクはそう答えた。

『その…人を探しているんですね？』

ヒノアラシはハイクに尋ねた。

「ああ。聞いてたのか」

『え…えつと…その…た…探すのボクも手伝います！助けてもら

つたお礼に……

「え？」

ヒノアラシの考えにハイクは少し驚いた。

「でも、この旅は危険だ。君の仲間達も心配しているだろ？ 帰つた方がいいよ」

『…ボクには、仲間とか、家族とかいません。…この辺に來たときはお母さんと一緒に来たんですけど……ある日突然、帰つて来なくなっちゃつたです…。だから、心配する人とかいないので、大丈夫です！』

「…

ヒノアラシの過去を聞いたハイクは、胸が痛んだ。

「…ずっと…一人だつたのか…」

彼は今までずっと一人ぼっちで、生きて來たのだろう。どのくらいの間、彼は辛い思いをしてきたのだろうか。このまま彼を逃がしても、待つてているのは孤独だけだ。そう思えば思うほど、ハイクの心はヒノアラシを助けたい、という気持ちでいっぱいになつた。

「……分かつた

その答えは、ヒノアラシの厚意を無駄にはできない、という思いよりも、ヒノアラシをこれ以上、一人にさせたくない、という思いから生まれたのかもしれない。

「一緒にいく」

ハイクは空のモンスター・ボールを取りだし、そう言つた。

『！…ありがとうございます！』

ヒノアラシの頭をボールで、コンシと叩くと、ボールが開き、中から出てきた赤い光にヒノアラシは包まれた。そして、光と共にヒノアラシはボールに吸い込まれた。ボールは少しの間コトコトと動いた後、動きを止めた。

「これから… よりしく…」

ハイクはボールの中のヒノアラシに向かつてそう言つた。
と、同時にハイクのポケットの中にあつた携帯電話が鳴つた。

「誰だ？… レインから…？…………もしもし？」

ハイクは電話に出た。

「あ、もしもしハイク！？今どき…？」

「『トキタウンの入り口辺りだけ…』

「大変なの…え…と、すぐに電気屋の前のバス停まで来て…」

「電気屋の前のバス停…？ああ、あそこか。分かったすぐ行く…」

ハイクは電話を切つた。

「レイン慌ててたな… 大変な事つてなんだ…？すぐに向かつた方が良さそうだな…！」

ハイクはレインがいつた所に走つて向かつた。

「レイン！」

ハイクは、バス停の前でレインと再会した。

「ハイク！大変なの！」

「大変つて…何が大変なんだ？もしかして、Nを見つけたのか？」

？

「いや… Nは見つからなかつたんだけど… さつきそのテレビでやつてたニュースで、カナズミシティが大変なことになつてるの…」

「カナズミシティ？」

カナズミシティといえば、岩タイプのポケモンを使うトレーナー

のツツジがジムリーダーのポケモンジムがある、大きな町だ。

「カナズミシティがどうして大変なんだ？」

ハイクはレインに尋ねた。

「ポケモン……」

「え？」

「ポケモンジムから大量のポケモンが溢れ出て来て、人を襲つて
るみたいなの！」

「……」

ハイクは驚き、愕然とした。

「それって、いつ頃だ！？」

「ううん……ちょっと前だと思つけど……」

「そうか……」

次々と起つる不測の事態を前にして、頭が混乱しかけていた。

「どうする？」

レインはハイクに聞いた。

「……カナズミシティに行つ。これまで、こうこう事態が起つる

前はNが現れてるし…、それに、俺達も何か力になれるかもしね
い」

ハイクはレインにそう、答えた。

「それじゃ、バスで行く？今は午後の3時40分くらいだから：
カナズミシティ行きのバスは4時発のがあるね」

バスの時刻表を見ながら、レインがそう言った。

「じゃあ、そうしよう

レインの考えに、ハイクは賛成した。
こうして、次の目的地はカナズミシティに決まった。

新たな脅威（後書き）

ジユカイン『ポケモンセンターのシーン、グダクダだったな…』

はい…すいません…。

感想、待つてあります！

溢れる“闇”（前書き）

やつたー、10話目だー！

ジユカイン『よく10話も続いたな…』

な、なんて事、四つほどですかー…この小説はまだまだ続かなか
らねー！

ジユカイン『その勢いも、いつまでもつかな……？』

…でも、ジユカインあとで覚えてるよ…

や、それでは、どうぞー！

溢れる“闇”

ハイク達はカナズミンティに向かうため、バスの中にいた。周りを見ると、乗つておるお客さんが少ない事に気づく。恐りしく、ポケモンジムの件がニュースで流れた事により、皆カナズミンティを避けているのだろう。妥当と言えば、妥当な判断である。

「そう言えば…」

レインがハイクに話しかけてきた。

「あの、ヒノアラシビリしたの？」

「ああ、一緒に連れていく事になった

と、ハイクは答えた。

「一緒にー？また賑やかになつたね」

「そ、そうだな。…ヒノアラシ、今までずっと一人ぼっちだったらしいんだ。このまま逃がしても、また寂しい思いをするだけだろ？だからこれ以上、1人にさせたくないつてぞ…」

ハイクはレインにそう答えた。

「そう…。相変わらずね、ハイクもー」

「え？ どういう所が？」

「もうこの所！」

レインは笑つて答えた。

ふとある事に気づいたハイクは、ヒノアラシをモンスター・ボールから出した。

「もう言えば、まだ血口紹介まだだつたよな？」

ハイクはヒノアラシにやつした。

『やつでしたね』

「俺の名前はハイク。よろしく！」

『あ、はいー。ひづり君、よろしくお願ひしますー。』

そんな事を話してこるつたり、バスはカナズミシティに到着した。

カナズミシティに到着した頃には、太陽は沈み、黄昏時になつていた。

「ポケモンジムは…」口づちだな

カナズミシティはミシロタウンやコトキタウンに比べ、かなり大きな街だ。街灯や建物の量も多く、日が沈んだ後でも街の明るさはなかなか消えない。

しかし、そんな街の普段なら人通りの多い通りが、今日はやけに人が少なかつた。その代わり、ポケモンジムの方からは、沢山の人達の話し声らしきものが聞こえてくる。

「なんだかポケモンジムの方が騒がしいね」

レインがそう言った。

「そうだな…野次馬かな？」

ハイク達はポケモンジムへと向かつた。

ポケモンジムの周囲には、やはり野次馬と思われる人でいっぱいだつた。人混みの前の方には、興奮した人々をなだめている警備員が見える。

「うわ、すごい人だな…」

ハイクは沢山の人を見て、少し畠然とした。

「あ…ねえハイク、見てあれ！」

「ん、どうした？」

レインの指さす方向に目を向けた。そこには、人混みの先頭に立つている青っぽい服を着た1人の女性がいた。

「あの人って、ツツジさんじゃない？」

「え？ あ、本当だ」

彼女がこのカナズミシティのポケモンジムのジムリーダー、ツツジだった。

「どうしてあんな所にいるんだろう？」

疑問に思ったレインがそう口にする。

「…よくわかんないけど…ツツジさんなら何か知ってるかも…。
聞きに行つてみよう」

ハイクの意見にレインは賛成した。

「ち…ちょっとすいません…」

人と人の間を潜り抜け、やつとの思いでツツジの所までたどり着いた。

「ツツジさん！」

ハイクがツツジに声をかけた。

「あ、ハイク君に…レインちゃん？久しぶりー…ビリしたの、こんな所に？」

ツツジがそう言った。

「ジムの事、ニゴースで聞いて…。一体何があつたんです？」

ハイクがツツジに尋ねた。

「ううん、私にもよく分からなくて…。ジムからポケモン達が溢れてきた、ていう時にはジムを留守にしてたし…」

「そう…ですか…」

「今はなんとか警備員の人達がポケモンをおさえているみたいだけど」

ジムの方を見ると、何人かの警備員が、入り口を封鎖していた。情報を得られずに、少しがつかりした反面、被害がおさえられている事を知ったハイクは安堵していた。しかし…

ガンツ！

鈍い音と共に封鎖されていた入り口が破られ、中からポケモンが現れた。ポケモン達は首のあたりにバナナの様なフサがあるポケモン、トロピウスを先頭に、列をなして出てきた。よく見ると草タイプのポケモンが多かつた。

「ギャオオオ！！」

そのポケモン達は、ハイクとレインに101番道路で襲ってきた。ポケモンと同じく、人間を見た途端、殺氣立てて襲いかかってきた。

「うわあー！」「キャー！」などと人々は叫び、我先にとその場から逃げ出そうとした。その間、ポケモン達はマジカルリー／フやエナジー／ボールを放つていた。

「くそ！」

その姿を見たハイクはポケモンジムに向かつて走り出した。

「ハイク！？」

レインがハイクの事を呼んだ。

「ポケモンジムに突入する！中に絶対 何か原因があるはずだ！」

「ち、ちょっと待つてよ！」

レインもハイクの後に続いて走り出した。

「2人とも！危ないよ！」

ツツジの注意も聞かず、ポケモンジムに走る。

「ゴウカザル！」

レインがゴウカザルを出した。

「火炎放射！」

「ゴウカザルが放つた火炎放射はトロピウス達を包んだ。

「今の内よ！」

その隙にハイクとレインはポケモンジムに突入した。

「ああ、君たち！」

警備員の人が止めようと声をかけたが、ハイク達は止まらうとした。

「なんだよ、これ…」

ポケモンジムの中は異様な雰囲気が漂っていた。不自然に草木が生い茂り、足の踏み場もないほどだ。

「何か…少し変わった？」

「少し違うの騒ぎじゃないよな…これ…」

ハイク達は辺りを見渡し、愕然としていた。

ガサツ！

不意に草むらから何かが飛び出してきた。

「！ テッシード！？」

それはテッシードだった。

「く…ヒノアラシ！」

ハイクはモンスター・ボールからヒノアラシを出した。

「やれるか、ヒノアラシ？」

『は、はい！ハイクさんの役に立つて見せます！』

ハイクの確認に対し、目の前の状況に少し怯えながらも、ヒノアラシはそう答えた。

「よし…火の粉だ！」

ヒノアラシは火の粉を放った。

「連発はしなくていい。注意をそらすだけで十分だ」

火の粉は炎タイプ技の中でも最弱クラスだが、今は注意をそらすだけで十分だった。

火の粉を受けたテッシードは思わず目をつぶり、よろめいた。

「いまの内に……！」

その隙にハイク達はジムの奥へ走った。

「なんとか逃げきれたな」

テッシードを振り払い、すこしホツとした。しかしヒノアラシはまだブルブルとふるえていた。

「どうした、大丈夫か？」

ハイクが心配して声をかけた。

『な、何かが…来ます…！』

「え？」

ヒノアラシがそう言つた後、足音を立てながら何者かが近づいてきた。

「え、何！？」

それはローブ着た人の様な姿をしている“何か”だつた。フードを深く被り、顔を確認する事はできない。

「何だ…こいつ…人間…なのか…？」

その“何か”からは人とは違つ、何か別のオーラを放っていた。

『……バトル』

その“何か”はどこからかモンスター・ボールの様な物を取りだし、
そうつぶやいた。

溢れる“闇”（後書き）

最近、部活や勉強が忙しくて更新速度低下中です（汗）

できれば、感想お書きトドケ。お願いします。

異常な力（前書き）

サブタイトルがなかなか思いつきませんでした…。

ジユカイン『試行錯誤を繰り返した結果がこれか…？微妙だな…』

…すいません。

異常な力

フード付きのローブを着た謎の人物の登場により、ハイク達は少し混乱していた。ちなみにその人物のローブの色は茶色っぽい色だ。

『……バトル』

その人物はどこからかモンスター・ボールの様なものを取り出した。色は黒で特に模様などは描かれていない。かなりシンプルなデザインだが、そのボールも、何か禍々しいオーラを放っているような気がして、ハイクは背筋がゾッとした。

「バトルって…まさか」

その人物は、黒いボールから1匹のポケモンをくりだした。先ほど戦ったポケモン、テッシードが進化したポケモン、ナットレイだつた。その見た目を強引に言えば、ドゲの付いた玉から緑色の触手がのびている、そんな様な姿をしていた。

「！」「この人トレーナー！？」

レインが尋ねた。

「分からぬ！でも…何か変だ…あのポケモン…」

そのナットレイは、見た目こそ普通だが、本能的に動いているのではなく、何者かの命令を体だけが忠実に実行している様に感じた。言わば操り人形だ。

「変つて、どうこう事?」

「何で言つたか…誰かに操られてるって言つたか…」

レインの質問に対し、ハイクは曖昧に答えた。

『…パワーウィップ』

ローブの人物に命令されたナットレイは、自分の触手をムチの様にして攻撃してきた。

「うわっ!」

ハイクとレインはそれぞれ別の方向に飛び込み、攻撃を避けた。

「あ…危なかつた…」

ハイクは立ち上がりつつも、そう言つた。

「ハイク!ここは私達に任せ!」

するとレインは、モンスター・ボールから「ゴウカザルを出し、そう言つた。

「レインー?でも…」

「流石にあいつ相手じゃキツいでしょう?」

と、レインはハイク達に言つた。その間ヒノアラシは小さな体を

ブルブルと震わせ、怯えていた。

「『めんれいん』…ゴウカザル…任せっぱなしで…」

「いいのよ。困った時は助けあわなきや」

そう言つとレイインとゴウカザルは、ローブの人物とナットレイと向き合つた。

『…ラスター カノン』

ナットレイの先制攻撃だ。体中が輝き始めたかと思うと、その光が一点に集中した。そしてナットレイは、その集中した光をゴウカザルに飛ばして攻撃してきた。

『…』

しかしゴウカザルは素早くサイドステップでラスター カノンを避けた。

「反撃！火炎放射！」

ゴウカザルは火炎放射を放ち、攻撃した。

ナットレイは守備力の高さがとりえのポケモンだ。そのかわり、体を動かすスピードはかなり遅い。並のナットレイ相手ならその攻撃は当たっていた。しかしそのナットレイは、常識ではあり得ないスピードで飛び上がり、ゴウカザルの火炎放射を避けた。

『なに！？』

「ゴウカザルが驚いた様子でナットレイを見上げた。

『……アイアンヘッド』

ナットレイは頭をゴウカザルの方に向け、角度をつけて飛び込んできた。やはり物凄い速さだった。

ゴウカザルには避ける隙がなく、アイアンヘッドが直撃した。

『ぐう……！？』

ゴウカザルはそのまま吹っ飛ばされた。

「ゴウカザル！」

『……パワーウィップ』

レインが叫んだが、ナットレイは倒れいるゴウカザルに尚も接近し、パワーウィップで攻撃した。

『グハツ……！ゲホツ……！ゲホツ……！』

パワーウィップが腹部に直撃したゴウカザルは、むせて咳き込み、吐血した。

パワーウィップは草タイプ技だ。炎タイプであるゴウカザルに対しては効果が薄いハズなのだが、常識を超える勢いで攻撃しているため、ダメージ量は大きかつた。

『……！』

苦しむゴウカザルを見て、レインは言葉が出なかつた。

ナットレイはその後も触手で「ゴウカザルを殴り続けた。

『……』

ヒのままでは「ゴウカザルが殺されてしまつ。

『やめろ……』

もう駄目なのか？と諦めかけていた。

『やめろおおおーー!』

しかし次の瞬間、それまで震えていたヒノアラシがナットレイに向かつて駆け出した。

「！ ヒノアラシ！？」

ヒノアラシはナットレイに接近し、火の粉を放つた。しかしその攻撃は、火に油を注ぐようなものだった。

目障りなヒノアラシにナットレイは怒り、パワーウィップで攻撃した。

『う、うわー！』

その攻撃は幸いにも小さな体のヒノアラシをとらえる事はできなかつた。

『……調子に…乗るなよー！』

ナットレイがヒノアラシに氣をとられている内に、「ゴウカザルが

背後から大文字で攻撃した。

『……』

草、鋼タイプのナットレイは、炎タイプの技で凄まじいほどの大メージを受ける。大文字を食らったナットレイは、その場に倒れた。直撃した体の部分は溶けてしまっていた。

『やつた…みたい…?』

倒れているナットレイを見て、ヒノアラシはそう呟いた。

「ゴウカザル!」

レインはゴウカザルに駆け寄った。

「ゴウカザル! 大丈夫! ?」

息を切らしているゴウカザルは、もはや返事をする元気もないようだ。

とりあえずレインは、ゴウカザルをモンスター・ボールに戻した。

「ヒノアラシ」

その頃ハイクは、ヒノアラシに声をかけていた。

「よく頑張ったな。凄かったよ

『そ…そんな…ボクはほとんど何もしてませんよ…』

ヒノアラシは少し照れた様子で、そう言つた。

『……マダ終ワツテナイ』

気がつくと、ローブの人物は倒れているナットレイの近くまで来ていた。

「……レイン達の勝ちだろ」

ハイクはそう言つたが、ローブの人物は無視した。ローブの人物は、ナットレイの前で両手を広げた。するとローブの人物の胸の辺りが不気味に輝き出した。

「！ 何をする氣だ……！」

輝きが増したかと思うと、その場所に何か紅い物体が出現した。

「何……あれ……？ 石……？」

レインの言う通り、それは石にも見えた。そしてその石から、不気味な波動が放出されたかと思うと、みる内にナットレイを包んだ。

「……これって、レジロックの時と似たようなパターンじゃ……」

その通りだった。倒れていたナットレイがゆっくりと立ち上がる。

「やつぱり……」

『……グ……グオオ……』

しかしナットレイは、立ち上がると同時に急に苦しみだした。

「今度は何だ……！」

『ガ……ガガガ……』

ナットレイはそのまま苦しみ続け、やがて倒れた。と、同時にローブの人物の体が、砂になり、崩れた。

「！ どうしたんだ、一体……！」

ハイクは砂となつたローブの人物をまじまじと見た後、砂に触つてみた。とてもサラサラしており、これが動いていたとは考えられない。

「ハイク！ ……」のナットレイ……」

レインがナットレイを見ながらハイクを呼んだ。ハイクもナットレイを見てみた。するとある事に気づく。

「……死んでる……！」

ナットレイの瞳は完全に光を失つており、体を搖さぶつても全く反応がなかつた。

ハイク達は驚愕した。レインは目を大きく開き、両手で口を覆っているほどだ。

「何だよこれ……。コイツに何があつたんだよ……！」

ハイクはもどかしさを感じていた。

ガサガサ…

すると、ジムの奥からまた複数の草タイプポケモンが現れた。

「！　レインは戻れ！後は俺達がやる…！」

ゴウカザルの事もあるので、ハイクはレインに戻る事をすすめる。

「無茶言わないで！　ランクルス！」

しかしレインは、モンスター・ボールから緑色の細胞の様な姿をしたポケモン、ランクルスを出しながらも、ハイクの提案を拒否した。

「サイコキネシス！」

ランクルスはサイコキネシスを使った。サイコキネシスを食らったポケモン達は苦しみだし、足を止めた。

「私も一緒に行く！」

レインは決意に満ちた眼差しでハイクを見ながら、そう言った。

「！…分かった、行こう！」

レインの決意を感じたハイクは、ヒノアラシをモンスター・ボールに戻し、ポケモン達が止まっている隙にポケモンジムのさらに奥へと走り出した。

異常な力（後書き）

「」や『』で技名を言つてゐる所がありますが、技名を言つてゐるのは基本トレーナーの方です。はい。

感想、待つてます！

“草”の知識陣（前書き）

今回ばかりはかなりグダグタだと思います。

ヒノアラシ『こんな作者でいいません…』

はい…。

“草”の召喚陣

ローブの人物を倒したハイク達は、ポケモンが溢れてくる根源を探すべく、ジムを進んでいた。途中、やはり何度かポケモンに襲われた。それも全て草タイプだ。これには何か意味があるのでろうか？

「……どこまで続くんだ……？」

木々が生い茂っているせいで、歩きにくい、という事もあるだろうが、それでも長いような気がした。

そして最後の木の枝を押しのけると、少し広い場所に出た。

「……これは……！」

そこには床が一部分だけキレイに草が生えておらず、代わりに緑色の魔法陣の様なものが描かれていた。

「……何かいる……」

その魔法陣の中心に、小さなポケモンらしき者が、佇んでいた。
見たことのないポケモンだった。まず目に入ったのは、頭部のピンク色の花の様な物だ。左右1つずつついている。

そして背中の体毛だ。草を思わせる形と色をしていた。もし、このポケモンが、花畠の真ん中で体を丸めていたら、誰も気づかないかもしれない。

『……』

それまで田をつぶっていたそのポケモンはゆっくりと田を開いた。すると魔法陣の端の方が輝きだした。

「！ な……何を……！？」

輝きがどんどん増していく。しかし突然、その輝きが消えた。代わりに輝いてた場所には新たなポケモンが出現していた。主にクサイハナやフシギソウだ。

「あ……アイツがポケモンを呼び出してるのー…？」

レインがそう言った。

それはまるでポケモンがポケモンを“召喚”している様だった。

『グオオ……』

召喚されたポケモンは、すぐにハイク達に襲いかかってきた。

「！ ランクルス、サイコキネ시스！」

レインのランクルスはサイコキネ시스を使った。しかし、その一撃だけではポケモンは倒れなかつた。

『ま……まだまだ……、最大出力！』

ランクルスはそう言い、さらにサイコキネ시스を放つ。召喚されたポケモン達は、その攻撃に耐えきれず、たちまち倒れた。

『…………』

すると、魔法陣の緑の輝きが弱まり、それまでたたずんでいた草のポケモンが動き始めた。

「だぶんアイツを倒さないと、ポケモン達は止まらない！」

ハイクは、レインにそう言った。レインは、うなずいて答えた。

『…………』

草のポケモンは、1歩1歩、歩きながら近づいてくる。

「ペヨピヨパンチ！」

ランクルスは拳を握りしめ、草のポケモンに殴りかかった。

『先手必勝！』

しかし草のポケモンは、素早い動きで難なくかわした。

「早い……！」

ハイクは思わずつぶやいてしまった。

「次、サイコキネシス！」

ランクルスはサイコキネシスを放つ。しかし、草のポケモンにはあまり効いていないようだ。。

「効いてないのー?』

『…………！』

次の瞬間、草のポケモンから衝撃波のようなものが放たれ、ランクルスを襲つた。

『な……！？うわあ！』

ランクルスは少し吹っ飛ばされた。

（アイツ、強い……！たとえ攻撃が当たつても倒せないかも……。
なら、一か八か……）

素早く動く草のポケモンは、サイコキネシスを食らつても、ほとんど堪えていなかつた。なら、もっと威力のある技をぶつけるしかない。

「ランクルス……」

レインはランクルスに、次の技を指示した。

「破壊光線」

ランクルスは体の一点に力を集中させた。その後、集中させた力を一気に解き放ち、赤い光線を放つた。
ドーン！という音と共に埃が舞つた。

「やつた！？」

埃のせいでも草のポケモンの姿を確認する事ができないが、流石にこの爆発は避けきれないだろう、と思つた。

「！ まだだ！」

しかし、ハイクは上方を指さしてそう言った。見るとそこには、草のポケモンがほとんど無傷で飛び上がっていた。

「……そんな……！」

レインは肩の力が抜けそうだった。
すると次の瞬間、飛び上がった草のポケモンの目が、紅く輝き出した。

「目が……光ってる……」

そう、ハイクがつぶやいた瞬間、ランクルスの足下から、植物の根の様な物が、出現した。

『な……ー？』

根は、たちまちランクルスの体を拘束した。

『うう……くそ……離せよ……！』

ランクルスはもがいたが、根はビクともしない。

『…………ー！』

着地した草のポケモンは、エナジーボールを放つべく、集中した。
みるみる内にエナジーボールが大きくなっていく。さらにエナジー
ボールは、通常の大きさに達しても、巨大化を続けた。

「…………テカイ！」

エナジーボールの大きさは、通常の2倍ほど……いや、それ以上かもしれない。とにかく、かなり大きくなっていた。

『…………』

草のポケモンは、その巨大なエナジーボール・メガエナジーボールをランクルスに放った。

「ランクルス！ 危ない！！」

体を拘束されているランクルスは、避ける事が出来ず、メガエナジー・ボールをもろ食らつた。

『う…………う…………』

ランクルスは、拘束されたまま意識を失つた。

「そんな……。ランクルスまで……」

レインは、座り込んでしまつた。

「レイン…………！」

ハイクはレインに駆け寄ろうとした。その時、ハイクのモンスター・ボールからヒノアラシが飛び出した。

「ヒノアラシ！？…………また勝手に…………」

『ハイクさん！次はボクが戦います！』

「え！？そんな、無茶だ！」

『ボクだって…戦えるんです！』

そう言いつと、ヒノアラシは草のポケモンの方へ駆け出した。

「ヒノアラシ、止めるー！」

ハイクの言葉を聞かず、ヒノアラシは突き進む。

『食らえー火の…』

『……………』

しかし、ヒノアラシが火の粉を放つ前に、草のポケモンはまた根を出現させた。

『つぐ…ーそ…んな…ー』

根は易々とヒノアラシを捕らえた。

「ヒノアラシー！」

ハイクは胸を突き刺すような感情に襲われた。このままではヒノアラシは…。

『……ハイク』

不意に誰かに話しかけられた。「えっ？」と声を出し、辺りを見渡す。

『俺だ』

するとハイクは、声の主が、ボールの中のジュカインだと気づいた。

「ジュカイン？ 中から話しかけているのか……？」

『出るぞ』

そう言つと、ジュカインはボールから出てきた。

「！ ……大丈夫なのか？ 怪我は……」

ハイクは、今日何度目かの言葉を口にした。ジュカインは何も言わず、草のポケモンの方を見た。

『……後は俺に任せろ』

その後、ジュカインはハイクにそう言つた。

「え？ 何を……」

『あのシェイミは俺が止める』

ジュカインは草のポケモンをシェイミ、と呼んだ。ジュカインはあのポケモンの事を知っているようだ。

「止めるつて……まだ怪我が治つてないじゃないか……！」

『……俺に心配は無用だ……』

ジユカインはやつぱつた後、シハイリに向かって駆け出した。

「ジユカインー！」

ハイクの口の音は、虚しく空を響かせただけだった。

“草”の冒険陣（後書き）

ジユカイン『absolute』

ん？ どうした、ジユカイン？

ジユカイン『この小説のタイトルだが…』

ああ、ポケットモンスター デスティニー ハピソーデー ～憎しみを碎く絆～？

ジユカイン『…長すぎじやないか？』

え、だってそれは、仕方ないじゃないですか。…僕だって結構前から気づいてたし…。

ジユカイン『せめて駄とか考えたりひつだ？』

駄？ うへん…駄ねえ…。

ヒノアラシ『あ、あの…』

「つまー！ヒノアラシ！？」いつの間に…！

ヒノアラシ『ま、前書きの時からいましたよー』

そうだけ？

ヒノアラシ『……駄、ポケエピ、とかどうですか？』

おー・それいいね。 いただき！
と、言ひ訳で… 略してポケヒッパーとこいつ事で(> - <)

深紅のローブ（前書き）

今日はこいつもよつと長めです。頑張りました

ジユカイン『…まあ、最後の方のはなくとも良かつたがな…』

そ、そんな事ないですよ！…たぶん。

深紅のロープ

「現在、ポケモンの進行は尚も止まっておらず、警備隊は苦戦を強いられている状態です。また、ジムの中に飛び込んで行った、ゴウガザルを連れた少年と少女の安否は、まだ分かっておりません」

カナズミジムの前、テレビカメラの前でアナウンサーはそう報道していた。

「ハイク君達…大丈夫かな…？」

それを横目に、ツヅジは何も出来ずにソワソワしていた。
ハイクは一応、ホウエンリーグを制覇した現チャンピオンだ。
まあ、彼の顔を見て、1目でハイクだと分かる人は少ないので。
大丈夫だと思つても、心配してしまつ。

カナズミジムからは何度も爆発音が轟いていた。その度に聞こえる人々の悲鳴。いつもと同じ長さの時間が、今日はより一層長く感じじる。

「早く帰ってきて…」

ツヅジには祈ることしか出来なかつた。

『……行くぞー。』

ジュカインはシェイミに突っ込み、ドラゴンクロード攻撃した。ガンツと地面に叩きつけられる音がしたが、シェイミは素早くそれをかわしていた。

『……速いな』

シェイミの動きを見て、ジュカインは少し感心していた。

「ジュカイン……エナジーボールだ」

と、ハイクはジュカインに話しかけた。

『ハイク……止めに来たかと思つたぞ……』

ジュカインはハイクにそう、言つた。

「……俺、昔からよく誰かに止められても無茶をする、て言われるんだよな。……お前と同じさ。だから、なんとなく気持ちが分かるんだ」

ハイクは、少し笑顔でそつと言つた。

『俺はアンタとは少し違う……。目の前に倒すべき相手がいるから戦っている』

しかしジュークカインはプリツとそっぽを向き、ハイクに応づけた。

「素直じゃないなあ。誰かを助けたい、って言ひちゃえればいいのにさ」

ハイクは苦笑しつつも、そう言つた。

『……悪いな。……俺は不器用なんだ』

ジュークカインは〔冗談めかした口調で〕そう言つた後、もう一度ショイミと向を合つた。

『エナジー・ボール……だつたな?』

ジュークカインはハイクに確認した。

「ああ。アイツは素早く動き回つてゐるから、攻撃を当てるのは難しい。エナジー・ボールで上に飛び上がらせてから、ドラゴンクロールで追撃するんだ。流石に空中じゃ、アイツも自由に動けないだろ?」

ハイクの妙に説得力のある案を聞いたジュークカインは、フツと苦笑した。

『……どうやらアンタがチャンピオンといつ事は本当らしいな』

感心したジュークカインが、そう言つた。

「讃め言葉として受け取つておくよ

その後、ジュカインはハイクの指示通りに、シェイミにエナジーボールを放つた。するとハイクの思った通り、シェイミは上に飛び上がり、攻撃をかわす。

『よし…』

ジュカインも飛び上がり、シェイミに接近した。その後、ジュカインは、ドラゴンクロールを使う為に構える。ジュカインの爪が紅く光り、独特のオーラを放つた。そしてその爪でシェイミに斬りかかつた。やはりシェイミは上手く身動きする事が出来ず、直撃した。シェイミは吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「よし！ 行けるぞ、ジュカイン！」

シェイミにダメージを与えた後、ジュカインは拘束されていたランクルスとヒノアラシの近くに着地した。

そして、何も言わずに拘束していた根をリーフトンファーで斬り裂いた。

『助… かつた…』

ヒノアラシは力なく座り込み、ランクルスは倒れこんだ。

「レイン！ 早くランクルスを！」

それまでほぼ放心状態だったレインはようやく我を取り戻し、ランクルスをボールに戻した。

「うー、ごめんハイク…。私…何だか頭の中が真っ白になつて…」

「大丈夫。無理もないよ」

申し訳なさそうに『ソウルレイン』に対して、ハイクは励ますよう、
そう言った。

ランクルスとヒノアラシを助けた後も、ジュカインはショイミに
攻撃を仕掛けていた。ジュカインのドラゴンクロールを食らい、ダメ
ージが残っているせいか、ショイミは今まで通りに攻撃をかわすが、
動きが鈍くなっているようにも感じる。

『ハ…ハイクさん…』

するとヒノアラシが、ヨロヨロと近づきながらも弱々しくハイク
に声をかけた。

「大丈夫か、ヒノアラシ！？」

心配したハイクは、それに応じる。

『『『めん…なさい。ボク…役に立てなくて…』』』

ヒノアラシは震える声で、ハイクに謝った。

「…お前が責任を感じなくていいんだよ。後はジュカインに任せ
て、お前は休んでてくれ」

そう、ハイクは言った。ヒノアラシはうつむいたまま、モンスター
ボールに戻った。

「やめて…」

ヒノアラシを戻した後、ハイクは立ち上がり、ジュカイン達の方を見た。

その間、ジュカインはシハイミに、攻撃しつづけていた。

『はあー!』

『……………!?

シハイミは「よいよ攻撃が避けきれなくなり、ジュカインのドラゴンクロールに当たった。

『よし、動きが読めてきた…』

ジュカインは手応えを感じていた。

『……………!』

シハイミはヨロヨロと立ち上がると、ジュカインを睨み付けた。するとランクルスの時と同じように、ジュカインの足下から、植物の根が出現した。

『……芸のない奴だな』

ジュカインはそれを察してたかのようにリーフトンファーを構えると、素早く根を斬り裂いた。

『……………!..』

負けじとシハイミも、次々と根を出現させるが、ジュカインはリ

一フトンファードそれを蹴散らしつつ、ショイミに接近した。そしてギリギリまで接近してから、渾身のドラゴンクロード攻撃した。ショイミは避ける事が出来ず、吹っ飛ばされた。

「よし、何とか押してるな……」

『！　へ？　…』

しかし、ジュカインは攻撃した後、顔をしかめて包帯が巻かれている腹部を押さえた。

「ジュカイン？ 傷が痛むのか…？」

ハイクが心配したが、『大丈夫だ』とジュカインは言った。

『それに、見てみり…』

「え？」

ショイミはまた根で攻撃して来たが、難なく斬り裂いた。するとショイミも、顔をしかめてフワツいていた。

『エナジー・プラント。奴は自らの命を削り、植物を異常に成長させている。このままじゃ自滅するだろう』

ジュカインはストレートにそう、言った。

「そんなー早く止めないと…」

しかしハイクは、相手が命を狙つて襲いかかっているのにも関わ

「うあ、ショイミの命を心配していた。

『……やつぱり、アンタ、変わってるな……』

ジュカインは苦笑しながら呟いた。

「へ……？」

『だが、俺は嫌いじゃないがな。やつこいつの……』

そう言つと、ジュカインはショイミに最後の攻撃を仕掛けに行つた。エナジープラントの使いすぎのせいでフラついていたショイミは、ジュカインのドラゴンクロールを避ける事が出来ず、吹っ飛ばされた。ショイミは、魔法陣の近くまで飛ばされ、意識を失つた。

「やつた！」

レインは弾けるよつて、元々ついた。

『心配するな。死んでない』

ハイクに気を使つたのか、ジュカインはやついた。

「……やつぱり似てるよ。俺とお前……」

ハイクはジュカインの好意が嬉しかつた。次々と起る事態を前に憂つていた心が、少し晴れる瞬間だつた。

「一 ハイク！」

その時、レインは驚いた様子でハイクに声をかけた。

「どうした、レイ……！」

レインの名前を言い切る前に、驚いている理由が分かつた。魔法陣が、また輝いているのだ。

「今度は……なんだよ……」

そこに現れたのは、1人の人物だった。先程 戦ったロープの人物と似たロープを着ているが、深紅の色をしている。顔は、やはりフードを深くかぶっているため、確認することが出来なかつた。

「！ お前は……？」

ハイクが問いかけたが、深紅のロープの人物は無視し、倒れているシェイミを担ぎ上げた。そして振り返り、魔法陣に向けて歩きだした。

「待て！」

ハイクが引き留めようと声をかけたが、深紅のロープの人物は、チラッとこちらの方を向いただけで、歩き続けた。

深紅のロープの人物は、魔法陣の中央で立ち止まり、魔法陣に手をかざした。すると魔法陣は、今まで以上につよく輝き出した。

「！ くっ……」

ハイク達は、思わず手で顔を覆つた。

－－輝きがおさまった頃には、深紅のロープの人物も、シェイ

『も、魔法陣までもが消えてしまつていた。

「消えた……!?」

驚きのあまり、それ以外の言葉が見つかなかつた。

メキメキ…

「！ 何の音だ！？」

今度は、妙な音が空間に響いた。

「あ、あれ！」

レインが指差す方を見ると、音の正体が分かつた。シェイミによつて異常に成長してしまつた植物が、急激に枯れて崩れしていく音だつた。

「ヤバくない、これ！？」

このままでは、枯れた木々の下敷きになつてしまつ。

『……こっちだ』

気がつくと、ジュカインが手招きしていた。そこは一ヵ所だけ草木が生えていない場所…魔法陣があつた所だつた。

「レイン！」

ハイクはレインと共に、必死になつてそこをを目指した。

そしてハイク達が辿りついた瞬間、草木が全て枯れ果てた。

「 「……」

ハイク達は、少し原形を取り戻したジムを無言で眺めた。色々な気持ちは入り乱れ、言葉が出なかつた。

「おうい、大丈夫か！？」

ハイク達は、救助隊のその言葉で我を取り戻した。

その後、ハイク達は救助され、ジムから脱出する事に成功した。

ジムの外に出ると、真っ先に駆けつけて来る人物がいた。

「2人とも！よく帰つてきてくれたね…。心配したのよ…」

ツツジだつた。

「す、すみません」

ハイクは申し訳なさそうに謝つた。

「大丈夫ですよー。ホウエンリーグチャンピオンの、ハイクがついていましたからー。」

レインはかなり大きな声で、そう言った。

「ちょ、レインー。声が大きい…」

「え！？君があのチャンピオンのハイク君ー！？」

近くにいた女性がいち早く反応した。

「何！チャンピオンだつて！？」

「チャンピオンがここにいるのか！？」

すると付近の人々がどんどん集まってきた。

「すげーー。本物のチャンピオンだー！」

「お、俺サイン貰おうかな…」

人々は次々と数を増やしていく。

「…だから言わないで欲しかったのに……」

レインを横目に、ハイクはそうつぶやいた。レインは「ごめんねっ」と顔の前で両手を合わせて謝った。ハイクはレインを少し恨んだが、それを見て渋々レインを許してしまった。

その後、ハイクは1時間近く沢山の人々にもみくちゃにされた。
……ある意味 今日で1番疲れる時間だった。

深紅のロープ（後書き）

今回で第2章は終わりです。次回から第3章に突入です！
一応、1章 6話ペースで進んでいます！

ジユカイン「……いつ崩れるか分からぬがな……」

……否定はしない。

ヒノアラシ「いや、そこは否定しなきや駄目ですよー。」

次回をお楽しみに！
感想も待つてます！

深まる絆（前書き）

第3章、突入です！

サブタイトルがなかなか思いつきませんでした…（汗）

「ハア～…疲れた……」

ハイクは、宿のベッドにダイブした。

沢山の人々にもみくちゃにされた後、ハイク達は一度ポケモンセンターに向かつた。レインのゴウカザルとランクルスのためだ。今は、2匹とも意識ははつきりとしているらしく、すぐに良くなるらしい。しかし、念のためもう少し綿密に検査を行うらしく、時間がかかるようだ。その間、レインは「ゴウカザル達のそばにいたい」と、ポケモンセンターに残るらしく、ハイクと彼のポケモンだけが、先に宿に来ていたのだ。

ハイクはチラリと時計を見てみた。：現在、夜の9時。寝るのは早い時間だ。しかし、疲れきったハイクの体に容赦なく睡魔が襲いかかり、今にも眠ってしまいそうだった。

そんな中、ハイクの視界にあるものが入り、眠気が覚めてしまつた。それは宿の小さな部屋で、申し訳なさそうに ちよこんと座る、ヒノアラシの姿だった。

「ヒノアラシ？」

ハイクは体を起こし、ヒノアラシの姿を確認する。

ヒノアラシも、治療を受けたのだが、1番 傷が軽かつたらしく早めに終わり、今はこうしてハイクと共にいた。

『……ハイクさん…あの…えっと…』

ヒノアラシは何かを言おうとしたが、言葉がつまってしまい、う

つむにしてしまつた。…なんとなく氣まずい雰囲気が、辺りを覆う。今の季節は冬。カナヅミジムの一件のせいで火照っていた体が、冬の冷たい空氣によつて冷やされる感覚が気持ちよかつたが、それも氣にならなくなるくらいの重い雰囲気だつた。

『ボク…その…すみませんでした!』

沈黙の末、ヒノアラシが最初に口にした言葉がそれだつた。深々と頭を下げているヒノアラシを見て、ハイクは何故自分が謝られているのか分からなかつた。

「ちよ…ヒノアラシ…ビリじたんだよ、いきなり…」

驚いたハイクが声を上げる。

『だつて…ボク…自分の感情だけに身を任せて…突っ走つて…。皆に迷惑をかけてばかりじゃないですか…』

どうやら先程のショタミの時の事を気にしているようだ。意氣込んで突っ込んだのは良いものの、何も出来ずにやられてしまつた事で、落ち込んでいるらしい。

ピンツと糸を張つたような緊張感の中、ハイクは慰めの言葉を探してゐた。

「…ヒノアラシは頑張つたつて。テッシードの時も…」

『ボクなんか弱虫で…戦いもてんてダメで…役に立つと思つてもすぐに空回りしちゃつ…』

ヒノアラシ耳にはハイクの言葉は全く入つておらず、話はどんどん

んネガティブな方向に進んでしまった。

「（うーん… まぢいな… ビーヴしたら良いんだ…）」

とにかく、ヒノアラシを立ち直りせよと、ハイクは四苦八苦していった。

『……ボクなんて… 何の役にも立てない、使えない奴、ですよね…』

しかし、自分の事をそんなふうに言つヒノアラシの姿を見て、ハイクの中の何かが吹っ切れた。

「そんなことないよ…」

ハイクは思わず むきになり、大きな声を出してしまった。ビクツと驚いたヒノアラシは、愚痴を止めた。

太陽は完全に沈み、部屋の電気もつけていないので、本来なら真っ暗のはずだが、窓から漏れる月や街の明かりのお陰で、視界に不自由は無かつた。

「……確かにヒノアラシは、少し臆病で、戦いなんて向いてないかもしねれない…」

高ぶつた感情を抑えるべく、ハアーと息をはきだしたハイクは、ヒノアラシに、そう語りかけた。

「……でも、ヒノアラシは、俺達の誰にも負けない優しい心を持つてる…。それだけで、十分だよ…」

ハイクは、慰めるようにそう言った。

『優しい…心…？』

「そう…。まだ会つて一日も経つていないのに、苦しめられてるゴウカザルの姿を見て、真剣になつて怒つてくれたじゃないか…。人にも、ポケモンにも、そういう優しい心が必要なんだよ。使える使えないとかじやなくてわ」

『……』

ハイクのまつすぐな眼差しと言葉を受けたヒノアラシは、黙り込んでしまった。

「……もし、借りとか、責任とか感じて俺達について来てくれているんなら、無理に一緒に来なくてもいいんだよ……」

少しの沈黙の後、ハイクはヒノアラシに、そう告げる。

『そんな…そんなんじゃないんです！』

ヒノアラシは焦るように答えた。

『…ボクも…誰かの役に立ちたい…、皆を…助けたいんです！』

ヒノアラシは、心の底から沸き上がる想いを言葉にして、ハイクにぶつけた。

『…だから、もう少しだけ、ハイクさん達と一緒にいてもいいですか…？』

ヒノアラシは、モジモジとハイクに尋ねた。

「……ああ。勿論！でも、もう自分をそんなふうに考へられや駄目だからな

ハイクは笑みを浮かべ、そう答えた。

『…………ありがとうございます！』

ヒノアラシも笑みを浮かべて、それに応じるのだった。

ひつして、ハイク達の旅の1日目の夜が終わった。

……まだまだ多くの謎が残されている。

戦いは、始まつたばかりだ……。

深まる絆（後書き）

今回は短めでしたね。はい。
では、感想、待つてます！

次の目的（前書き）

すいません。更新 遅れました！

そろそろテストなんで、勉強しないとヤバいんで（汗）

今回は、自分が思ったより若干長めでした。

ジユカイン『頑張りました …とか言つなよ…』

…ジユカインが言つと、恐ろしく氣味が悪い……。

それでは、どうぞ！

次の目的

朝日が窓から部屋に注ぎ込む時間、ハイクは田をさました。

「うん……この格好のまま寝ちゃったか…」

ハイクは起きた時の自分の格好を見て、そつづぶやいた。コートも脱がず、鞄も降ろさず眠ってしまったようだ。

ちなみに、ハイクの鞄は大きめのショルダーバッグで、中には空のモンスター・ボールや、傷薬などか入っている。（傷薬は切らしているようだが。）ハイクは、出かける時いつもこのバッグを持つている。本人曰く、何かあった時に便利だかららしい。忠実な人物だ。

『……起きたか』

フと見ると、ジュカインがモンスター・ボールから出ている事に気づく。

「ジュカイン？」

ジュカインは、腕を組んで部屋の壁に寄り掛かっていた。

『……全く、アンタは見れば見るほど変わった奴だな』

ジュカインはフッと苦笑しつつ、ハイクにそう言った。

「へ…？」

『昨日のヒノアラシの事だ』

「あ……あ。聞こえてたのか。……そんなに変わってるかな……？」

ハイクは少し考え込んだ。

『少なくとも、かなりのお人好しだな……』

ジュカインがからかうように、そう言った。それを聞いたハイクも、苦笑して返した。

『……それで、これからどうするんだ？』

「あら、さすがに、ハイクは、いつも表情に戻ると、ハイクにそう尋ねた。

「う……ん、まずは情報収集かな。この手がかりも見つけないといけないし……」

昨日の数時間で色々な事がありすぎて手が回らなかつたが、これを探すといつも一番の目的は果たされていない。

「わへと……」

現在AM8:00。まだ出かけるのには早い時間だが、ただボーッとしているのももつたないので、外に出る事にした。
ジュカインをボールに戻し、部屋を出てフロントの方へと向かつた。

「あ、ハイク。おはよつ

そして、フロントのソファーに腰掛けているレインに声をかけられた。

「レイン！ いつ帰つて来たんだ？ ゴウカザル達は…」

昨日、一人レインは、ポケモンセンターに残つたので、ハイクはその事が気になつた。

「うん、昨日の夜の10時半くらいかな…。ゴウカザル達はもう大丈夫だつて！」

笑顔で話すレインを見て、ハイクはホッとした。

「そうか…。良かつたな。大きな怪我にならなくて」

ハイクも笑顔で、そう答えた。

「…俺は力ナズミシティでの手がかりを探しに行くけど…、レインはどうする？」

と、ハイクはレインに尋ねた。まだ朝早いので、無理に行く必要が無いからだ。

「あ…、Nの事、忘れてた…。うん、私も行くよ」

レインはすっかりNの事を忘れてたらしい。ハイクは少し呆れた反面、色々とあつたからしょうがないか、といつ気持ちもあつた。

「じゃあ、行こう」

ハイク達は、宿を後にした。

冬の朝は寒かった。肌を刺すような冷たい空気がハイク達を襲う。1歩 歩く度に、顔などの肌が露出している部分が冷やされていく。その寒さに耐えつつ、ハイク達はNを探した。

まだ早い時間のハズなのだが、意外と人通りは多い。街の賑やかさが収まる時間は遅いが、目覚める時間は早いようだ。

カナズミシティを回り、Nの事を聞いて回ったが、やはり有力な情報は手に入らなかつた。

「はあ…」

思わず溜め息が出るほどだ。

そんな事をしている内に、カナズミジムの前まで来ていた。

「…シッジさん?」

そこには、ジムリーダーのシッジがいた。

「あ、2人とも、おはよー。早いね」

ハイク達に気づいたツツジがそう言った。

「おはようございます。……どうですか、ジムのまつは…？」

ハイクは静まりかえったポケモンジムを見て、ツツジに尋ねた。

「……まだ復興が終わってなくて…。しばらく中には入れないわね」

ツツジはそう答えた。

「大変そうですね…」

「でも、ハイク君達のお陰で助かつたわ。ありがとうございます」

「へ?あ、いや…。俺の方こそ…、無茶して…。心配かけてすみませんでした」

昨日の事を思い出し、懶く思つたハイクは謝つた。

「いいのよ。帰つて来てくれたんだし…」

しかし、ツツジはそう言つてくれた。それを聞いたハイクの表情が、少し晴れた。

「とにかくツツジさん。ちょっと聞きたい事があるんですけど…」

すると、レインが口を開いた。

「何？私に分かる事なら、答えるよ」

「ありがとうございます。私達、人を探してて…」

「人？どんな人なの？」

「え…と、髪は緑色で長くて、黒っぽい帽子に白い上着を来た男の人なんですけど…」

レインはNの特徴を説明した。

「うーん…見たことないね…。そんな人…」

「そう…ですか」

結局、ツヅジからも有力な情報は得られなかつた。

その後、ツヅジと別れたハイク達は、カナズミシティのデパートに来ていた。何だかんだでもう10時になつていた。

カナズミデパートは、ミナモデパートほどではないが、結構大きいえに、色々な商品が揃つていて便利なデパートだ。

ハイクは、切らして『この傷薬を買いたい』立ち寄ったのだ。

「うーん、すごい傷薬でいいかな…。満タンの薬はどうようと高いし…」

ハイクが傷薬を選んでいると、

「見てーー！ハイク、もふもふーー」

近くのファンシーショップから、ムンナのぬいぐるみを抱えたレインが、そう言った。

「ムンナのぬいぐるみ？どれどれ…」

ハイクもぬいぐるみに触つてみた。

「おお、本当だ。気持ちいいな

なんとも言えない感触に、思わず表情が緩む。

周囲から見れば、2人はカップルのようだが、そういう事に関してはかなり鈍感なハイクと、やや呑気なレインは、あまり気にしない。

そんなこんなで、すごい傷薬をいくつか買い、カナズミテパートから出た。

「…これからどうする？」

レインが尋ねたが、ハイクは答える事が出来なかつた。完全に手がかりもないのに、何処に行つたら良いものか…。

『……ハイク』

考えてると、モンスター・ボールからジュカインが出てきた。

「ジュカイン？…いい加減、勝手に出るの止めろって…」

『115番道路だ』

「え？」

『力を貸してくれそうな奴を知つていて。115番道路に向かつ
てくれ』

珍しくジュカインの方から要求してきたので、ハイクは少し驚いた。

115番道路と言えば、カナズミシティを出て、すぐの所だ。

「115番道路か…。よし、そこに向かおつ」

とりあえず一行は、115番道路に向かう事にした。

次の目的（後書き）

ヒノアラシ『ほのぼのって感じでしたね』

：たまにはいいですよね？

感想、書いて頂けるとすぐ嬉しいです！

ジュカイン『いまだに〇件だしな…』

き、気にしてる事を…！

本郷ヒロヒコ（著者）

他の作者さんの小説を、読ませて頂きました。5000文字や、8000文字超えしている方、結構いますね。
僕もそんな小説を書いてみたいな……、と思いますが、なかなか実現できずになります（涙）

本当に想つていいこと

ハイク達は、115番道路に来ていた。ジュカインが言つには、ここに力を貸してくれそうな人がいるらしい。今のハイクの戦力では、この先戦つていくのには少し不安があつた。

ジュカインは力を奪われたままだし、ヒノアラシは戦いにはてんで向いてない。そんな彼らを無理に戦いに投じる訳にはいかないのだ。

そもそも敵が1人なのか、複数いるのかも分からぬ状況だ。そんな中での戦力の増強は、ありがたかつた。ひょっとしたらNの手がかりも得る事が出来るかもしれない。

115番道路はカナズミシティの北側の出入り口から出た所にある道路だ。木々に囲まれた道を抜けると、明るい青の海が見えてくる。夏には海水浴をするために、沢山の人々が集まり、盛り上がりを見せる。この辺では有名なスポットだ。もつとも、現在の季節は冬なので人は誰もいないが……。

と、思つたが、そこには人の代わりに1匹のポケモンがいた。青い体に、灰色で固そうな甲羅を背負つてゐる。首は長く、頭には小さな角を思わせる突起物がついていた。

「あのポケモンが力を貸してくれそつていづ……」

『……そうだ。俺の友人でな……』

ハイクとレインは、そのポケモンを知つていた。結構有名なポケモンだ。

タイプは水と氷で、乗り物ポケモンとも称されるポケモン、ラプラスだった。

体長はかなり大きく、背中の甲羅には、ハイクとレインぐらいなら、樂々と乗れてしまいそうだ。まさに、乗り物ポケモンという名前にふさわしいポケモンだらう。

『……待つていましたよ……貴方達を……』

「え……？」

ラプラスはゆっくりと目を閉じ、ハイク達にそう告げた。
待つっていた、とはどういう意味なのだろう？

声と雰囲気からして、恐らく雌だらう。静かなしゃべり方からも分かるように、人のいい性格のようだが、どこだか不思議な雰囲気をだしている部分もあつた。

『……そんな不思議そうな顔をしないで下さい。……貴方達の噂は聞いていますから。……ハイクに、レイン、ですよね？』

ハイクの妙な視線を感じたのか、ラプラスは苦笑しつつ、そう言った。

「噂……？」

噂を聞いている、と言つ言葉にもハイクは疑問を感じた。
ハイク達がミシロタウンから旅立つたのは昨日だ。たつた一日でこんな所にまで噂が広がるものなのだろうか？

『……ラプラスは顔が広いんだ』

そんな疑問にジュカインが答えた。

「……どんだけ広いんだよ！」と思わずツッコみやうになつたが、初対面のラプラスにいきなりツッコム訳もいかないので、ハイクは我慢した。

『『そして、ハイク…。貴方が私達ポケモンと会話が出来る、という事も、知っています』』

「…知つていたのか…」

ハイクは少し驚いた。一体誰から聞いたのだ？

『…ところで、ラプラス』

そこで、ジュカインが本題を持ち掛けた。2匹の表情が、真剣なものになる。

『あんたも気づいているだろ。ホウエンの異変に…』

ジュカインの問いかけに対し、ラプラスは『ええ…』とうなずいて答えた。

『……昨日から、ですか。急に風の流れが変わりました。と、同時に感じた事のない異常な力が、この、ホウエンから流れてくる事を感じました。……強力すぎる力です。この力を感じた私以外のポケモンは、怯えてホウエンから離れていきました…』

ラプラスの話の内容は、ハイクにとつていまいちピンつっこなかつたが、ホウエン地方に異変が起きている、という所は理解出来た。

そんな事は、ハイクでも感じていた。急に目の前に伝説級のポケモンが現れ、自分に襲いかかってきたし、本来 生息していないポケモンも、ハイクの前に立ちふさがった。……目の前で、ポケモンが息絶えた事もあった。今 思い出してみると本当に酷い状況だった。感情が高ぶり、握る拳にも自然と力が入る。

ホウエン地方は、一体どうなってしまったのだろうか？

「…君は知っているのか？」

ハイクはラプラスに尋ねた。

「…ホウエン地方の異変の、全ての根源を……」

なんとしても根源を絶たなければならない。これ以上、被害を増やしたくなかったのだ。

しかしラプラスは、首を横に振つた。

『…残念ながらそこまでは…。分かつてているのは、あのポケモン達は力に捕らわれ、己を見失つている、という事だけです』

「…ちから…」

異常な力。紅い波動。ローブの人物。カナズミジムで起きた出来事は、これから先 忘れられそうにない。

自分の意思ではなく、何者かの命令を忠実に実行しているだけのポケモン。彼らは、まるで心を失つてしまつたかのような瞳をしていた。

それがラプラスの言つ 力 の影響なのだろうか？

そもそも、あの紅い石はなんだつたんだ？あの石の波動のせいでナットレイは 力 を手にしてしまった。そして息絶えた。それは明確な事実だ。

と、いう事は、あの石がラプラスの言う 力 の正体なのだろうか？

……考へても分からぬ。今は情報が少なすぎるのだ。

『 …ラプラス…。力を貸してくれないか… …？』

すると、ハイクが言おうと思つていた事を、先にジュカインに言われてしまつた。

『 …すべての根源を見つけるためにも、あなたの力が必要なんだ』

鋭い眼差し、真剣な口調でジュカインはラプラスにそう提案した。

『 …私も、そのつもりでここに来たんです…』

しかしラプラスからは、あっけなく答えが返つてきた。

『 …私も、故郷であるホウエンのために何か出来る事をしたい。そう思つてたんですね。…しかし、私1人の力じゃ何もできず、もどかしさを感じつしました。…そんな中、貴方達の噂を耳にしました。力に捕らわれてしまつたポケモン達を前にしても物ともせず、平和を取り戻すため、眞実を追い求めて前に進む…。そんな話を聞いて、自分がついていけるのは彼らしかいない…。そう思つたんです』

そんな風に思つてゐたのか。ハイクは思つた。

しかし、少し大袈裟かもしない。

真実を知りたい、と言つ事は事実だが、ホウエン地方を救うとなると、微妙なところだ。

ハイクはヒーローでは無いのだ。

『……ですから、微力ながら私の力も使って下さい……』

ラプラスは、頭を下げてそう言つた。こっちがお願いするつもりだったのに、逆にお願いされてしまったのだ。

「……俺なんかで……いいのか？」

しかし、ハイクは自信をなくしてはいた。自分はラプラスが思つほど、強くないのだ。

「……確かに、救えるものなら救いたい……。けど、自信がないんだ。
……俺は……、君が思つているほど、強くない……」

そもそも、自分は本当にホウエン地方を救いたいと、思つているのだろうか？ただの自己満足ではないか？
そう思つと、不安になつてきていた。

しかし、ラプラスはそんなハイクを見て、優しく微笑み、

『……私は貴方に引かれた訳ではありません……。貴方の、心に
引かれたのです。……皆を救いたい。そんな、優しい心に……』

そう答えた。

ラプラスの言葉を聞き、ハイクの心が揺らぐ。

ハイク自身も、本当に思つてゐるか自信がなかつた事を、信じてくれたのだ。

「……優しい心……か。俺自信も迷つていた……俺の心を……信じてくれている人がいる……。なら……俺は……」

信じてくれている人がいる。なら、その気持ちを裏切りたくない。

……俺は救いたい。助けたいんだ。……ホウエン地方も……。俺を信じてくれている皆も……。

今のハイクは、心の底からそう思つていた。

自信なんて関係ない。救いたいと言つ心だけでも、道は開けるのだ。

「……分かった

ハイクはラプラスに告げた。

「……君がよければ……俺と……一緒に行こう……。」

彼女も自分と同じだ。誰かの力になりたいと思つてゐる。皆を救いたいと思つてゐる。

そう思つてゐると、不思議とその言葉が溢れてきた。

ハイクの言葉に対し、ラプラスはうなずいて応じた。

ハイクはモンスター・ボールを取りだし、ラプラスにかざす。ボールから放たれた赤い光がラプラスの体を包み、ボールに吸い込まれていく。

ボールは何度かコトコトと動き、やがて動きを止めた。

「…………」

ハイクはその様子を無言で見つめていた。

「ねえ、何だって？」

話の内容が気になつたレインが、そう尋ねてきた。

「分かつたんだ。……俺の心が……」

ハイクはレインに、それだけを伝えた。

今はそれ以外の言葉を言つてしまつては、いけないと思ったから

。

本多忠重（後書き）

何か気になる点がござりこまつたは、お気軽に感想の所でお書き下さい。
お願いします。

2つの道と2つの戦い（前編）

更新遅れましたーすこませんm(ーー)m

『プラス』もはや、2日ご一話ペースがかなり崩れていますね

…はい。

それでは、どうぞ！

2つの道とも一つの戦い

ラプラスを仲間に加えた後、話はこれからどうするのか、といつ方向になつた。ラプラスも、Nについては何も知らないようで、手がかりが何もない事に変わりはなかつた。

「なあ、レイン。俺の手持ちも充実してきたし、ここは2手に分かれてみないか？」

ハイクは思い切つてレインにそう提案した。

この広いホウエン地方で、2人でかたまつてNを探していくは、らちが明かない。手分けして情報収集した方が有効だと考えたのだ。自分が無理を言つてているのは分かつていて。しかし、一刻も早くNを見つけたいこの状況で、この提案をレインに承知してほしかつた。

「…うん、私もそうした方がいいと思う。携帯もあるから、連絡もとしあえるしね」

しかしレインは、あつさりと提案を呑んだ。ビジやラハイクと同じことを考えていたようだ。これなら話が早い。

「それじゃあ、さつそく分かれて行動しそう。レインは、このままハジックタウンの方向に向かってくれ。俺は116番道路に行く

と、ハイクはレインに言つた。

ハジックタウンは、115番道路を北に進んだ所のある「流星の滝」を越えた所にある農村だ。116番道路は、カナズミシティの

北西の出入り口を出た所にある道路なので、一度カナズミシティに戻らなくてはならない。なので、ここでレインと別れる必要があった。

「うん。じゃあここでお別れだね」

「ああ。何かあったら、携帯に連絡くれ

「分かった。じゃあ、私もう行くね」

「うん。気をつけろよ

「ハイクもね」

こうして2人は分かれて行動することになった。しかし、この時はまだ、この先ハイクに大きな悲劇が襲うという事を、知る予知もなかった。

時は、1日前の黄昏時に遡る……。

1人の青年が、104番道路からカナズミシティの様子を窺つていた。背中からは冷たい汗が流れ落ちている。かなり焦っている雰

困気だつた。

ホウエン地方の異変が起つてから、もうだいぶ経つ。ミシロタウンの次はカナズミティまでもが被害を受けていた。

彼の傍らには、1匹のポケモンがいた。2本脚で直立している、黒い狐のような姿をしており、頭の長くて赤い体毛は、まるで髪の毛のように揃えられていた。体長は青年よりも小さめだ。

「くそ……こんな事が……まさか本当に予言が……」

青年はそう、ブツブツとつぶやいていた。

今は治まっているようだが、カナズミジムの方からは、ポケモンの鳴き声と、爆音が轟いていた。自ら赴いて真相を確かめたいが、今、自分の姿を見られるのはまずい。自分の横にいるポケモンの力を使えば、なんとかごまかせるかもしれないが、騒ぎに巻き込まれた場合は対処しきれない。

行く、行かないという言葉が、自分の中で振子のように揺らいでいた。その時、また爆発音が轟き、人々の悲鳴が木霊した後、ある少女と少年の声が青年の耳に飛び込んできた。

「ハイク！？」

「ポケモンジムに突入する！中に絶対 何か原因があるはずだ！」

ハイクだつて！？まさか彼がここに…？ジムに突入なんて、そんな無茶な…！

青年はいてもたつてもいられず、飛び出して行きそうになつた。しかしそんな感情も、背後から聞こえた何かの物音によつて抑え込

まれた。

「！ 誰だー？」

「ひいっ！」

物音の正体は、白衣を着た研究員のような姿をした1人の男だった。どうやら、手に持ったトランクケースを何処かに運ぼうとしていたようだ。

男は、青年の姿を見たとたん、カナズミシティに走って逃げ込んだ。

「待てー！」

青年も走つて男を追つた。彼の後に、黒い狐のポケモンも続く。男は、路地裏に逃げ込み、青年を振り切ろうとした。しかし行き止まりにまで来てしまい、立ち往生してしまった。やがて青年は男に追いついた。

「や……やめぬ…。来るなあー！」

男は後ずさりしつつ、青年に叫んだ。

「落ち着いて…。なんで逃げたりしたんだ？」

青年が質問したが、男は聞く耳を持たない。抵抗するかのように、モンスター ボールを取り出し、ポケモンをくり出した。棺桶のような姿をしたポケモン、デスカーンだった。

「…くそ…。ゾロアーク！」

ゾロアークと呼ばれた黒い狐のポケモンは、青年の前に出てきた。グルル…と唸り声を上げ、デスカーンに威嚇している。

「で…デスカーン、し…シャドーボール！」

先に動いたのはデスカーンだ。黒い球体をゾロアークに向けて放つた。

「ゾロアーク、かわせ！」

ゾロアークは大きくサイドステップで難なくそれをかわした。

「そ…そんな…。もう一発…」

男はもう一度デスカーンにシャドーボールを使つよう、指示した。

「ゾロアーク、影分身だ」

しかしそれより早く、ゾロアークが影分身を使用した。ゾロアークの体が霞み、次々と分身を生み出していく。デスカーンは狙いを定める事ができず、辺りをキョロキョロと見てている。

「ナイトバースト！」

その隙にゾロアークは、デスカーンに暗黒の衝撃波を飛ばし攻撃した。

効果抜群。ナイトバーストを食らつたデスカーンは倒れた。

「ば…馬鹿な…」

男は、信じられない というような顔をし、へナへナと尻餅をついた。その際、手に持っていたトランクケースを地面に落としてしまった。地面に落ちたトランクケースはガラガラと音を立てて滑り、青年の足元で動きを止めた。

「？…トランクケース？」

青年はトランクケースを拾い上げ、フタを開けて中を確認しようとした。

「ま、待て！中を見ては…」

男が止めようとしたが、青年は無視し、ケースを開けた。

「…なんだ、これ？」

中には不気味に紅く輝く石が入った、透明なケースが6つ入っていた。見る限り、決していい物とは言えないだろう。

「これは一体なんだ！？どこに運ぼうとしていた！？」

青年は男に質問した。思わず声にも力が入る。

男は、ビクッと体を震わせてから、

「し、知らない！私はただ白いローブの男に、それを115番道 路まで運んでくれと頼まれただけだ！本當だ！だから助けてくれえ！」

と言つた。

「白いローブの男……？」

青年は話のその部分が気にかかつた。白いローブの男とは、誰のことだろ？

「そ、そうだ！ その石……」

すると男は石を指しながら、しゃべりだした。

「それから出る特殊な波動が、ポケモン達を凶暴化させているみたいなんだ！」

「……なんだって……？」

それを聞いた青年は驚愕した。

石から出る波動がポケモン達を凶暴化させている…どういう事だ？ そもそもなんでこの男はそんな事を知ってるんだ？

青年は疑問に思つたが、深く追求はしなかつた。

「……分かった。もういいともいい」

男はこれ以上、何も知つてそうになかったので、青年は男を逃がす事にした。男はそれを聞いた途端、慌てて立ち上がり、デスカーンをボールに戻してから、そそぐとその場から立ち去つた。

何が起きている？ くそつ！ 情報が少なすぎる……一度調べた方がよさそうだな……。

青年…乙は石を眺めながら、そう思った。

その後、彼はすぐに、カナズミシティを後にした。
は禁物だ。

……………長居

2つの道ともひ一つの戦い（後書き）

物凄くグダグダ……すいません。

では、感想、待つてます！

passed memory - 異変の一皿 - (前書き)

更新速度がグチャグチャ…（焦）

今回の話は、ハイクと再会する直前のジユカインについて書いてみました。

それでは、どうぞ！

101番道路には、1匹のポケモンが歩いていた。

緑色の体は170?くらいの大きさで、葉を模したような大きな尻尾。密林ポケモンとも言われているポケモン、ジュカインだ。

しかし、彼には他のジュカインとは異なる部分が一つある。それは右目にある大きな傷だ。この傷のせいで、右目は全く使い物にならないが、彼自身、不便には思つてなかつた。

正直、何故こんな傷ができるてしまったのかも、はつきりとは覚えていない。ただ、それを思い出そうとすると、この右目の傷が疼く、という事だけは確かだ。まるで、思い出すのを拒んでいるかのように……。

『……あの町は……』

すると彼の目の前に、ミシロタウンが見えてきた。大きな町ではないが、それなりに区画整備が進んでいる、なかなかいい町だ。まあ、ポケモンであるジュカインにとって、区画整備の進みぐあいなどは、あまり関係ないのだが。

そんな事よりも、ジュカインには気になる事があった。

『……まさか本当に帰つてしまつとはな……あれからもう5年か……』

そう、あの町はジュカインの故郷なのだ。5年前までは、ジュカインには主人がいた。しかし、彼はジュカインにある事を告げた後、行方不明になつてしまつたのだ。

「家族を守つてくれ」その一言だけを残して……。

『家族を守れ、か…。俺はあいつらを守れるほど…強くなつたのか…?』

ジュカインは拳を握りしめ、そうつづやいた。

あの時の自分は、彼らを守れるほどのは、持つてなかつた。力がないのなら、手に入れるしかない。そう思つたジュカインはミシロタウンを飛び出し、今まで自らを鍛えていたのだ。

ハアと息を吐いた後、ジュカインはもう一度ミシロタウンを見据えた。そろそろ帰つてもいい。そう思つていたのだ。しかし、久しぶりに帰るとなると、なんとなく照れくさいような気がしていた。

『…フツ。全く…、何を考えているんだ俺は…』

ジュカインはらしくない自分に気づき、苦笑していた。そんな事をつぶやいた後、決心がついたジュカインは、ミシロタウンに向けて歩き始めた。…その時だった。

『一』

ドーン！

炎を纏つた何かが、ジュカインに突進してきた。敵の強襲にいち早く気づいたジュカインは、素早い動きで、なんとかそれをかわしていた。

ジュカインの動きを捉える事が出来なかつた何かは、地面に激突。辺りを砂埃が立ち籠めた。

『何だ…?』

二トロチャージで突進してきた何かの正体を確かめるべく、ジュカインは砂埃の中の様子を探つた。しかし、思ったより砂埃は濃く、なかなか中の様子は分からぬ。

ジュカインが少しいら立ちを感じていたその時、そのいら立ちを払つかのように砂埃は消え、何かの姿があらわになつた。

『……ウルガモスか』

そのポケモンの特徴を一言で言うなら、巨大な蛾 だった。

まず目に入るのは、背中の羽だ。赤とオレンジの鮮やかな羽が左右3枚ずつ、計6枚生えており、その羽の所々に、灰色の斑点模様がついていた。そして、巨大な体。体長はジュカインよりも小さめだが、虫タイプポケモンの中ではかなり大きなサイズだ。虫が苦手でなくとも、思わず顔をしかめてしまう。

羽を広げた姿や、古い言い伝えから、太陽ポケモンとも称されている。

ウルガモスは、羽を大きく羽ばたかせ、空中に浮かんでいた。その羽からでる風圧はかなりのもので、そのせいで砂埃が一気に吹き飛んだのだ。

しかしながらウルガモスが、こんな所にいるのだろう？滅多に見る事が出来ないポケモンで、伝説のポケモンに近い存在だ。そんなポケモンが、ここ101番道路にいるはずないのだ。

考えていたその時、ウルガモスがまた動き出し、ジュカインに襲いかつってきた。

『くつ……！』

ウルガモスは羽を細かく揺らし、その振動で音波を発生させて攻撃してきた。

その攻撃、虫のざめきは目に見えない技なので、ジュカインには防ぐ手段が無かった。

『……くそ……急になんだ？なぜ攻撃してくる……！？』

虫のざめきの影響で頭痛を感じながらも、ジュカインはそこが疑問に思った。ウルガモスに襲われるような事など、していないのだ。

『…………』

次にウルガモスは、炎の渦で攻撃してきた。特に鳴き声も上げず、ただ淡々と攻撃しているので、よけいに不気味に感じる。

『チツ……』

ジュカインはギリギリでその攻撃をかわし、反撃すべくウルガモスに接近、その後、ドラゴンクロールで攻撃した。

ドラゴンクロールをもろに受けたウルガモスは吹き飛ばされ、木に叩きつけられた。

『やったか？』

ジュカインはそうつぶやいた。しかし、ウルガモスは何事も無かつたかのように立ち上がった。かなりの勢いで叩きつけられたハズなのだが、まるで堪えて無いように見えた。

『……なんだこいつ？普通じゃないのか……！？』

ジュカインは、ウルガモスから何か奇妙なものを感じていた。普通じゃない何かを…。

ウルガモスは尚も攻撃して来る。一トロチャージ、虫のせわぬき、炎の渦。

ジュカインも何度か反撃はしたもの、まるで効いている気がしなかつた。

『……はあ…』

しかし、それまでドラゴンクロールで攻撃していたジュカインがリーフトンファーで攻撃すると、ついに耐え切れなくなつたのか、ウルガモスがフラつき始めた。

『やつぱり、俺はこいつの方が向いてるな…』

ジュカインは一ヤリと笑いつつも、もう一度リーフトンファーを構えた。

『……………』

すると、急にウルガモスの身体が急に炎に包まれた。それを見たジュカインは、さらに警戒を強める。

次の瞬間、ウルガモスが大きくはばたくとほぼ同時に、纏ついた炎がジュカインに向けて放たれた。

『何！？』

ジュカインは、素早く体をひねらせて攻撃をかわそうとするが、避けきれず、肩にかすつてしまつた。

『うぐ…！？』

大怪我にはならなかつたが、かなり腕に響いた。直撃すれば、ひとたまりないだろう。

『あれを受けたらまずいな…』

そう思つたのもつかの間、ウルガモスはまた同じ技で攻撃しようとしていた。

ジュカインはウルガモスの 炎の舞い を止めるべく、エナジー ボールで攻撃しようとした。腕を前に突出し、力を集中させると縁色の球ができていく。

『エナジー ボールを食らわせてやる…！』

ジュカインはエナジー ボールを放つた。すると、ウルガモスも炎の舞い で攻撃した。両者の技がぶつかった瞬間、大きな爆発がおきた。

ドーン！と音を立て、爆風が2匹を襲つた。ジュカインは思わず腕で顔を覆い、踏ん張つた。

爆風が治まつた後、そこには力尽きて倒れているウルガモスの姿

があつた。ビーナスの爆発の中心付近にいたらしく、巻き込まれてしまつたようだ。

『終わった……か

ジュカインは倒れているウルガモスの姿を見て、やうつぶやいた。
しかし一体何だったんだ？ 確証は無いが……。ここは普通じゃない……。

ドーン！

そう思っていた時、今度はミシロタウンから大きな音が響いた。

『町の方から……へへそー』

気がつくと、ジュカインはミシロタウンに向かって走りだしていった。

待つていろ……。俺が守つてやる……！

ジュカインは、主人との約束を思い出していた。

passed memory - 異変の一皿 - (後書き)

グダグダすきで泣けてきました…（涙）

あと、最近思い出したんですけど、ポケモンセンターに宿泊施設
あつましたね…。つてやつちまたあああー「深まる縁」！

すいません、記憶曖昧で…。

次から気をつけたいと思います。

116番道路での出会い（前書き）

第4章、突入です！

なんだか1章1章の話数が少ないような…。

ハイクは息を切らしながらも、116番道路を走っていた。彼の背後には2匹のポケモンの姿がある。そう、今彼は追われているのだ。

なぜかハイクは、像の様な姿をしたポケモン、ドンファン2匹に追いかけられていた。体長はそれほど大きくないが、体重は100?を超えている。踏み潰されたらひとたまりもない。

「ハア…ハア…でも流石に疲れてきたな…ハア…」

ハイクは体力がある方ではないので、流石にもうダウントしそうになっていた。

追いかけられている理由は不明だが、116番道路に来てすぐから追いかけられ続けているのだ。泣き言を言つのも無理ないだろ。ポケモンを出して戦いたいが、正直そんな余裕はない。

「うわっ、行き止まりー!?

走っていると、目の前に大きな岩山が立ち塞がった。これでは逃げられない。

『グオオオ!!』

ハイクが岩山の前で立ち往生していると、やがてドンファン達が追いついてきた。ドンファン達は、ハイクの姿を見ても止まる気配すら見せない。どうやらそのまま突進しようとしているようだ。

ヤバい！逃げなきや！』という言葉が、頭の中でグルグル回る。しかし、そう思えば思うほど余計に体が動かなくなってしまう。

「うわっ！」

ハイクが状況を整理した頃には、ドンファンはもう目の前にまで接近していた。咄嗟に真横に飛び込み、攻撃をかわそうと試みた。ハイクは、間一髪のところで攻撃をかわす事に成功し、地面に滑り込んだ。

「いてて…。くそ、行け！ラプラス！」

急いでモンスター・ボールを取り出し、ラプラスをくり出した。

ハイクを捕らえる事が出来なかつたドンファンは、そのまま岩山に激突した。ガラガラと音を立てて、岩山の一部が崩れしていく。しかしドンファンはそんな事は気にも留めず、もう一度ハイクに突進すべく地面を蹴つていた。

相手はドンファン2匹でこちらはラプラス1匹。部が悪いと考えたハイクは、ジュカインも戦いに加勢させるべく、モンスター・ボールを取つた。

『ハイク、待つてください』

しかし、ラプラスが言葉でそれを制する。疑問に思つたハイクがラプラスの様子を窺つた。

「どうしたんだ、ラプラス？」

『…私一人で十分です！』

自身に満ちた瞳でハイクを見つめ、ラプラスはそう告げた。どうやらラプラスはかなりバトルに慣れているようだ。その言葉と瞳だけで、ハイクにはそれが伝わってきた。

「分かった

ハイクはラプラスの意見を尊重する事にした。

一方、それまで地面を蹴っていたドンファンはと言ひど、有り余った力を解放するかのように2匹同時にハイクとラプラスに向かって、転がってきた。

「ラプラス、水の波動2連発だ！」

ハイクの指示を聞いたラプラスは、うなずいて答えた後 転がる攻撃を仕掛けてきたドンファン2匹に、 水の波動 で攻撃した。

水の波動 は見事に2発とも命中した。片方のドンファンは悲鳴を上げて、攻撃を中断した。その後、フランフラと覚束無い足取りで丸めていた体をもとに戻した。どうやら混乱しているようだ。水の波動 の特殊効果だった。

しかし、もう片方のドンファンは 水の波動 を食らつても、少し体が揺れただけで突進する勢いはほとんど緩めず、そのまま転がる攻撃を続行した。

「よける、ラプラス！」

ハイクは咄嗟にそう叫んだが、ラプラスもそんなに早く対処できるハズも無く、攻撃が直撃した。

『うぐう…！』

水、氷タイプのラプラスにとつて、岩タイプの 転がる 相性が悪い。攻撃をまともに食らったラプラスは顔をしかめ、うめき声を上げた。

ラプラスに転がる攻撃をしたドンファンは、ラプラスの身体でバウンドし、身体を丸めたまま地面に着地した。そして、その勢いでもう一度ラプラスに転がる攻撃を仕掛けた。

ガンツ！

「ラプラス！」

鈍い音がした。2発目の 転がる もラプラスに直撃してしまったのだ。ラプラスはまたうめき声を上げ、後ずさりした。

転がる は攻撃する度に威力が上昇する、という特殊な技だ。その能力に加え、2発の 転がる ラプラスの身体1点に集中していたのだ。その分、ダメージ量は多かった。

2発の 転がる が直撃したラプラスの身体は、赤く腫れ上がっていた。その生々しい傷跡が、ダメージ量の多さを物語る。

さらに、ドンファンは3発目の転がる攻撃を仕掛けようとしていた。これ以上攻撃を食らつたら、戦闘不能になるような致命傷になりかねないだろう。

「ラプラス、冷凍ビームで迎撃するんだ！」

避けるのは難しいと判断したハイクは、ラプラスに次の指示をだした。

「攻撃こそ最大の防御」というように、攻撃で攻撃を制するとい

う事を一か八か試したのである。

相変わらずラプラスの攻撃の命中率は素晴らしい、冷凍ビームは見事ドンファンに直撃した。その結果、ドンファンの身体は氷結し、動きを止める事に成功した。

「やつた……！」

思わずハイクも歓喜の声を上げて喜んだ。

『……どうやら彼らも 力 に捕らわれているようですね……』

傷は痛々しいが、あまり呼吸は乱れていないラプラスが静かに口を開いた。

意外にタフなラプラスを見て、少し驚きながらもハイクはうなづいて返した。

相変わらず 力 の意味は分からぬが、もともとホウエン地方に生息していなかつたポケモンが、その 力 とやらに捕らわれているのは事実だ。ドンファンも、116番道路には生息していないのだ。

ドンファンの攻撃を止め、ホツとしたのもつかの間、それまで水の波動で混乱していたもう1匹のドンファンが 雷の牙で飛びかかってきた。すでに混乱は解けているよつだ。

「もう1発、冷凍ビームだ！」

ドンファンの行動にいち早く気づいたハイクは、もう一度 冷凍ビームを放つという事をラプラスに指示した。

ハイクの指示に素早く反応したラプラスは、雷の牙で飛びかかるてくるドンファンに向けて冷凍ビームを放った。もう一步でラプラスに雷の牙が直撃する、いう所でドンファンは冷凍ビームを受け、空中で氷結した。カチコチと音をたてて、ドンファンは空中で氷漬けになっていく。

「ドスン！」と音を立てて凍りついたドンファンは地面に落下した。

これで文字通りドンファンを二匹とも動けなくした事になる。

「よし。今のうちに逃げよー！」

これ以上ドンファンを痛めつけても意味がない。ハイクはラプラスをモンスター・ボールに戻し、走ってその場から立ち去った。

「ここまで来れば大丈夫かな…」

ハイクはラプラスの傷をすごい傷薬で手当てしつつ、辺りをキヨロキヨロ見ながら、そうつぶやいた。

ドンファンから逃げ切り、ホツとした気持ちとは裏腹に、ハイクは少し胸が痛むような感情に襲われていた。

なぜ彼らは俺を狙う？俺が何をしたって言つんだよ…。

考えても分からぬ。分からぬからもどかしい。

それに研究所から姿を消したポケモン達の事も気がかりだ。有力な情報がほとんど入つて来ないこの状況では、心がどんどん不安な気持ちに包まれていく。

ハイクは、ハーツとため息を吐いた。しかし、そんな事しても頭の中のもやもやした気持ちには消えない。余計に虚しくなるだけだ。

ガサツ…

そんな気持ちで立つていると、ハイクの耳に何かの物音が飛び込んできた。

「…なんだ？」

不振に思つたハイクは、ラプラスをモンスター・ボールに戻し、物音が聞こえた茂みに歩み寄つた。念のため、ジュカインが入つたボールを手に持つておく。さすがにバトルしたばかりのラプラスを、また戦わせる訳にはいかないだろう。

ほとんど足音も立てずに茂みに近づいた後、ボールを持っていな方の手で一気に草をかき分けた。

「うわ、ちょっと待つて下さい！」

しかしそこから現れたのは、1人の少年だった。

身長はハイクよりも小さいくらいで、緑色っぽいジャケットを着ており、茶系の長ズボンを穿いていた。歳はおそらく、ハイクと同

い年か年下だわい。

「『』、『』めん。驚かせたよな……。君は……？」

驚いている少年を見て、悪く思つたハイクは彼に謝つた。敵ではないと思つたが、一体何をしていたのかは、確認することにした。

「僕、タクヤつていいます。急にポケモンに襲われて……それでここに隠れていたんですね」

タクヤと名乗った少年の言葉を聞いて、ハイクは少しホッとしていた。彼が良い人そういう所もそうだが、本来 生息していないポケモン達は、どうやらハイクだけを攻撃している訳ではなさそうなのだ。

「……そつか

俺は何かをしてしまつたのか?と少し罪悪感を抱いていたので、その言葉を聞いたハイクの表情は自然と和やかな物になる。

「……ひょつとして……、あなたはハイクさん!…?」

そんなハイクの表情を見て、タクヤも緊張が解けたのかハイクにそんな質問を投げかけてきた。初対面の人に対する自分の名前を当てられたのは初めてだったので、ハイクは少し驚きながらも、

「あ、ああ。そつだけど……」

と、答えた。

「やつぱり！あなたがホウエンリーグチャンピオンの、ハイクさ
…むぐう！？」

それを聞いたタクヤが急に大きな声を出したので、驚いたハイク
がタクヤの口をふさいだ。

「ちよ…、声が大きい…」

むがむがと抵抗するタクヤに向けて、ハイクは小声でそう言った。
もし誰かが聞いていたら、また人が集まってしまうかもしね
い。正直、力ナズミシティの時のような状態には、もうなりたく無
かつた。疲れるし…。

「むぐぐ…。意外とシャイなんですね！」

するとタクヤが、無理矢理ハイクの手を口からだけ、笑顔でそ
う言つた。

「別にそういう訳じゃ…ない訳でもないけど……」

タクヤの言葉を否定すると嘘になってしまって、ハイクは曖昧
に答えた。正直な所、少し恥ずかしという所もある。

この話題はあまり触れないでほしな…、とハイクが思つていると、
「ところで、ハイクさんはどうしてこんな所にいるんですか？」

ちょうどタクヤが話題を変えてくれた。
よかつた…とハイクは心の中で安堵していた。

「今、ホウエン地方に異変が起きてるんだ。俺はその真相を確かめる為に、旅をしている」

別に秘密にする理由もないのに、ハイクは事実を話した。

「本当ですか!? 実は僕もホウエン地方の異変を、調査しているんですよ…」

するとそれを聞いたタクヤが、先ほどにも増して目を輝かせながらそう言った。それを見たハイクは、ハハハ…と苦笑していた。

「それじゃあ、目的は一緒なんですし、一緒に旅をしませんか!?

?

「え…?」

しかしハイクは、少し表情を曇らせた。協力してくれるという願意は嬉しいが、関係ない人をハイクの危険な旅に巻き込みたくないなかつたのだ。

「それは…」

「ねえ、いいですよね?ハイクがあ〜ん!」

考えていると、タクヤがハイクの腕にしがみつき、旅の介入をねだってきた。腕を振るつても、離してくれる気配はない。

「は、離してくれよ、タクヤ…」

「嫌ですー連れてつてくれるまで離しませんよー」

子供っぽく駄々をこねるタクヤを見て、ハイクは苦笑するしかなかつた。

「分かつた。分かつたから離れてくれ……」

ついに降参したハイクは、渋々タクヤの旅の介入を許した。内心、ハイクは自分の弱さを呪っていた。

「やつたあ！ ありがとうござります！」

ようやくタクヤはハイクから離れ、飛び跳ねて喜んだ。

…そんなに嬉しいのか？と、ハイクは思いながらも、今日で一番大きなため息をついた。モンスター・ボールの中からヒノアラシやラプラスが慰めてくれるのだが、放つといてほしい、と言いつのが本音だつたりする…。

「それで、これからどうするつもりなんですか？」

ボーッとしているハイクに、タクヤが質問した。

「え…、ああ。」このまま116番道路を進んでカナシダトンネルを抜けて、シダケタウンに向かうつもりだけど…」

少し反応が遅れたが、ハイクはタクヤの質問にやや曖昧に答えた。すると、

「じゃあ、今すぐ行きましょう！」

急にタクヤがハイクの手を取り、引っ張るような形で強引に歩き

始めた。

「いて……ちょっと待ってタクヤ！」

引きずられるように、ハイクも彼に続いた。
そんなせつかちなタクヤを見て、ハイクの心はいろんな理由で不安に包まれていった。

116番道路での出来事（後書き）

ちなみにタクヤはオリキャラです。

最近、少しづつですがこの小説のアクセス数が増えてきたので、
作者のモチベーションが上がっています（笑）
感想を書いていただけるとさらに急上昇すると想つので、よろしく
お願いします！

第一印象（前書き）

今回から書き方を少し変えます。本当に“少し”ですが…。

第一印象

ハイク達は、カナシダトンネルの入口前まで来ていた。文字通りカナズミシティとシダケタウンを結ぶトンネルで、開通されてから間もない比較的新しいトンネルだ。

開通工事は当時、最新のテクノロジーを駆使して開発された機械を使用し工事が進められていたらしいが、そのまま機械で工事を続けると周囲のポケモン達に悪影響を及ぼすため、工事を断念したらしい。しかしその後、とある人物が人の手だけでトンネルを掘り進み、開通を成功させたらしいが、ハイクは詳細をよく知らなかつた。

「ふう…。これ越えればシダケタウンだな…」

さんざんタクヤに振り回され、必要以上に体力を消耗したハイクがため息をつくかのように、そうつぶやいた。

「ささ、早く入りましょうよ！」

疲れた顔をしているハイクを見ても、お構いなしにタクヤは急かした。それまでハイクの腕を引っ張つて行くような感じだったが、今度は背中に回り込み、無理矢理押して行くような感じになつた。

「タクヤ、ちょっと…押すなって！」

ハイクも口では抵抗するものの、半分されるがままだつた。タクヤの今までの行動から察するに抵抗するのは無駄だうと考えていた。

そんなようにしてカナシダトンネルの入口から、中に入った瞬間：

ブウン！

「！」

突然、何か赤い生物がハイクに襲いかかってきた。かなり急だったので反応が遅れたが、ハイクは素早く体をひねらせて攻撃をかわそうとした。

その攻撃によって左頬を少し切つてしまつたが、なんとか避けることが出来た。切傷からは血が滴り落ちている。

「…ハイクさん！？」

その奇襲に気づいたタクヤは素早くトンネルの外へと逃げ出しが、ハイクの身を心配したのかそう叫んだ。

「ああ。大丈夫」

それに対しても、右手の甲で血を拭いつつもハイクは答えた。その後、自分を攻撃した者の正体を確認することにした。

赤い体には羽が生えており、はさみ鋏のような腕をもつ虫タイプのポケモン。ハイクの記憶には、思い当たるポケモンは1匹しかいなかつた。

「ハッサム！？」

そう、鋏ポケモンのハッサムだ。鋏を振り上げ、ハイクを激しく威嚇している。

またか…とハイクは内心思つた。これで理由もなく襲われるのは

何回戻だらう？

そう思つてゐると、ハツサムはまた攻撃しようとハイクに素早く接近した。

しかし、それより先にハイクのモンスター・ボールから勝手にジュカインが飛び出し、ハツサムとの戦いに備え、戦闘態勢になつた。

「ジュカイン！？ちよつと……」

ハイクがジュカインを止めよつとしたが、聞く耳を持つていなか相変わらずだ。

ハツサムは、それでもお構いなく“シザークロス”でジュカインもろともハイクを斬り裂こうとした。

しかしジュカインは冷静に攻撃を受け止め、そのまま力で押し返した。

ジュカインに力技で負けたハツサムは、悔し紛れに一声を上げた後、どこかに逃げて行つてしまつた。

「え…もう終わり？」

いつも以上に呆気ない終わりだつたのでハイクは少し間の抜けた声を出してしまつた。少し奇妙に思いつつも、ホツとしたハイクは肩の力を抜いた。

「ハイクさん、すごいですね！もう追い払っちゃうなんて」

それまでトンネルの外で戦いの様子を見守つていたタクヤがハイ

クに駆け寄ってきた。

「うん。たぶんもう大丈夫だと思つけど、油断はできないかな」

タクヤの言葉に対し、ハイクはそう答えた。

「ジュークайн、まだ怪我治つてないんだから、あんまり無理しちゃ駄目だろ」

相変わらず無茶をするジュークайнを見たハイクは、心配になつてそう呟いた。今は普通に動いているが、無理に戦うと傷口が開きかねない。その点、さつきジュークайнを戦わせようとしてしまった自分を、ハイクは反省していた。

『俺の怪我はもう心配いらない。……だが奴は……』

ジュークайнはタクヤを一瞥してから、そう言った。何かを疑つているような眼差しだった。

「？…とつあえずボールに戻つてくれ」

いつもと違うジュークайнの態度をすこし変に思いながらも、ハイクはジュークайнをボールに戻した。

基本、ジュークайнは自分の考えを表に出す事は少ない。照れてくさいのか、それとも単にクールなだけなのか…よく分からないが、今回のように何かを疑うような仕草をするのは珍しいのだ。

「それじゃ、敵もかたずいた事ですし、先に進みましょー!」

相変わらずのテンションで、タクヤが言った。一体どうにそんな

元気があるのか、ハイクは不思議に思っていた。

「ハイクさん…？」

「しつ…」

いつになくピリピリした雰囲気の中、不意に話しかけてきたタクヤの口をふさいだ。今は物音を立ててほしくないのだ。

「（くそ…。何であいつが…）」

岩陰に隠れているハイクの目線の先には、見覚えのある恰好をした人物が立っていた。

茶色のローブにフードを深くかぶった人物…。そう、カナズミジムで異常な力のナットレイをくり出してきた、あの人物だった。いや、もしかしたら別人かもしれないが、少なくとも同じ格好だ。

「…どうじょうづ？」

ハイクは困惑していた。今飛び出せばあの人物との戦いは避けられないだろう。極力戦闘は避けたいこの状況で、厳しい立場に立つ

てこることになる。

「ハイクさん、戦うしかないですよ。僕が援護します。2対1なら勝てるはずです」

「…そうするしかないか

ハイクもタクヤの考えに同意せざるおえなかつた。たしかに、このままじつと隠れていても埒が明かない。

「準備はいいか、タクヤ？」

ハイクはラプラスのモンスター・ボールを手にし、タクヤに確認した。

「…いつでもどうぞ」

タクヤはつづやくよつて、そう答えた。

「よし…、行こう…！」

そして、ハイクがロープの人物に攻撃を仕掛けよつとした、まさにその時、

ポンッ！

「え…？」

モンスター・ボールの解放音。その次の瞬間の光景を見て、ハイクは驚愕した。

開いたモンスター・ボールは紛れもなくハイクの物。その中から出てきたのはジュカインだ。そして彼は、自らの“リーフトンファー”をタクヤに突き出している。しかし直撃している訳ではなく、あくまでタクヤの動きを封じるのが目的のようだ。

「ジュカイン！？」

もちろん、ハイクは声を上げてしまった。そのせいで、ロープの人物にもこちらの存在に気づいてしまったようだ。

「ちょ…ハイクさん！彼をなんとかして下さいよ」

タクヤも焦つた様子でハイクに助けを求める。いきなり命が危うい状態になってしまったのだ。焦るのも当然だ。ハイクは慌ててジュカインを止めようとした。

「ジュカイン！何やつてるんだよ！タクヤを…」

『いい加減、正体を現したらどうだ？』

「え…？」

しかし、ジュカインはタクヤにそう言い放った。無論、ジュカインの言葉を聞き取れているのはハイクだけだろう。ハイクはジュカインの言つている事が分からなかつた。

『…おかしいと思つてたんだ』

ハイクが愕然としているとジュカインは口を開き、話し始めた。

『……話が出来すぎている。こいつにそそのかされてトンネルに入った瞬間、ハツサムに襲われた……まるであのハツサムは俺達がここに来るのを知っていたかのようにな。そして、タイミング良く表れたロープの人物……』

そこまで聞いた瞬間、ハイクは背筋がゾッとした。頭の中に最悪の事態が浮かび上がり、自然と心臓の鼓動が速くなる。

「タクヤ……お前は……！」

そして、事態は現実の物となる。

「クッ……クフフフ……」

タクヤは、ハイクが今まで感じた事のない不気味な雰囲気を醸し出し、静かに嘲笑つた。周囲の空気が一気に変わる。

「あ～あ……もうバレちゃったか……」

タクヤのその言葉は、ハイクには悪魔の囁きのように聞こえた。
……こんな事、信じられる訳がない。

「どうやら、ポケモンと会話が出来るという話は本当じゃくな、ハイク！」

裏切り。そう、裏切りだ。受け入れがたい真実。

ハイクの心臓の鼓動はさらにスピードを増し、逆に試行のスピードは低下してしまっている。トンネルの中の静けさが、ハイクの身

体をせりて硬直させる。

「タ…クヤ…？そんな……こんな事つて…」

「言つとくけど、俺は裏切つてなんかないからな。…最初からお前の命を狙っていた、敵だつたんだから…！」

タクヤがそう言い放つた瞬間、逃げたかと思つていたハッサムがどこからか現れ、ジュカインを攻撃した。あまりに急な事だったのでもジュカインには避ける間がなく、そのまま吹っ飛ばされてしまった。

『チツ…。やはりグルだつたか……』

しかしジュカインは、冷静に地面に着地し、舌打ちをしつつもそれつぶやいた。

「お前が何を聞いたのか知らないが、俺は少々お前のジュカインの洞察力を甘く見ていたようだ…」

タクヤはどこからかモンスター・ボールを取り出し、弄びながらそういった。おそらくあのハッサムの物だろう。

「まあ、第一印象で俺を判断したお前も悪いよな！」

タクヤは、さも自分が悪くないと言つたの通りに、ハイクにそう言った。なんて奴だ！

何…？何だよこれ…。何だつていうんだよ…！

ついにハイクは感情を抑えきれなくなり、叫んだ。

「何なんだよ！何が目的なんだよー…？どうしてこんな…」

「さつとも言つたら。お前を消す…、殺すことだ」

しかしタクヤは、ハイクとは正反対の比較的落ち着いた様子でそう言い放つた。

「殺す…？俺を…？一体何のために…？」

「ある奴に依頼されたんだ。金で雇われてな。それに、現チャンピオンであるお前を倒せば、俺こそ真のチャンピオンとして最高の地位を手に入れる事が出来る。一石二鳥だろ…？」

「依頼…？雇われた…？」

だからハイクに近づいた。だからハイクをここまで導いた。少々強引だったが…。だからハイクに仲間だと思い込ませたのだ。すべては雇い主との契約を果たすため…。罠を張り、ハイクを出し抜こうとしたのだ。

「さあ、おしゃべりは終わりだ。無駄だと思うが抵抗したっていいんだぜ。もつとも、苦しむ時間が増えるだけだがな！」

ついにタクヤは本気でハイクを殺しにかかるとしてくるようだ。ハイクの中では様々な思いが混沌としており、いまだに現実をはつきりと見れずについた。

『ハイク、覚悟を決める。奴は本気で殺しに来るぞ…！』

そんなハイクの心を動かす為、ジュカインは手を差し伸べた。

「……やるしか……ないのか……？」

ジュカインの言葉を受け、ハイクは決意を固めた。タクヤと、戦う決意だ。

『……バトル』

そこで、待ちかねたロープの人物が黒いモンスター・ボールを取り、ポケモンをくり出した。紫色の魔導師のような姿をしたマジカルポケモン、ムウマージだ。

「やつぱり……あいつもタクヤの仲間なのか……？」行け、ラプラス

ハイクはムウマージに対抗すべく、ラプラスをくり出した。ロープの人物も敵と考えると、もはや逃げ道はない。前にも、後ろにも進めないので。2対1のバトルは必須だろう。

「ヒノアラシ、ジュカインを援護してくれ」

そこで、ハイクはヒノアラシをジュカインの援護に回す事にした。自分はラプラスと共に、ロープの人物との戦いに集中したかったのだ。

「ジュカイン、行けるか？」

おそらく、この中で一番戦い慣れているのはジュカインだ。タク

ヤはジユカインに任せて問題ないだろ？

『……俺を誰だと思っている？』

ジユカインのその言葉からも分かるよつて、彼自身もかなり自信があるようだ。

「よし。ヒノアラシ、もしもの時は頼んだぞ」

『は、はい！任せっきり！』

しかし、念のためヒノアラシを援護に回りさせた。彼の内なる勇気は、いざとこう時頼りになる。

「作戦会議は終わったか？……どうせよ、そろそろやられてしまつう……。ああ、ショ一の始まりだ……！」

こうして、ハイクVSタクヤ&ローブの人物　の戦いの火蓋が切つて落とされた。

もし、これが悪い夢なら早く覚めて欲しい。

ハイクは心の奥では、必死にそう願っていた。

第一印象（後書き）

はい、タクヤが裏切りました～。早つーとツツ「ミ」が飛んできそうですね（笑）

今回は約1週間ぶりの更新でした。…ですが、相変わらず文章はグダグダ……。本当に申し訳ないです。

この言葉の使い方 変だ、という所があるかもしれないのに、見つけたら「」指摘下さい。お願いします。

小さな怒り

「ハッサム、“シザークロス”！」

タクヤのハッサムは、“シザークロス”でジュークайнに攻撃した。腕の鍔を使って×を描くように斬りつける。その攻撃に対し、ジュークайнはバックステップでかわそうとするのだが、ギリギリで飛距離が足りず、腹部の包帯だけをかすめてしまつ。

『もう、これはいらないな……』

斬り裂かれ、ボロボロになってしまった包帯を見て、ジュークайнはそうつぶやいた。そして、その包帯を自ら取り、捨ててしまった。ジュークайнの腹部は、不思議とすでに傷が治つており、ジュークайн本来の身体に戻つていた。

「まだまだあー！もう一度“シザークロス”だ！」

ジュークайнにダメージを与えられていないと知つたタクヤは、もう一度ハッサムに“シザークロス”を使うよう指示した。今度は、ジュークайнは“リーフトンファー”を上手く使い、それをガードする。

『クツ……』

しかしハッサムは、そのまま力でジュークайнをねじ伏せようとじてくる。ハッサムの力はかなりのものようで、少しづつ押されていく。

「おーおー…。そんなもんか？もつと楽しませてくれよ……。」

タクヤが挑発の言葉を飛ばすが、ジュカインはそんな事をいちいち気にするキャラではない。だが、今の状況を良いとは言えない、といふ事は確かだ。

『ジュカインさん!』

そこでヒノアラシが“火の粉”で援護した。しかし、その攻撃はかなり頼りなく、ハツサムは受けてもピクともしない。

『あ、あれ?…そんな…』

ヒノアラシも、まさかそこまで効かないとは思わなかつたらしく、オドオドしている。

「さあ、もう諦めろ!お前等の力じや、俺のハツサムには勝てない!」

もう勝つた氣でいるタクヤを、ジュカインは一警したが、言い返す氣などは無かつた。タクヤに聞こえないのならば言つても意味がないし、このピンチの状況が覆る訳でもないからだ。

『ま、まだボク達は諦めません!』

そんな事を考えていたジュカインの横で、ヒノアラシはタクヤに叫んだ。だがそんな事をしても、実行に移さなければ、負け犬の遠吠え同然だ。実行しなければ……。

『ぐううう…!』

しかし、ヒノアラシは動いた。脅えて半分硬直した体を無理矢理動かし、ハツサムに突進した。その攻撃は、タクヤやジュカインから見ればかなり無謀な試みだ。しかしどんなに無謀でも、強い思いでぶつかれば、常識を覆す事だってある。

『ボクだつて…ボクだつて…』

その時、ボウッ！という音とともに、突進中のヒノアラシの身体が炎に包まれた。その炎はヒノアラシの小さな身体をより大きく見せ、頼りなさげな雰囲気を熱いものが包む。

「なつ…！？」

タクヤが声を上げた頃にはもう遅く、ヒノアラシは炎に包まれたままハツサムに突進した。

流石のハツサムもこれには耐え切れなかつたようで、小さくうめき声を上げた後、ジュカインを解放し、距離を取つた。

『フツ…。“火炎車”か…助かつた。礼をいう』

意外にもヒノアラシに助けられたジュカインは小さく笑つた後、そう言つた。

その言葉に対してヒノアラシも笑つて返すのだが、“火炎車”一発だけでかなりの体力と精神力を消耗してしまつたらしく、ゼエゼエと息を切らしてしまつていた。

『後は俺に任せで、お前は休んでろ』

『…へ？』

キヨトンとするヒノアラシを横田に、ジュカインはハッサムに向
き直った。

ハイクのラプラスと、ローブの人物のムウマージとの間では、激
しい攻防戦が繰り広げられていた。

『…“シャドーボール”』

「ラプラス、“冷凍ビーム”だ！」

ムウマージが“シャドーボール”を放ち、ラプラスが“冷凍ビー
ム”でそれを打ち落とす。ただそれだけの繰り返しだつたが、2つ
の技がぶつかる度に大きな音と共に爆発が起きており、空気を震わ
せる。砂埃が舞い上がり、敵の姿が見えなくなつた瞬間、ムウマー
ジが“シャドーボール”を放つ。それをラプラスが迎撃する。

一瞬の油断も許されないこの状況で、ラプラスはもはや 防戦一
方だった。

『ハイク、これではキリがありません！何か策は…？』

ついにラプラスはハイクに助けを求めた。

分かつていい…。分かつているんだけども、なかなか良い策が思
い浮かばず、ハイクは困窮していた。

フとハイクはトンネルの様子を眺めてみる。

この辺りは機械を使わず、人の手だけで掘り進んだ場所らしく、なんとなくぎこちなさを感じてしまう。

内部自体は広めだが、人が通れるのはステンレス製の柵で区切られた所だけで、それより先には大きな岩が「ゴロ」「ロ」している。トンネルと言つより洞窟だ。

「（ん…？洞窟？）」

その時、ハイクは頭の中で自然が作り出した洞窟を想像していた。そして、その洞窟に高確率で存在する“ある物”を連想した。

「（“水の波動”は…、拡散する…！なら…）」

そこまで考えて、ハイクはある策を思いついた。かなり無理があるかもしれないが、今は四の五の言つてられない。

「ラプラス、トンネルの天井に“水の波動”。その後そこに“冷凍ビーム”だ

『えつ…？』

ラプラスが不思議そうな目でハイクを見つめる。どうやらハイクの考えが読めていないようだ。

『…分かりました。……私は貴方を信じます』

しかし、ラプラスはそれでもハイクを信じると囁いてくれた。

「うん…。頼む」

それに対して、ハイクも笑つて答えた。

そんな事をしている間も、ムウマージは休まず“シャドーボール”を放つてくる。そして最後の攻撃を打ち落とした後、すぐにラプラスはハイクの指示通り、技を使った。

ラプラスが放った“水の波動”は天井に当たると同時に拡散し、飛び散りそうになる。しかしそれより先に“冷凍ビーム”が放たれ、たちまち水を凍らせた。凍つた水はまるで鍾乳石のような巨大な氷柱となり、天井に下がっていた。

第1段階、終了。

ムウマージは、“水の波動”と“冷凍ビーム”が自分に向かられたものではないと知ると再び“シャドーボール”を連発する。それを“冷凍ビーム”で打ち落とす。

「ラプラス、『ハイドロポンプ』使えるか?」

ハイクがラプラスに次の指示を出そうとした。

『……なるほど。かなり無理のある策ですね…。使つたことはほとんどありませんが、やつてみます』

ラプラスは、ハイクの策になんとなく気づいたようだ。

「よし…。一か八か……」

じつして準備は整つた。後はラプラスが“ハイドロポンプ”を放

てればいいだけだ。しかし、ムウマージは攻撃の手を緩める気は微塵も無いらしく、次々と“シャドーボール”を放っていく。

「また……」

しつこくワンパターンな戦法を繰り返すロープの人物とムウマージを見て、ハイクはいら立ちを募らせていた。

『……ダメージ覚悟で行きませ』

「え……？」

するとラプラスは、ムウマージの“シャドーボール”を無視し、一か八かの“ハイドロポンプ”を放とうとした。スワーーと息を吸い込み、肺いっぱいに溜まつたところで、一気に吐き出す。

『ぐうー！？』

その間、“シャドーボール”が幾つかラプラスに直撃するが、持ち前のタフさでそれを乗り切る。

そしてティアの口から大量の水が勢いよく発射された。その名の通り、まるでポンプから発射される水のようだ。

ビュンー！と轟音を立てて発射される水は、残った他の“シャドーボール”の間を上手く潜り抜け、そのまま直進する。しかし、ラプラスが狙つたのはムウマージ本体ではなく、先ほど作り上げた氷柱だった。

「ゴオウンー」と直撃音がしたかと思つと“ハイドロポンプ”に貫かれた氷柱が弾け飛んだ。

『…………！？』

その弾け飛んだ氷柱の大きな破片一つがムウマージに直撃し、そのまま押し倒した。

あまりに急すぎる攻撃だったため、ムウマージは対処することができなかつた。

「よし！なんとか上手くこつた！」

ハイクは自分の策が上手く達成出来た事に安心し、胸をなでおろした。

『安心するのはまだ早いですよ、ハイク。彼はまたすぐ起き上がります』

しかしラプラスのその言葉で少し緩んでいた気持ちが一気に緊張する。まだ、バトルは終わつて無いのだ。

「あ…。起き上がる前に、『冷凍ビーム』だ

ハイクはラプラスに次の指示を出した。

ティアはムウマージ“冷凍ビーム”を放つた。

ムウマージは、ようやく自分の身体にのしかかっていた氷柱の破片を押しのけた所だつたらしく、“冷凍ビーム”に反応した頃にはもう遅かつた。

みるみる内にムウマージの身体が凍りついでいく。やがて、身体全体が氷に包まれた。

『終わり…ましたか？』

ラプラスがハイクに確認するが、正直ハイク自身も分からなかつた。これまで戦ったポケモンの中には、倒したと思っていてもすぐに立ち上がつてくるような、異常なほどタフな肉体を手に入れてしまったポケモンもいたからだ。

チラリと、ハイクはジュカイン達の戦いの様子を窺つた。

ジュカインとハツサムの戦いはまだ続いていた。しかし、現在はジュカインの方が優位な立場に立つているようだ。

ジュカインはただがむしゃらに攻撃を仕掛けている訳でなく、ハツサムが攻撃を仕掛けてきた時に上手くその攻撃をかわし、“リーフトンファー”でカウンター攻撃を仕掛ける、と言つ事を繰り返していた。

「チツ…。面倒くさい奴だな……。ハツサム、これ以上の攻撃はやめろ」

しかし、タクヤも馬鹿じやない。悪い状況に立たされないと悟つたタクヤは、ハツサムに攻撃をやめるよう、指示した。

「同じ手がそう長く続くと思つたか？ハツサム、“高速移動”」

『な…！？“高速移動”を覚えていたのか…』

ハツサムは今までしまつていた羽を大きく広げ、ブーンとぱたつかせた。

“高速移動”。自らの移動速度、瞬発力、反射神経を飛躍的に上昇させる技だ。ポケモンによって発動のスイッチとなる行動が違うらしく、ハツサムの場合はこのように羽を大きくぱたつかせるよう

だ。

“高速移動”の発動はジュカインも予想外だつたらしく、驚きを隠せずにいた。

「さあ、ハツサムの動きを捕らえられるかな…？“シザークロス”だ！」

“高速移動”で素早さを高めたハツサムは、ものすごいスピードでジュカインとの距離を詰めていく。

『クッ…！』

ジュカインはハツサムの動きについていけず、悉く“シザークロス”が直撃した。ザンッとジュカインの身体が斬られる音がする。

「ジュカイン！」

ジュカインはハイクの近くまで吹き飛ばされていた。

「よしーもう一発だ！」

ハツサムはジュカインに追い打ちをかけるべく、距離をとった。

『チッ…ここまでか…』

『まだですージュカインさんー！』

すでに諦めかけていた。しかしじュカインの視界に、それまで休んでいたと思っていたヒノアラシの姿が飛び込んできた。

『な……！？』

無謀すぎる。

しかし、『逃げる！』と叫ぼうとした瞬間のヒノアラシのとつた行動を見て、ハイクとジュカインは息を呑んだ。ヒノアラシの背中の炎から、大量の黒い煙が噴き出したのだ。その黒い煙がハッサムの視界を遮る。

「！？ くそ！ “煙幕”だと…？ 小賢しい真似を…！」

それは土壇場で発動した“煙幕”だった。

“煙幕”によって視界を遮られたハッサムはジュカインに狙いを定める事が出来ず、あたふたしていた。

「チャンスだ、ジュカイン！」

ハイクがジュカインの士気を促す。それに対し、『ああ』と答えた後、ジュカインは次の技の準備をした。

右手を前に突出し、力を集中させる。するとそこに緑色の光球“エナジー・ボール”が作り出される。

『…ヒノアラシに助けられてばかりじゃ、俺も駄目だな…』

そうつぶやいた後、ジュカインは左手にも同じ“エナジー・ボール”を作り上げる。

『…俺も、頑張らないとな』

その後、ジュカインは両手の“エナジー・ボール”を交差させた。すると、2つの“エナジー・ボール”が上手く混ざり合って、やがて1

つの巨大な光球と化した。

「これは…」

『…“メガエナジー・ボール”』

ボソリと技名をつぶやき、ジュカインは巨大な光球を煙幕に放つた。

「な…！？来るぞハッサム！“破壊光線”で向かいうて！」

ジュカインの行動にいち早く気づいたタクヤは、ハッサムに“破壊光線”を使うよう指示した。それに素早く反応し、ハッサムは“破壊光線”を放つ。

神秘的な光を放つ“メガエナジー・ボール”と、紅く輝く“破壊光線”は煙幕の中で激突した。

一瞬、激しい光が放たれたかと思うと、大爆発が起きた。2つの技が衝突することで起きた爆発が、煙幕に引火したのだ。

「うわっ…」

これはハイクにも計算外だった。もぐもぐと煙が立ち籠め、トンネル全体が脈動する。しかし、ハイク達は爆発の中心からかなり離れていたので、爆発に巻き込まれることはなかつた。

『やつたか？』

やがて煙が引いた。そこには、今にも戦闘不能になりそだが、

ギリギリで持ちこたえていたハッサムの姿があった。

「まだ立ち上がるのか！？」

思わずハイクが声を上げる。

『……だが、もうほとんど体力は残っていないハズだ』

と、ジュカインがつぶやいた。確かに、この状況では勝ったも当然だろう。

「…終わったかと思ったか？」

しかし、タクヤは余裕の表情を見せる。

「いつたい何を…」

『…“ギガインパクト”』

「えつ…？」

ハイク達の背後から、何者かの声が聞こえた。弾かれるように振り向くと、そこにはロープの人物といつの間にか氷の中から脱出していたムウマージの姿があつた。ジュカイン達との戦いに夢中で、すっかり忘れていた。大失態だ。

ムウマージはものすごい勢いで突っ込んでくる。“ギガインパクト”はリスクが大きいが、“破壊光線”と同等の威力を持つ強力な打撃技だ。

ムウマージはまっすぐこちらに突進して来ているように見える。

しかし彼の狙いは、ジュカインでもヒノアラシでもない。ラプラスだった。

「まざーーー！ラプラス！」

ラプラスの素早さでは、この“ギガインパクト”をかわす事は出来ないだろう。

ハイクは咄嗟にラプラスのモンスター・ボールに手が伸びるが、ボールに戻すにも間に合わない。

『……フン』

しかし、それより先にジュカインが動いた。腰を低く落とし、ムウマージの軌道上の真横に回り込む。そしてタイミングを計り、“リーフトンファー”で斬り上げた。

『……！？』

“ギガインパクト”で突進していたムウマージにとって、予想外の間合いからの攻撃だつたらしく、小さくうめき声を上げる。

さらにはあらぬ方向に力が逃げ、軌道が斜め上にずれてしまった。これではムウマージは勢いを殺す事が出来ない。ティアの上を通り抜け、そのままトンネルの天井に激突した。

ドーン！と音を立て、またトンネルが揺れる。

「！ なんだと！？」

タクヤも驚きが隠せずにいた。声だけでなく、表情からもそれが伝わってくる。

ジュカインも『よし…』と歓喜の声を上げていた。

『あ…危なかつた…。ありがとうございます。助かりました』

『…礼には及ばないわ』

ラプラスがお礼を言い、ジュカインがそれに答える。

「タクヤ、もうやめよう、決着はもう着いた」

ハイクが宥めるようにタクヤにそう言つた。しかしタクヤは、納得が出来ないような眼差しでハイクを睨みつけていた。その時、

「ガガガ…

急にトンネルの揺れが大きくなつた。

「な、何だ！？」

ハイクはキヨロキヨロ周りを見渡し、揺れの根源を探した。が、それはすぐに見つかった。

先ほどの爆発でトンネルの天井が脆くなつていたらしい。そこにムウマージの“ギガインパクト”が直撃したせいで、天井が崩れ始めていたのだ。

ガラガラ…！

大きな音を立てて、ついに天井が大きく崩れた。

「や、ヤバい！」

急いでハイクはジュカイン、ヒノアラシ、ラプラスをモンスター
ボールに戻し、シダケタウンの方向に走った。

「間に合え！」

ハイクは一か八か大きく跳躍した。
ズサササ…と地面に滑り込む。幸運にもそこで天井の崩壊は止ま
つた。

「…助かつた…のか？」

パラパラと小石が落ちる中、ハイクは自分が無事である事を確認
した。

「良かつた…けどタクヤは…？」

安心するのもつかの間、ハイクはタクヤの姿がない事に気づく。
「どこにもいない…！？まさか…」

急にハイクの心が不安な気持ちでいっぱいになり、背中から冷た
い汗が滴り落ちる。しかし、そんな気持ちも次の瞬間には消えてし
まっていた。

「この勝負はお預けだ！だが、次は必ずお前を…お前たちを殺す…

…」

瓦礫の越しにタクヤがハイクにそう叫んだのだ。その声には悔し

さと怒りが込められていた。

「無事……だつたんだ……」

ふう、と息を吐き出し、そこでハイクはようやく肩の力を抜くことが出来た。

しかし、ハイクの中には安心した気持ちと、タクヤに裏切られた事による小さな怒りが、入り乱れていた。

小さな怒り（後書き）

今回は計70000文字超えと最長でした…。ヒノアラシは思ったより活躍してくれました。しかし、ハイクの策はかなり無理矢理でしたね…。（汗）

“高速移動”の発動のスイッチと書つのは僕が勝手に考えた物なので、あまり気にしないで下さいね（笑）

.....えーー？（前書き）

『ラプラス』に小説って変更が多かったですよね

な、何だよ急に…。

ラプラス『タイトルを変更したと思ったら、シリーズ紹介、あるいは
じも変更したじゃないですか』

え？……だって、やっぱいつの間に小説に仕上げたいじゃん？

『ラプラス』もうですか…つん、もうこいつにしておかもしおい』

……久々に前書きに登場したと思つたが……酷いな…。

それでは、22話目、サブタイトルは氣にせず、どうでも…。

.....え！？

力ナシダトンネルでのバトルの後、タクヤは不貞腐れた表情で16番道路へと出てきた。不貞腐れている理由は言つまでもなく、ハイクとのバトルの行方である。

あと一步の所で負けた…。いや、負けてない。あの“煙幕”が無ければ勝っていたハズだ。そもそもハツサムはまだ戦闘不能になつていない。あのままバトルを続けていれば…。

いら立ちを静める為に自分にそう言い聞かせていたタクヤだったが、そんな彼に追い討ちをかけるかのように、タクヤの耳に何者かの声が響く。

「しぐじつたな？」

聞き覚えのある声。タクヤの記憶が正しければ、今彼が最も会いたくない人物だ。

そんな独特の音響を聞いてさらにいら立ちを募らせつつも、舌打ちをして声の主の方に振り向く。タクヤの想像通り、彼は白いロープを着ており、フードを深くかぶった男だった。

「…まだ負けてない。あの勝負はお預けだ」

タクヤはロープの男に言い返した。

端から見ればそれは情けない言い訳だ。ロープの男もそう解釈したようで、フフツと苦笑した後、

「たが、あのまま戦っていても、勝てたとは思えないがね？」

と、言い放つた。

タクヤはその言葉に対し、言い返そうしたが、言葉が詰まってしまった。ローブの男の言葉は、タクヤにとつて満更でもないのだ。

ローブの男はさらに続けた。

「貴重なヘルドールまでも失うとは…。いやはや……」

「次は必ず仕留めでやるー！」

タクヤは怒鳴るようにローブの男に言い返した。

しかし、そんなタクヤを見て、ローブの男は小馬鹿にするように「フフフ」と笑っていた。勿論、タクヤはさらに怒りを買い、ついにはブイツと振り返り、その場から立ち去ろうとしてしまった。

「私も、あまり気が長い方ではなくてね…。チャンスはあと一回だ。もしそれも失敗したら、金の話は無しになるが…？」

タクヤの背中に向かつて、ローブの男はさらに追い討ちをかける。歩いていたタクヤが思わず足を止めた。

既にタクヤの怒りは爆発しそうだったが、ここで言い返して金の話が無くなるのはまずい。何としても大金を手に入れなければ…。どんなに汚い手を使つても…。

グッと怒りを我慢した後、タクヤは吐き捨てるようにローブの男に言った。

「心配しなくとも、すぐに見せてやるよ…。ハイクの死に顔をなー！」

シダケタウン

現在、カナシダトンネルは通行禁止となっていた。ハイクとタクヤのバトルのせいでトンネルの天井が崩れてしまったからだ。

「ちよっとやけに過ぎたかな……？」

ハイクは少し気まずい思いをしながら、そう呟いていた。

ハイクはトンネルから出た後、警察から事情聴取を受けたのだが、とりあえず適当な事を言って真実を隠したのだ。大事にしたくない、というハイクの思いがさせたのだろう。もし、ハイクは命を狙われていると知つたら、どんなことになつていたのだろう？

そんな事を思つた後、また何か事件に巻き込まれる前にここから離れようと、その場から立ち去ろうとした時、ハイクは不意に声をかけられた。

「ハイク君！」

「え……あー」

ハイクが振り向くと、そこには1人の女性が立っていた。

ハイクの背丈、167?よりも少し大きいくらいの身長で、赤を主としたパーカーを着こなしている女性だ。

ハイクは彼女の名前を知っていた、と言うか知り合いだ。以前、ホウエンリーグに出場する際の旅で知り合い、そのまま親しい中となっていた。

「ハルカさん！」

ハイクに名前を呼ばれた女性、ハルカはにっこりと微笑んでそれに答えた。

ポケモントレーナーの最終的な目的は、リーグ優勝の他にもう一つある。ポケモンコンテストの制覇だ。リーグ優勝を目指すトレーナーが各主要都市に点々とするジムのバッジを集めることに対し、コンテスト制覇を目指すトレーナーは、地方に散らばるコンテスト会場を回っていくのだ。会場では、定期的にコンテストが行われており、それに出席し優勝することで、その証としてリボンが捧げられるのだ。

ハルカは、既にホウエン地方のすべてのコンテストに優勝しており、幾つものリボンを手にしていた。そのセンスはホウエンの中でも右に出る者はいない、とまで言われている。

「お久しぶりですね!…でも、どうしてここに?」

ハルカと会うのはハイクがリーグ優勝を果たした時以来だ。

現在、ハルカはホウエンだけならず、他の地方のコンテスト制覇

も目指しているらしい。そんな彼女がなぜこんな所にいるのか、ハイクは疑問に思ったのだ。

「フフフ…それはね…」

ハルカは笑顔でハイクに歩み寄つて來た。彼女はなんとなく色っぽい雰囲気を醸し出しているが、ハイクはあまりそういう事を気にしない。というか気づかないのだ。

そんな鈍感少年のハイクでも、次の瞬間にハルカが口にした台詞を聞いて、平常心を保つてはいられないだろう。

「ハイク君に逢いに来・た・の？」

「…………え！…？」

誘惑する時よくな口調で言うハルカの言葉を聞いて、一瞬止まつた思考が再び動き出した瞬間、ハイクは思わず声を上げてしまった。

「ちょ…ま…え！？ハルカさん！？」

頭の中で整理が出来ていない状態で無理に喋らうとしたので、舌が回らなくなる。なんとかハルカの名前を言つ事は出来たが。

ハルカは、コンテストでも屈指の実力者だが、彼女自身のスタイルの魅力も人目を引くほどだ。

八頭身の身長で、足もスラリと長い。栗色の長髪は、彼女の白い肌と黒い瞳にベストマッチしており、キラキラと輝いて見えるほどだ。

ハイクの場合、ホウエンリーグチャンピオンとして名前だけが知られているが、ハルカの場合、彼女本人のファンもいるほどにまで

有名になつていた。

「（え！？……ちょ…えつ！？ええ！？…なにこれ？えつ！？）」

そんなモデル宛らの女性に、急にそんな事を言われたのだ。混乱するのも無理ないだろう。

慌てふためくハイクを見てハルカは、「フフッ！」と悪戯いたずらが成功した子供の様な笑みを浮かべた後、「冗談！」とハイクに告げた。

「え！？冗談……？あ…冗談か…」

混乱する中で、いきなり投げかけられた言葉に戸惑いを見せたハイクだが、冷静になつてハルカの言葉を整理し、ようやく状況を把握する事が出来た。

「は、ハア…。ハルカさんも人が悪いですよ……」

「フフフフー、ゴメンね！」

胸を撫で下ろすハイクに対し、たいして反省もしてないような口調でハイクに謝った。しかしハルカは、また何かを思いついたような表情を見せた後、さらにハイクに冗談攻撃を仕掛けた。

「ところで、レインちゃんとは上手くいってるの？」

「…………え！？」

ハルカは本当に「冗談が好きなんだ。まあ、それを本気で受け止めてしまうハイクもハイクだが……。

今回は、先ほどよりも反応が早かった。

「い……いや、そんな……別に俺達 付き合っていないですよー。ただ幼馴染なだけで……」

交際を本気で否定するハイクを見て、ハルカはわざと「ふーん」とつまらなさそうな声を上げてみた。

「そ……それより！ ハルカさんは本当はなんでこんな所に来たんですか？……まさか俺をからかうためだけに来たわけじゃないでしょ？」

ハルカは次のハイクの反応を楽しみにしていたが、ハイクは、ハルカのそんな行動は気にも留めず、慌てて話題を変えてしまった。

…わすがに、これ以上ハルカのペースに流されたままでは身がない。

「あ、そうだった！ ハイク君をからかうの面白いから、すっかり忘れてた！」

それを聞いたハルカは何かを思い出したかのように手をポンッと叩き、そう言った。

「（からかうの面白いからって……。酷くないか…………？）

ハイクは内心そう思っていたが、口には出せなかつた。

「実は、ある男の子を追つていこりまできたの」

「男の子？」

そこでようやくハルカは話題を変えてくれた。ホッと一安心したハイクだったが、すぐにハルカの話に集中する。

「そう。歳は14歳で、身長は……これくらいかな？」

ハルカは自分の手で、男の子の身長を再現する。なるほど、ハイクよりも少し小さいくらいか。

そんな事を思っていたハイクだったが、次にハルカが口にした男の子の名前を聞いて、驚愕した。

「名前は、タクヤ君って言うんだけど……」

「タクヤ……!?」

これははどう言う事だろう？ハルカとタクヤは知り合い、と言つ事になるのだろうか？

「……ハイク君、何か知ってるの？」

ハルカがいつも増して真剣な表情でハイクにそう尋ねた。

ハイクは、「はい……」と返事をした後、タクヤについて話し始めた。

「そう、だったの…」

緊迫した雰囲気の中、ハイクはタクヤについてハルカに話した。周りの人、「何事だ?」とチラチラ様子を窺つていたが、そんな事は気にせず、ハルカだけに聞こえるような声の大きさで話した。

「タクヤ君…そんな事まで……」

ハイクは聞き取る事が出来なかつたが、ハルカはボソリとそう呟いていた。

「ハルカさんは……タクヤとはどんな関係なんですか?」

「う…ん。ちょっとね……」

ハイクが質問したが、ハルカは曖昧にそう答えた。ハイクは不信感を抱くものの、深く追求はしなかつた。

「タクヤを、追ってるんですね?…ごめんなさい。俺がカナシダトンネルの天井を崩しちゃったから…、追えなくなつてしまつて…」

「う、ううん!ハイク君は悪くないよ

責任を感じて俯くハイクに、ハルカは慰めの言葉を飛ばした。タクヤが116番道路を行つたとしても、別の場所から回り込めばい

いのだ。

「そういうえば…、ハイク君も、何でシダケタウンにいるの？」

自分がした質問と同じような質問をされたハイクは、ハルカに答えた。

「実は、俺も人を探してて…」

ハイクは自分が探している人物、Nの特徴をハルカに説明した。うんうん、と頷きながらハルカは話を聞いていたが、ハイクの説明が終わると少し考え込んでしまった。しかしそくに顔を上げ、口を開いた。

「私、その人見たことあるかも！」

「えー？ 本當ですか！？」

ハイクは初めて有力な情報を入手した。すぐさま、どこで見たのか場所を聞く。

「え…と、たしかキンセツシティ辺りだつたかな…？」

「キンセツシティ…？ すぐ近くじゃないですか！」

キンセツシティはここから歩いても1、2時間ほどでつく場所にある町だ。自然とハイクのテンションも上がる。

「よしーすぐに行ってみますー！」

いてもたつてもいられず、ハイクは走り出さうとした。

「あ、待って！」

しかし、それはハルカの一聲で制されてしまう。とりあえず落ち着いてから、ハルカの話を聞いた。

「せつかくだし一緒に行かない？私もカナズミ方面に行かないといけないし、今はここからじゃいけないでしょ？」

ハルカはそう提案した。なんとなくハイクはこうなる事を想像してはいたが。

「え……まあ、いいか。そうしましょう」

今は一刻も早くキンセツシティに行きたかったので、この時ハイクは提案を呑んだ。

しかし、ハルカの性格から考えて、途中、ハイクにお得意の「冗談攻撃」を仕掛け、騒ぎを起こすであろう事を、ハイクは考えていなかつた。

.....え！？（後書き）

僕はセンスがほとんど無いので、ハルカのファッショングやスタイルが本当に良いかは、よくわかりません（汗）
詳しい人がいたら、どうかアドバイスを下さい。○○

嘘と冗談（前書き）

活動報告でも述べましたが、元々 投稿済みだった「プロローグ」と「出会い」を結合して新たな「出会い」とし、新たに「プロロー
グ：起こうじうる出来事」というのを執筆、投稿しました。
ぜひ、ご覧になって下さいね。

それでは、どうぞ！

太陽は既に西に傾いていた。
赤オレンジ色の日光が、ちょうど視野に入り、思わず手で目を覆つてしまつ。

117番道路。今ハイク達がいる場所の名前だ。キンセツシティとシダケタウンの間にある道路で、広がる花畠や心地よい風、おいしい空気といった、自然豊かでのどかな林道として知られている。

無論、ホウエン地方の異変はここも対象外ではないようで、チラリチラリと見覚えのないポケモンの姿を見かける。ただ、ここは101番道路などと比べると 力に捕らわれたポケモン の数は少ないようで、何度か見受けられた人達は、異変を多少は察知しているもののパニックにはなっていなかった。

ミシロタウン。思えば今どうなつてているのだろうか。ハイクが見てきた中で、あの辺りが一番多く 力に捕らわれたポケモン を見かけただろう。今頃大騒ぎになつてているのではないか。

「ハイク君どうしたの？」

ボーと考えていると、心配になつたのかハルカが声をかけてきた。

「あ……いえ、別に……」

ハルカの質問に曖昧に答えるハイク。

今はミシロタウンの事を気にしてもしょうがない。ハイクにはや

りたい事、やるべき事がある。それを真っ当するだけだ。

ハルカも、それ以上は追求しなかった。

「そういえば、ハルカさんは大丈夫だったんですねか？」

「つとあることに気づいたハイクは、ハルカに尋ねた。

「へ？ 何の事？」

しかしハルカは、質問の意味を理解できなかつたらしく、ハイクに聞き直してしまう。

自分の言葉が説明不足だと知つたハイクは、

「ミナモシティの事です。……レジスチルが襲つてきたんですよね？」

と、補足した。

それを聞いたハルカはようやくハイクの質問の意味が分かつたらしく、「ああ、その事」と声を出して納得していた。

「……その時はもう、タクヤ君を追つてミナモシティを離れてたから……。私は大丈夫だったの」

ハルカは少し時間をかけてそう答えた。

ハルカは元々ミシロタウン出身なのだが、最近ミナモシティに引っ越ししたのだ。

第二の故郷であるミナモシティが、今回の中でも大きな件に巻き込まれたのだ。この話は持ち出さない方が良かつたかな、とハイク

は少し後悔した。

「ミナモシティが大変な事になつてた、て聞いたのは今朝だつたら
ら……。もし私がその場にいたら、何か出来たのかも知れなかつた
けど……」

少しづつ雰囲気が重いものに変わる。……」の話題を持ち出した
のは本当に失敗だったようだ。

「あ、『めんね！変な雰囲気にしちゃつて……』

「いえ……話題を持ち出したのは俺の方ですから……。ハルカさん
はあまり気にしないで下さい」

場の雰囲気が重いと、いち早く察知したハルカは、明るい声でハイクに謝った。ハイクはそんなハルカを宥めるようにそう言ったのだが……、もう少し気分を明るくしても良いのでは？

「あれって……」

そんなこんなで、先を急ぎ歩いていると、目の前に赤い屋根の小さな小屋がポツンと立っていた。

もう建築されてからかなりの年月が経っているようで、所々シンミニのような物が残る木製の小屋には、補強されたような跡が残つていた。その部分だけが妙に新しいので、目立つて見えてしまう。

そしてその小屋から、やはり木製の柵が連なつていた。普段なら、その柵の先からは、ポケモン達の鳴き声が聞こえるハズなのである。しかし、今日は不思議と静まりかえつていた。

育て屋、という物を「存じだろうか。一度は聞いたことがあるはずだ。

トレーナーのポケモンを預かり、ある程度育成してくれる一種の公共施設だ。基本的に、ポケモンを預けられる期間は無制限だが、ポケモンを受け取る際、預けた期間に合った代金をトレーナーは支払わなければならない。

有料ではあるが、比較的安価な上に、プロのブリーダーが育成してくれる。その為、まだポケモンを育てなれてない、駆け出しのトレーナーに人気のある施設だ。

育て屋は、いつもなら預かつたポケモンを柵で囲まれた庭のような場所にポケモンを自由に放し、育成しているが、なぜか今日は1匹もポケモンを放していない。どういう事だろうか。

「こんにちは」

不穏に思いつつも、ハイクは、小屋の前に立っていた1人のお爺さん声をかけた。

「おお、君は確かにハイク君じゃつたか? こりゃまた随分久しぶりじゃのう……」

お爺さんも、老人独特の口調でハイクに答えた。

実は、この老人は育て屋の1人なのだ。周りの人からは、育て屋爺さんと呼ばれ、親しまれている。

現在、育て屋はホウエン地方ではこの場所にしかない。しかも運営しているのはたった2人で、どちらも老人なのだ。

2人とも、まだまだ現役で育て屋を続けたいらしく、引退する気は微塵も無いらしい。

ハイクは、この2人とは知り合いだつた。前にホウエン地方を旅した際、お世話になつたのだ。

「ん？ そちらのお嬢さんは……？」

育て屋爺さんはハイクと共にいたハルカについて、尋ねてきた。

「お前さん、テレビで見たことがあるや……はて、何じやつたかの？」

「やだなあ、ハルカですよ！ 前にもお会いしましたよね？」

ハルカは育て屋爺さんにそう答えた。なるほど、ハルカも育て屋爺さんを知っているようだ。顔が広いんだな、とハイクは思った。

「おお、そうじやつたそうじやつた。名前が、出てこなくての」

育て屋爺さんは、笑いながらハルカにそう言つていた。それに釣られて、ハルカも苦笑していた。

「じゃが、何でハイク君と一緒にいるんじや？」

すると、育て屋爺さんがハルカにそう尋ねた。

テレビに出る程の有名人が、なぜハイクと一緒にいるのか、不思議に思ったのだろう。

ん？ その質問は……ああ、何か嫌な予感が……。

「実は私たち、付き合つてゐるんです!」

「はあ!…?」

やつぱつ……。多少は予想していたが、やはり声を出して驚いてしまつ。

ハイクは、この口だけで何回かなん声を出して驚いただらうか。
「ほつ……。こんなに綺麗な方とお付き合つてしまふとは……。ハイク君も、なかなか隅に置けんのつ

「ちよ……違つたです! 勝手に話を進めないで下さりよ!」

ハイクは慌てて否定するのだが、それを無視してハルカが話を進めた。

「フフッ私の自慢の恋人なんです!」

「ホツホツホー! 若いって良いの!」

話がどんどん膨らんでしまつ。このままではやうに変な方向に進んでしまつだらう。

「待つて下さい! 冗談、冗談ですよ! 冗談ですよ、ハルカさん! と言つた、これはもう冗談では済ませませんよ!」

やうに慌てたハイクが、叫びよつとしてそう言つた。

ハイクの必死の叫びのお陰で、よつやく育て屋爺さんも「冗談だと気づいてくれたようだ。

「なんじゅ、冗談じゅつたか……」

「いやいやー何ちゅうとつまんないうな顔してんですか?」

残念そうにしていた育て屋爺さんに、ハイクはツッ「なんだ。そんな風に慌ててふためくハイクを見たハルカは、苦笑した後、宥めるようにハイクに言った。

「どう? 今は元気出た?」

「え……?」

「せつとき、私が変な空氣にしちゃったから、元気が無くなつてたでしょ?」

「あ……」

どうやらハルカは、先ほどの事を気にしていたようで、ハルカなりに氣を使ってくれたようだ。本当に、悪い事しちゃったなあとハイクは思い、ハルカに謝つた。

「あ、せつござんば……」

「と育て屋を見たハイクは、ある事を不思議に思った。

「今日は、ポケモン達を見かけませんが……どうかしたんですか?」

ハイクは今 気になつてゐる事を育て屋爺さんに尋ねた。やはりホウエン地方の異変の影響なのだろうか?

「ふむ、リーグから指示があつての。急ぎよ、別の場所に移動させたんじやよ」

「リーグから、ですか?」

育て屋爺さんの答えを聞いたハイクは、つこ声に出してしまつた。

ポケモンリーグは、それぞれの地方で定期的にポケモントレーナーの大会を開いているだけではなく、地方の政権の一部を、握つていらうらしい。いわゆる知事のようなものだ。

そのリーグから直接指示があつたのならば、かなりの大事だらう。

「やつぱり、ホウエン地方の異変の影響ですか?」

「おそらく、な。……明日、リーグがホウエン地方の全面的な調査を開始するらしいのじゃが……」

「え……? そななんですか?」

ハイクの質問に対し、育て屋爺さんが答えた内容は初耳だつた。

異変が起きてから、明日で三日。リーグも事態がかなり悪いと判断したのだらう。

そんな事を思つてみると、育て屋爺さんがハイクに別の話題を持ち出しだ。

「ところで、前に君に渡したタマゴの子、元気にしつるか?」

しかし、ハイクの表情はその言葉を聞いた瞬間、暗いものとなる。ちょうど育て屋爺さんに背を向けていたのでその表情を読み取られる事は無かったが、ハイクは何て答えればいいか分からず、言葉が詰まってしまった。

「ハイク……君？」

ハイクの異変に気付いたハルカが、心配そうに見つめてきた。それに気付いたハイクは、慌てて表情を明るい物とし、振り返って育て屋爺さんの質問に答えた。

「あいつは……元氣ですよ」

ハイクは、嘘をついた。

「ほひ、そうじゅつたか。それは良かつた」

ハイクは前の旅の途中に、育て屋の夫妻に身寄りのないポケモンのタマゴを、譲つてもらつた事がある。

初めてのポケモンのタマゴだったので、どんなポケモンが生まれるか、わくわくしながら旅を続けていた。そして、ようやくタマゴが孵つたのだ。あの時の溢れるような感動は今でも忘れない。

タマゴから孵つたポケモンはすぐにハイクに懐いてくれた。そしてそのまま、ずっと一緒に旅を続け、ずっと一緒に暮らしてきたのだ。そう、あの時までは。

研究所から忽然と姿を消したハイクのポケモン。その中に、彼は含まれていたのだ。

今は、どこにいるのかも分からない。また会えるのかさえも分か

らない。ハイクに最も懐いてくれた、そのポケモンに……。

「あの……それじゃ俺たち、も'行きますね。行かなきゃいけない所があるので……。お婆さんにも、よろしく伝えて下さい」

「ん? そつじやつたのか。……分かつた、婆さんにも伝えておこう」

「……はい、お願ひします」

考えれば考える程、ハイクの胸はどんどん苦しくなる。
これ以上、笑った表情を続けるられるかどうか、自身が無くなつたハイクは、そつ言い残してその場から立ち去つてしまつた。

「あ、待つてよ、ハイク君! それでは、またお会いしましょ」

慌ててハルカもハイクの後を追つた。

「うむ、氣いつけてな」

育て屋爺さんが見送つている中、ハルカは少し小走りでハイクを追つた。

「ハイク君? 一体どうした……の?」

ようやくハイクに追いついたハルカは、ハイクの顔を見て言葉を

失った。その表情は、育て屋爺さんと話した時の明るい表情とは別
の、厚い雲に覆われた空のような表情だった。

嘘と冗談（後書き）

前回と今回でふざけすをました……。

次回、「“雷”の召喚陣」です。

お楽しみに！

感想、お待ちしておりますので、ぜひお書きください。

“雷”の駆除陣（前書き）

予告通りです。

今日は、かなり長くなってしましました……。

“雷”の召喚陣

「やつと……着いた……」

ハイク達は、ようやくキンセツシティに到着した。シダケタウンから歩くこと一時間弱、辺りはすっかり暗くなっていたが、何とか着くことが出来た。

キンセツシティは、ミナモシティやカナズミシティと比べるとまるで、そこそこ大きな街だ。

また、この街には雷タイプのポケモンの使い手、テッセンが管理するポケモンジム、キンセツジムがある事でも有名である。ホウエンリーグを目指すなら、必ずしも潜らなければならぬ闇門だろう。ホウエンリーグは半年ほど前に開かれたばかりなので、少なくとも後半年から一年以上は開かれないと考えるトランナーも多いようだ。半年から一年以上は開かれないと考えるトランナーも多いようで、ジムの休みは少ないようだ。

「それで、どの辺りでノを見たんですか？」

ハイクがハルカに質問した。

ただ一口にキンセツシティといつても、完全に場所を特定できる訳ではない。勿論、かなりの時間が経つてしまっているので、ノがまだそこに留まっているとは考えにくいが、多少の手がかりだけで今のハイクにとつては大きな助けとなる。

「うーん……。確か、ジムの近く辺りだったような……」

ハルカは曖昧に答えた。しかし、それだけで十分な情報だった。

ジムならば仮にそこにNがいなくても、普段からかなりの人々で賑わっているため、ジムの人人がNへと繋がる手がかりを握っている可能性が高いのだ。

「あ、でも確信は出来ないから……、一応 手分けして探した方が良いと思つよ。私も手伝つから」

「良いんですか？すいません……。じゃあ俺はジムの方に行つてみます」

ハルカの厚意に申し訳なさそうに甘えつつも、ハイクはジムへと向かつた。ハルカも少しでも良い情報を得る為に、ハイクとは別の方向に足を運んだ。

キンセツジムは、赤い屋根といい自動ドアといい、カナズミジムと比べても大差ない作りをしていた。と、言つかポケモンジムは他の街でも同じような作りをしていた。多少の違いはあるものの、どんなトレーナーでも一眼で分かるように、といった配慮だとか。まあ、例外は有るのだが。

「よし……」

自動ドアの開放音と共に、ハイクはジムの中へ入った。

外は暗いが、ジムの中は眩しいくらい明るかった。

天井に敷き詰められた多くの蛍光灯だけでなく、規則的に床に置かれた何かの装置が光を放っているため、明るさは普通の建物の倍近くだった。まさに、雷タイプのジムに相応しい光景だろ？

「ハ、こんばんは」

ハイクはジムの奥まで進み、このジムのジムリーダー、テッセンに声をかけた。

「ん？ おおー、つやまた懐かしい顔がやつて來たぞー。」

テッセンはハイクは見た途端、懐かしそうな声を上げてそう言つてきた。どうやら半年前とほとんど……いや、全く変わってないようだ。

テッセンはホウエンのジムリーダーの中でも、最も高齢なお爺さんだが、その元気と健康さはジムリーダーの中でも随一だろう。その健康の秘訣は、本人曰く、とにかく笑う事、らしい。控えめなハイクとは正反対な性格だ。

「ど、どせり……」

「わっははははー、相変わらず元気がないの？ もうと元気をだすのじゃー！」

「ははは……。お元気をつで何よりです

相変わらずの高いテンションで出迎えてくれたテッセンのペースに、いつの間にかハイクは流されてしまった。もともとハイクは人前では大声で笑う事はないので、こんなにも清々しく笑えるテッセンが少し羨ましかった。

「ハイク君、あの後ホエンリーグを優勝してチャンピオンになつたそりじゃな！まったく、君には驚かされてばかりじゃよ！わつははは！」

「え？あ……いや、リーグチャンピオンになれたのは、ほんとどまぐれみたいなもんで……。運も良かつたっていうか……。レインも、俺と同じくらいの実力ですし……」

思わずタイミングでテッセンにその話を持ち出されたので、照れ隠しをするかのようにハイクはそう答えた。ハイクはあまり煽てられたりするのが得意では無いので、どうしてもそんな受け答えになつてしまつ。

「あ、あのー実はテッセンさんに伺いたい事がありまして……」

そこでハイクは、隙を見てようやく本題に入る事が出来た。ハルカもノ探しに協力してくれているというのに、ハイクだけいつまでも世間話をしている訳にいかないだろう。

ハイクはテッセンに対する大まかな特徴を伝え、このジムを訪れていないか、などの質問をした。

しかし、テッセンは少し考え込んだ後、

「うーん……そんな奴は来とらんのう……」

と答えた。

それを聞いたハイクは、がっくしと肩の力が抜けてしまった。ようやく手がかりを掴んだかと思つたら、またどこかへ逃げられ……。雲を掴むような話、とは正しくこの事だらう。

「あ、あのぉ……ちょっと良いですか？」

すると、がっかりしていたハイクにジムのトレーナーが声をかけてきた。不意な事だったので、ハイクはやや反応が遅れたが、

「あ、はい。俺に用ですか？」

と、トレーナーに答えた。

「あの、そんなような人なら僕見ましたよ。……たぶん」

そのトレーナーの言葉を聞いた瞬間、ハイクの心臓の鼓動は速さを増した。

驚くべき事に、そのトレーナーはフランシス人を見たと言つのだ。

「えー?……あの、その、ビリで見たんですか?」

思いがけぬ収穫。動搖を隠せずに、ハイクはトレーナーに詳しい情報を尋ねた。

「えつ……と、確か煙突山の麓辺りを歩いていたと思ひますが……」

「煙突山、ですか。分かりました。ありがとうございます!」

煙突山と言えば、ここキンセツシティから1-1-1番道路を経由した所の、1-1-2番道路に存在する活火山の事だ。毎日のように山頂から煙が立ち籠めており、その姿が煙突のように見える事からそんな名前が付いたと言われているらしい。

だが、キンセツシティの次は煙突山……だんだん離れているような気がするが、情報が何も無かつた時と比べるとかなり気が楽だつた。

「良かったのう、ハイク君！君がそんな大声出してるの初めてみたぞ！はつはつはつは！」

またテッセンが大声でハイクにそんな事を言つていた。

よくそんなに笑つていて疲れないな……、と内心テッセンを関心し、羨ましがつていてるハイクがいた。

「う……ん……？」

ここはキンセツシティのポケモンセンターの宿泊施設。真夜中にハイクは目が覚めた。

その後、もう一度テッセンとトレーナーにお礼を言った後、キンセツジムを後にした。その後、ハイクはハルカと合流した。

ハルカはあまり良い情報を得る事が出来なかつたようだが、ハイクがキンセツジムのトレーナーから、この目撃情報を得ていたので、支障はきたさなかつた。

一刻も早く煙突山に向かいたかつたが、一人が合流した頃にはかなり遅い時間になつていたので、出発は明日という事になつたのだ。

「…………」

チラリと時計を見てみる。現在夜中の三時五分。あまりに中途半端な時間だったので、ハイクは思わずため息をつきそうになつた。こんな時間に起きている人と言えば、徹夜で勉強している者か、夜更かししてテレビを見ている者、またはゲームに没頭している者くらいだらう。当然の如く、外をフラフラとうろついている奴はそういないはずだ。

「……何だらう? 何か眠れない…………」

布団の中でもぞもぞと動きながら、ハイクはそう呟いた。一度起きてしまつてからというもの、何だか目が冴えてしまい、なかなか寝付かれなかつた。

布団に入つてから目が覚めるまでの数時間、ハイクには寝ている

間の記憶が無かつた。と、いう事は夢を見なかつた、あるいは忘れているのだろう。

おそれらぐ、変な夢を見たせいでききてしまつた訳では無れどさうだ。かと言ひて、トイレに行きたい訳でも無い。

「ん？……？」

何もする事がなく、ただボーッとしていると、急にハイクの頭に頭痛のよつなものが走つた。

「（何だ……！？）」

キーンと頭の中で弾けるよつな頭痛だつたが、痛すぎてどうしようもないほどでは無い。そんな事よりも気になる事が一つ。

「今のつて……一体……？」

ハイクの頭の中には、頭痛と共にあるイメージが過つていた。ぼんやりとしているけど、何だか妙にリアルで頭に外部から直接流れ込んでくるよつなイメージ。

胸騒ぎを感じたハイクはベッドから飛び降り、寝る時の薄着から、急いでいつも私服に着替えた。

ハイクの頭の中に流れ込んできたイメージ。それは101番道路のヒノアラシの時と同じ、誰かに助けを求めている。そんなイメージだった。

着替え終わったハイクは、導かれるよつにして部屋の出入り口まで歩き、ドアノブに手を取つた。

ハルカとハイクの寝ている部屋は別。ハルカを起こしてしまつ心

配は無いだろ？。

「（なんだ、この感じ？……懐かしいような、寂しいようなイメージ……。俺は、こいつを知っている…………？）」

そんな事を考えながらも、ハイクはノブを回し、部屋から出た。そしてそのまま、何かに引っ張られるように、ポケモンセンターからも出る。

無意識の内に、体が動いていた。

キンセツジム

「…………」

ハイクが向かつた場所、そこは先ほど情報収集の為に赴いたキンセツジムだった。

もう遅い時間なので、キンセツジムは静まり帰つており、人の気配は無かった。ジムに幾つかある窓はシャッターが閉まつてあり、中を確認する事が出来なかつた。しかし、シャッターが閉まつてない場所が一ヵ所……。

『……どうした、ハイク？』

「ジュカイン……？」

そんなキンセツジムの様子を眺めていると、モンスター ボールの中からジュカインが声をかけてきた。

いつから起きていたかは分からないが、ボールの中からハイクの異変を察知したのだろう。勘が鋭いジュカインの事だ。なぜハイクがこんな時間にこんな所に来てしまったのか、なんとなく分かっているのかもしれない。

『……何か、感じるのか？』

思つた通り、ジュカインはハイクにそんな質問を投げかけてきた。

「ああ……誰かが、俺を呼んでいる……そんな気がするんだ」

『……ヒノアラシの時、みたいにか？』

「うん……けど、今回は何だか……」

ハイクはそこまで言つた後、キンセツジムに歩み寄つた。

一力所だけシャッターが閉まつていらない場所、入口である自動ドアの前に立つた。

本来ならこの時間、ジムは既に電力を落としているハズなのである。勿論、自動ドアも作動しないハズ……。しかし、ジムの自動ドアはハイクが前に立つた途端センサーが反応し、ウイーンと音を立てて開いた。

「開いた……？」

驚きを表情に現しつつ、ハイクはそう呟いた。

今日の天気は快晴。夜空に浮かぶ満月の月明かりでさえ、眩しく感じてしまう。そのお陰で、明りのついていないキンセツジムの内部の様子を窺う事が出来た。ただし、入口から入る少量の月明かりなどたかが知れどおり、あまり詳しくは様子を窺う事は出来なかつた。

「…………」

ハイクは無言でジムの中に入った。一步一歩慎重に、少しづつ入っていく。糸を張ったような緊張感のせいで、たつた一秒が何倍もの長さに感じてしまう。

ハイクが完全にジムの中に入った、その時だつた。

「え……！？」

急にハイクの背後から大きな音が聞こえたかと思うと、ハイクの視界が真っ暗になつた。慌てて後ろを振り向くと、その原因が一瞬で分かつた。

シャッターが、閉まつてしまつたのだ。

「これって……閉じ込められた！？」

真っ暗な闇の中、思わずハイクは大きな声を出してしまつた。目の前が見えないため、余計にそわそわしてしまつ。

「あ……やつだ。あいつに頼めば……。出でてい、ヒノアラシ！」

ある事に閃いたハイクは、モンスター・ボールからヒノアラシを出した。ポンッといつ音と共に、ハイクの近くに淡い光が灯った。思った通り、ヒノアラシの背中の炎が明り代わりになつてくれたのだ。

「よし……。あらがとう、ヒノアラシ！」

ハイクは辺りを見渡した。見た限りでは、特に変わつた所はない。ではなぜ急にシャッターは閉まつたのだろうか。

『は、ハイクさん……あれ……』

「ヒノアラシ？…どうし……！？」

脅えた様子のヒノアラシが、ハイクに何かを指摘した。それを確認しようとした瞬間、辺りの様子が変わつた。

真つ暗だつた部屋に急に明りが灯り、機械の作動音がした。しかし、そんな事さえも気にならなくなるほど、ハイクは驚愕していた。

田の前に、見覚えのあるようなものが描かれていた。

それは、カナズミジムで見た、魔方陣のよつなもののそっくりだつた。

「これつて……まさかカナズミジムと同じ……！？」

嫌な予感がしていた。カナズミシティと同じ事が起きよつとして

いる。そんな気がしていた。

そんな風に魔方陣を眺めていると、バチバチと音を立てて、陣から光が溢れだした。

やはりこれは、カナズミジムのと同じ物。だとしたら、次に起ることは……。ハイクには予想がついていた。

「やつぱり……」

予想は的中。魔方陣の真ん中に、一匹のポケモンが現れた。

まず目に入るのは長い尻尾。その先端には、雷を模したようなものがついていた。そして、薄いオレンジ色のネズミのような身体。

ねずみポケモン、ライチュウ。そのポケモンの名前がそうである事は、一目で分かった。

「……ジユカイン！」

ハイクは、モンスターボールからジユカインを出した。今まで通りなら、あのライチュウは敵。ハイク達を、殺そうとするだろ。ならば、あらかじめバトルの準備をする必要があった。

「（ライ…チュウ…か。まさかな……）」

頭のなかで、ある事が連想されるも、ハイクは無理矢理それを振り払った。

『ハイク……どうする？』

ジユカインが、ハイクの指示を待つ。

「……まずは、」口から攻めてみよつ。『エナジー・ボール』だ

『……分かつた』

ハイクの指示を聞いたジユカインが、『エナジー・ボール』の準備をした。

右手に出来上がった『エナジー・ボール』を、ライチュウに飛ばした。大きな音が轟き、『エナジー・ボール』が爆発する。

『……どうだ?』

煙が舞っているせいで、どうなつたのかを確認する事は出来ないが、これぐらいじゃ終わりはしないだろつ。

しかし、ライチュウは一向に動きを見せない。

『……なぜ、動かない?』

「つー? 避ける、ジユカイン?」

『なつ?』

ライチュウは、一向に動きを見せない。その為、少し気を緩めてしまった。

気づいた頃には、もう遅い。

ライチュウは、ジユカインの背後に回り込んでいたのだ。ビリビリと音を立て、頬の電気袋が発光する。

そして、ピヨンと小さくジャンプすると、頬に溜め込んだ電気を

一気に解放、ジュカインを襲つた。

『くつ？』

ライチュウの“10万ボルト”を受けたジュカインは、ガクンと脚の力が抜け、座り込んでしまつた。

『チイ……！』

ジュカインを攻撃したライチュウは、綺麗に地面に着地した。ジュカインは、“10万ボルト”的影響で痺れた身体を無理矢理動かし、ライチュウを“リーフトンファー”で攻撃した。

『なつ？』

その攻撃は当たつていた。当たつていたハズだ。しかし、手応えがない。“リーフトンファー”は、空を斬つていた。

『ジュカインさん、後ろです！』

ライチュウは、凄まじいスピードでまたジュカインの背後に回り込だ。あまりに凄まじ過ぎるスピードの為、常人ではその姿を捕らえる事でさえ難しいだろう。

ライチュウはまた、“10万ボルト”で攻撃した。

“電光石火”で相手を翻弄しつつ、隙を見て“10万ボルト”で攻撃……

ライチュウの戦い方を見たハイクは、そう呟いた。この戦い方、

どこかで……。

「？」「ぐう？」

その瞬間、頭痛がまたハイクを襲つた。だが、今回の頭痛はポケモンセンターの時と比べ、遙かに激しい頭痛。

『ハイクさん？』

ハイクの身を心配したヒノアラシが、そう言った。が、それに答えることさえ、出来ない。

これは、ただの頭痛ではない。頭の中に直接イメージが流れ込んでくる感じだ。それも、どれもハイクの頭の中に存在していた、数々の思い出ばかり。

『ハイク？』

ボールの中からハイクの異変に気づいたラプラスが、勝手にボールから飛び出し、ハイクに呼びかけた。しかし、そんな事は気にならない。気にする事さえも出来ない。

「くう……ハア……ハア……」

頭痛が收まり、ハイクはゆっくりと立ち上がる。戦っていたジュカインも、ハイクの異変に気づいているようだ。

『ハイク、大丈夫ですか？』

ラプラスが声をかけるが、反応がない。顔を覗きこんでみると、目を大きく開き、息を切らしていた。明らかに普通でない。

「嘘だ……」

ボソリとハイクが呟いた。

『嘘……？ 何が嘘なのですか？』

ティアが質問するが、やはり反応はない。
ハイクは意識を失いかけていた。

“雷”の冒険陣（後書き）

今回は、色々と詰め込み過ぎ + グダグダでしたね……。そこが反省点です。はい……。

次回で多分、4章ラストです。

なるべく早く更新出来るように頑張りますので、楽しみにしていて下さい。

貰つおひ頃つむと……（繪畫モ）

お待たせしました！

第4章ワスト、ハリケー

哀しみと恥しみと……

ハイクは、暗い表情のまま俯いていた。相変わらず息を切らしており、顔には汗が浮かんでいる。

『ハイク、しつかりして下さい…』

ラプラスが呼びかけても、返事はおろか反応すらない。完全に周囲の音をシャットアウトしているようだ。

何かに迷っている？いや、何か受け入れ難い真実を知つてしまつたような、そんな表情だった。

ハイクの異変は、ライチュウと戦っている最中のジュカインでも察する事が出来た。しかし、今は目の前の敵との戦いに集中すべき時だ。ハイクを呼びかける事は出来ない。

ジュカインはしばらくの間ライチュウの攻撃を受けている内に、だんだんと動きが読めるようになってきた。

基本的に“電光石火”と“10万ボルト”的繰り返し。だが、ライチュウの姿を確認してから攻撃を仕掛けるのでは遅すぎる。なら、あらかじめライチュウが動きを止める場所を予想すれば良い。

相手の攻撃を見切る技、“見切り”を使うのが一番手っ取り早いのだが、残念ながらジュカインは“見切り”を使う事が出来ない。自分の感覚だけを頼りに、ライチュウの位置を把握するしかない。

『クッ……』

なんとかライチュウの“10万ボルト”を避けた後、ジュカインは目を瞑り神経を集中させる。

そして、今までのライチュウが動きを止めていたポイントを思い出す。ライチュウは、必ずジュカインの視界の外に回り込むような動きをしていた。と、いう事は次にライチュウが動きを止めるポイントは……。

『…………そこだ』

ジュカインは素早く後ろを振り向き、“リーフトンファー”で攻撃した。

今回は手応えあり。

ジュカインが攻撃したちょうどその場所に、ライチュウは動きを止めたのだ。

思わず反撃にライチュウはなす総べなく、吹っ飛ばされた。大きな音を立てて壁に激突する。

ジュカインは、『よし……』と歓喜の声を上げていた。

『…………』

ライチュウは、無言で立ち上がる。ダメージは受けたハズだが、何事も無かつたかのようだ。

“リーフトンファー”が直撃した所は赤くなっていたが、ライチュウはまるで動じない。

『（ダメージは……受けているのか？……いや、受けているハズだ……。やはりこいつも、あの時のシェイ!!と同じ……）』

ジュカインは、心の中でそつ考へていた。カナズミジムの事を思
い出していたのだ。

あの時 戦つたショイミと同じならば、普通のライチュウと同じ
感じで戦つては勝てないだろう。

おそらく、あのライチュウも 力に捕らわれているハズ……。な
ら、少しでも油断したら、あっという間に殺されてしまうだろ。

そんな事を考へていると、またライチュウの姿が消えた。ジュカ
インに反撃をするつもりだろう。
それを見たジープターは攻撃に備えるのだが、いつまで経つても
ライチュウは攻撃してこない。

ジュカインは、少しずつ妙に思つてきた。

『（なんだ……？攻撃しないのか……？それとも俺を狙つていない
のか……？。だとすると……）』

ハッ、とジュカインはある事に気づいた。

『ラップラスーハイクとヒノアラシを連れてそこから離れる!』

『え……？』

ジュカインは叫んだ。しかし、もう遅かった。

『…………！』

ライチュウは、今度はラップラスの真上で動きを止めたのだ。そし
て、そこで力を集中させ、身体に雷を纏う。その後、勢いよくラップ

ラスに突っ込んできた。

『ハイク、ヒノアラシ!』

それを見たラプラスは、咄嗟に頭でハイクとヒノアラシを押し飛ばした。一人と一匹は、訳の分からぬまま、何メートルか飛ばされる。

「つー?」

『て、ラプラスさん!/?』

ラプラスに押し飛ばされて、ハイクはようやく我に返った。しかし、何が起こったか今一理解出来て無いような表情でラプラスを見つめていた。

一方、ヒノアラシは声を張り上げ、ラプラスの名前を叫んでいた。

次の瞬間、激しい光が放たれた。

ライチュウの使つた技、“ボルテッカー”は、落下スピードをプラスした影響で勢いを増し、通常とは比べものにならない程の攻撃力になつていたのだ。

渾身の“ボルテッカー”はラプラスに直撃した。

『う……わ……あ……』

光の中、ラプラスは呻き声を上げる。今までに感じたことの無い感覚。激しい痛みが、ラプラスを襲つた。

「ラプラス……ス……？」

光が治まつた後、そこには、力尽き横たわるラプラスの姿と、それを見据えるライチュウの姿だった。

『チイ……！』

その時、ジユカインの中の何かが切れた。

“リーフトンファー”を構え、物凄い勢いでライチュウに接近する。しかし、その攻撃が当たる直前にライチュウは素早い動きで軽々しくそれをかわした。

「ラプラス！」

その隙に、ハイクはラプラスに駆け寄つた。揺さぶつたり、声をかけたりしてラプラスの意識を確認した。

『ハ……イク……？』

力無い眼差しでラプラスはハイクを見つめ、弱々しくそう呟いた。意識は辛うじてある。しかし、既に動ける力は残つていなかつた。

一撃。たつた一撃でこの中で一番 体力があるラプラスを戦闘不能にしたのだ。もし、ティアが押し飛ばしてくれなかつたら、ハイクやヒノアラシは命に関わっていたかもしれない。

『ラプラスさん……ラプラスさん……』

ヒノアラシは目に涙を浮かべ、何度もラプラスの名前を呼んでいた。

「じめん……ラプラス……」

ハイクはラプラスに向かって、そう呟いた。

自分のせいでこうなった。

ハイクはそう思っていた。
あの時、いつまでも躊躇していなければ……。

「ライチュウ……。ビリして……」

ハイクはボソリと呟いた。

『……？ いつたい何を言つてるんだ……？』

その呟きが耳に入つたジユカインが、ハイクに尋ねた。
その質問を受けたハイクは、躊躇うような表情を見せた後、口を開いた。

「俺がオダマキ博士の研究所に預けたポケモン……。あの日、研究所から姿を消したポケモンの一匹が、あいつなんだ……」

ハイクのその言葉を聞いたジユカインとヒノアラシ、そして辛うじて意識が残っていたラプラスは、驚愕の表情を浮かべていた。

一体どういう事なのだろう?

それではハイクの仲間……友達だったポケモンが、ハイクを殺そ
うとしている事になる。

『確かに……なのか?』

「……言葉じゃよく表せないけど……あいつから伝わってくるイメージ……あいつの思いそのものが、ライチュウの物なんだ……！」

ジュカインの投げかけてきた言葉に対し、無言で頷いた後ハイクはそう言った。

『どういう意味だ……？』

「あいつは、俺に助けを求めている……。暗い、深い闇の中……一人ぼっちで、もがき苦しんでいるんだ……！」

言葉じゃ言い表せない。ただ、なんとなく、なのかもしれない。しかし、ハイクには分かる。たとえ牙を向けられても、あのライチュウは友達だ。

ハイクがタマゴから育て続け、ずっとと共に時を過ごしてきた大切な仲間だ。

それは、どうなううと変わらない事実。ハイクとライチュウの絆は、絶対だ。

ジュカインの攻撃をかわしたライチュウは、距離をとつて様子を窺っていた。

「俺が、ライチュウに呼びかけてみるよ。俺の声が届けば、こんな事やめてくれるハズだ……」

ハイクはラプラスをモンスターボールに戻し、そう提案した。

『だが、危険だ。あいつがあんたを襲わないとも限らない……』

しかし、ジユカインはハイクにそう言った。

その意見はもつともだ。今までハイク達を殺そうとしていたライチュウが、急に大人しくなるとは思えない。

だがハイクは、そんなジユカインの案を呑まず、一言だけ言い残し、ライチュウに歩みよった。

「……やつてみるよ」

ただ、その一言だけ。しかし、その一言にはハイクの多くの思いが詰まっていた。思わず圧倒されてしまいそうな、強い思いが……。

「ライチュウ……」

ハイクが名前を呼ぶと、ライチュウはピクリとだけ反応した。しかし、依然としてハイクを威嚇している。

「やつと……会えたな……」

ハイクはすこし小さな声で呟つた。その間、ライチュウはじりじりと距離を詰めてくる。

ハイクを殺そうとしているライチュウにとつて、これは願つてもないチャンスだ。警戒しつつも、隙をみて飛びかかるうとしているのだろう。

「ずっと、お前を探してたんだ。いなくなつてからずっと……」

ジユカインは、いつでも攻撃できるよう構えていた。ライチュウは今にもハイクに襲いかかってきそうなのだ。

「心に穴が開いたみたいだつた。だつて……急にいなくなつちゃうんだからな……。もう一度と、会えないかもしれないって、何度も思つた」

これ以上は限界だ。ジュカインはそう思つた。このままではハイクは殺されてしまう。

「力に捕らわれて、苦しい……だろ……？暗い中、一人ぼっちで……辛かつただろう？……でも、もう苦しまなくていいんだよ……。こんな事、しなくていいんだ……」

その時、ライチュウの動きが止まつた。目の前から向けられる数々の強い思いに、体が自然と動かなくなつたようだ。

『こんな事が……』

ジュカインは驚きを隠せずにいた。目の前の光景が、信じられないのだ。

ハイクとライチュウの強い繋がりが、奇跡を起こしたと言つのだらうか。

気が付くと、警戒し、逆立つていたライチュウの体毛が、少し弱くなつていた。
警戒を、緩めたのだ。

それを見たジュカインも、警戒を緩める。
もう大丈夫だ。そう思つていた。

「一緒に、帰る?……？」

最後にハイクがライチュウにそう言った。今まで鋭い眼差しでハイクを睨んでいたライチュウは、少しだけその眼差しを緩めていた。

これで終わつたと、誰もが思った。

しかし、

『…………！？』

「つー？ライチュウ！？」

急に、ライチュウが苦しみ始めたのだ。
ハイクが声を上げてライチュウに駆け寄ろうとするが、

「なつ！？」

ライチュウが、大量の電気を身体から放出した。

『ハイク！』

ジュカインがハイクの名前を呼ぶ。しかし、ハイクにの耳にはそれが入つていなかつた。

「ライ……チュウ……」

ハイクが無理矢理ライチュウの所へと突き進もうとするが、電気のせいでなかなか進めない。

ライチュウは、大きな鳴き声えを上げながらも、電気を放出しな

がら後ずさる。

そしてしばらへそうじた後、動きを止めた。

「ライチュウ……？」

ようやく進める。そう思ったハイクはもう一度 駆け出そうとした。

『ハイクさん！ダメです！』

しかし、ヒノアラシのその叫びが耳に入り、足を止めた。

駄目？何が駄目なんだ…？

ハイクはそう思いかけたが、次の瞬間にはそんな思いも、どこかへ消えてしまった。

「え…？」

ライチュウがハイクに向けて“ボルテッカー”を使ったのだ。だが、ハイクはすぐにこの状況を整理出来る訳がない。

雷を纏い、グングンとスピードを上げてハイクに突進してくる。

「（そんな……ライチュウ……）」

ハイクは、心の中でうなづいた。完全に身体が固まり、動けなくなってしまう。

しかし次の瞬間、ハイクの目の前に緑色の何かが割り込んできた。

それは再び攻撃態勢に入つたジュカインだった。

「ジュカイン……？」

『……はあー』

ジュカインはタイミングを計り、“ボルテッカー”で突進してくるライチュウを“リーフトンファー”で迎撃した。

『チイ……』

そのままライチュウを押し返そうとするが、ライチュウの力も尋常じゃない。なかなか押し返せずにいた。

「……ライチュウ……」

その様子を茫然と眺めていたハイクがそう呟いた。その呟きを聞いたライチュウは、一瞬 力を緩めた。しかし、ハイクはそれに気づかなかつた。

『終わりだ……！』

その隙に、ジュカインは一気にライチュウを押し返した。

『デュウフー？』

そんな鳴き声を上げて、ライチュウは吹っ飛んだ。

ライチュウは魔法陣の中まで吹っ飛ばされ、そのまま地面に体を強打し、動きを止めた。

「ライチュウ……？」

戦いは終わった。

しかし、思い雾囲氣が辺りを覆っていた。

「ライチュウ！」

ハイクが、ライチュウに駆け寄った。それを横目に、ジュカインは座り込んでいたのだ。

ダメージは、かなり大きい。が、違和感を感じていた。

確かにあの“ボルテッカー”は凄まじい威力だった。しかし、ラプラスに放った時と比べると明らかに威力が小さいのだ。
あのライチュウは、何か混乱していたのか……？

「うつ！？」

ハイクはライチュウに駆け寄ろうとしていた。もう少し、もう少しでたどり着く。

そう思つた瞬間だつた。魔法陣が光を放ち始めたのは……。

『何だ……！？』

ジュカインも声を上げていた。……もう、嫌な予感しかしない。

光が治まつた後、そこには一人の男が立つてた。

カナズミジムの時にも、急に魔法陣から現れた人物。その人物が着ていたローブの、色違いを纏ついていた。

色は白。白いロープの男、……。

「ふむ……！」の程度か……」

白いロープの男が、そう呟いた。その声の質から、彼は男性だろう。

そしてもう一つ。おそらくこの男は、カナズミジムで会った紅いロープの人物とは別人だろう。なんとなく雰囲気が違うし、よく見るとこちらのほうが大柄だ。

「まあ、面白いものは見せてもらつた。今回はそれだけで良しとしよ」

白ロープの男はそう言つた後、軽々とラチュウを抱き上げ、ハイクに背を向けた。

「待て……！」

しかし、ハイクが白ロープ男を引き留めた。

『は……ハイクさん……？』

そのハイクの声を聞いたヒノアラシは、震えながらそう呟いていた。

そのハイクの声は、今までヒノアラシが感じた事がないほど、強い怒りが込められていた。

「ライチュウに……」

ハイクがそこまで言つた後、白ロープの男はゆっくりと振り向い

た。

「ライチュウに何をした……！？」

今までにないほどの鋭い眼差しで、ハイクは白ロープの男を睨みつけた。怒りで身体が小刻みに震える。だが、ハイクの中で渦巻いている感情は、怒りだけではなかつた。

「フツ……フフフフ」

そんなハイクの眼差しを受けても、白ロープの男は全く動じず、静かに笑っていた。

怒り、苦しんでいるハイクを見て、樂しんでいるかのよひ……。

「なかなか、いい顔をしてくれる……。哀しみと苦しみと憎しみに満ちた表情だ……」

「質問に、答えるよ……」

小馬鹿するようにそんな事を言つた白ロープの男に対し、ついにハイクの怒りが爆発した。

声を上げ、白ロープの男に向かつて走り出す。

「ふん！」

「つー？」

しかし、白ロープの男が手を翳すと、また魔法陣が眩く光り始めた。

「やはり君は、私を楽しませてくれる。……まあ、ゲームを続けよ
う……」

白ローブの男がそう言い残すと、魔法陣と共に光が消えた。

「ライチュウ……」

そこには既に、ライチュウの姿も、白ローブの男の姿も無かつた。

「ライチュウ……ライチュウ……」

身体に突き刺さるような重い雰囲気の中、ハイクだけが頻りにライチュウの名前を繰り返す。

「」の戦いは終わった。ハイク達の勝利のハズだ。しかし、果たしてこれを勝利と呼べるのだろうか？

研究所から姿を消したポケモンが、生きている事は分かった。だが、既に彼はハイクの知っているポケモンではなかった。

ハイクとの絆を奪われ、混沌とした苦しみの中で殺戮を繰り返す、獸と化してしまっていた。

「うわああああああああーーー！」

ついにハイクは感情を抑えきれなくなり、叫んだ。叫べば少しは哀しみを紛らわせると思った。だが、叫んでも叫んでも哀しみは一向に晴れない。ただ、空を響かせるだけ……。

ジユカインもヒノアラシも、そんなハイクにかける言葉を見つける事が出来ず、茫然と立ちすくんでいた。

息が続かなくなり、ハイクの叫びはどんどん小さくなる。……やがて、完全に消えた。

「うぐう……」

その後、ハイクは座り込んでしまった。そして、自らの拳で力一杯 地面を殴つた。

そんな事をしても、何も変わらない。分かつている……。分かつているのだけれども、今は少しでも哀しみを紛らわせたかった。

叩きつけられた拳に自然と力が入る。

ハイクの頬を伝つていた熱いものが、その拳にこぼれ落ちていた。

哀しみと恥しみと……（後書き）

気がついたら小説の執筆作業にえりへ時間を費やしてました……。

実は僕、そろそろ学校で定期テストがあるんですね。
と、いつ訳で一週間ほど執筆作業が出来ません（汗）

テストが終わったら、すぐに執筆作業を再開するつもりなので、
どうかしばらくお待ちください（――）。

淀んだ空（前書き）

皆さんに重要なお知らせがあります。

僕の小説、ポケモンに名前をつけてましたよね？実は、あれのせいで色々とあります……。あ、でもそんな大したことでは無いんですよ。

その為、急ぎょポケモンの名前は無し、といつ事になってしましました。

後先考えず、名前をつけてしまった僕の責任です。申し訳ありません。

でも読者の皆さんのが混乱してしまつといけないので、ijiで一度ハイクの手持ちを確認しておきたいと思います。

現在の手持ち

- ・ジュークайн
- ・ヒノアラシ
- ・ラプラス

元手持ち（登場済みのみ）

- ・ライチュウ

お騒がせして、本当にすこませんでした。

淀んだ空

今日のキンセツシティは、朝から騒がしかった。

昨日以上に多い人影や、何台もの車。しかし、賑わっている、とはまた別の騒がしさだった。これから何か大きなイベントがある、という訳ではなさそうだ。

ホウエン地方に異変が起きてから、今日で三日目。リーグによる、ホウエン地方の全面的な調査が始まつたのだ。

あちこちで本来ホウエン地方には生息していないはずのポケモンが凶暴化し、人々を襲つている中、当初リーグは、この異変の原因は新種のウィルスだとか、寄生虫によるものだと考えていた。

その為、多くのポケモンが混入するであろう育て屋のポケモン達を別の場所に隔離するなどの対処をしていたのだが、現在は、ウィルスだとかそういう^{たぐ}類いの物が原因ではないと断定している。

では、一体何が原因なのか？現在はそれを調査している訳だ。
無論、キンセツシティも調査の対象外ではなく、今日はこうして朝から調査が開始されているのだ。

そんな大通りの手前の通り。比較的 人が少なめの通りにあるベンチに、ハイクは座つていた。

ジュカインとラプラスは、既にポケモンセンターで傷の手当を受けて、今は完全に回復している。

ハイクの視界はやや斜め下を向いているように見えるが、何かを

見ている訳ではない。突きつけられた辛い事実に心身共に耐えられず、脱力しているのだ。

その少年の俯いた顔の瞳は、光を失っていた。夢と希望と言ひ名の光を失ってしまった、死んだ魚のような眼だった。

「…………」

ハイクには既に、声を出す元気も、ため息をつく気力さえも残されてなかつた。

真夜中でのライチュウとの戦い。あの戦いは不思議と、周囲の人々には知れて無かつた。

夜遅い時間、と言う事もあるだろうが、あの時はジムの全てのシヤツターが閉まっていたため、外部に音が漏れにくかつた、と言う事もあるだろう。

あの戦いで、ジムの一部が損傷したりしたのだが、それも気づかれなかつたようだ。

ポケモンジムは、元々バトルをするための場所だ。
数多のバトルによつて できたジムの損傷と、たつた一回のバトルで できた損傷とでは、正に桁が違う。

あの戦いの痕跡は、殆ど残らなかつたと言えるだろう。

そんな事もあり、あの戦いを知つてゐるのはハイクとその手持ちのポケモン、そしてあの白ローブの男だけ、と言う事になる。

「あ、いた……。ハイク君！」

朝早くからしばらくそのベンチに座つていたハイクに、誰かが声をかけてきた。

その声は、ハイクには聞き覚えのある、女性の声だった。重い頭

を無理矢理動かし、ハイクはチラリと声の主の顔を確認する。

赤いパークーに、栗色の長髪。色白な肌に、黒い瞳。

間違いない。ハルカだった。

「ハルカさん……」

「もひつ……。一体どこ行つてたの？ 急にいなくなつたりやつんだから……。心配したのよ？」

少し怒つているような、でも安心したような口調で、ハルカは言った。

ハイクはあの戦い後、重い足取りでポケモンセンターに戻つた。もう一度布団に入り、眠らうとしたのだが、結局 殆ど眠れなかつた。

静かな部屋で眠る事に集中しようとすると、心中では思つていはずなのに、色々な思いが次々と溢れてくるのだ。

ライチュウはどうなつたんだろう、とか、他の皆もあんな風になつちゃつ正在するんじゃないのか、とか……。

気がつくと、太陽が昇り始めていた。

これ以上は眠れそうに無いので、ハイクは私服に着替え、ハルカには何も言わずに出て行つてしまつたのだ。

「……すいません」

ハイクは、弱々しくそう謝つた。

明らかに何時もと違うハイクに、ハルカはすぐに気づいた。

「どうしたの？元氣ないみたいだけど……。何かあったの？」

「…………」

ハイクは答えない。それどころか、より一層 元氣をなくしてしまっているように見える。

聞かない方が良かつたかな……？と内心ハルカは思い、ハイク君の元気が戻る方法は……などと考えていた。

そして何か閃いたような顔をした後、ハルカはハイクに言った。

「そんなんじや、私の恋人は務まらないよ……？」

「俺はハルカさんの恋人でも何でもありません。ただの知り合い、というだけです」

ハルカは、ハイクに元氣を出させるため、お得意の冗談攻撃を仕掛けるのだが、ハイクはあっさりとそれをかわした。

「え……？」

あまりにきっぱりとそう言われたので、思わずハルカも動搖してしまう。

何時ものハイクなら、慌てて全否定するはずなのだが、今日は違う。

冷静になっている訳じやない。ただ、何も考えてないだけ。いや、何も考えられないのだ。もつと強い、大きな気持ちがハイクを包んでしまっている。

周りの事が気にならなくなる程の、強い感情が……。

「（ううん……。今は冗談とか言わない方がいいかも……）」

ハルカは、心中でそう呟いた。

このような場合、いくら他人が頑張つても、本人自身の気持ちが揺らがなければ意味がない。つまり、完全に自分の世界に入つてしまっている今のハイクに対しては、そつとしてあげるのが一番なのだ。

「……………ハルカさんは……………」

長い沈黙の末、ようやくハイクの口が動いた。

「ん？……………何？」

「……………いえ、何でもありません……………」

しかし、ハイクはまた自分で話を切つてしまつた。

何を聞こうとしたのかは分からぬが、ハルカに聞くべきではないと判断したのだろう。

別にハイクはハルカを信頼してない訳じやない。ただ、聞きにくいのだ。

ハイクはハルカとは知り合ひだが、あまり深い付き合いと言う訳ではない。それに、ハルカとは随分 前から会つていなかつたのだ。とても親しい中の相手には言える本音も、おいそれと話す事は出来ない。

「……………それじゃ、俺そろそろ行こうと思ひます」

するとハイクは唐突にベンチから立ち上がり、ハルカにそう告げた。

ハルカは「え……？」と声を上げ、驚いた表情を浮かべていた。それもそのはず。それはあまりに唐突過ぎたのだ。

「……俺は早く今を見つけなきやいけないんです。昨日も話した通り、Nらしき人を煙突山で見たって言つ人がいます。……俺は煙突山に向かいます」

なんとなく想像はついていた言葉。しかしハルカは動搖を隠せずについた。

「え……でも……！」

「ハルカさんは、これからどうするつもりですか？」

「え……？ 私……？ 私はカナズミシティ方面に行かないといけないから……。110番道路から回つて行こうと思つけど……」

ハルカは、まだ少し戸惑いながらもそう言った。

110番道路は、ハイクが向かおうとしている煙突山とは正反対に位置する道路だ。つまり、ハイクとハルカはここでお別れと言う事になる。

「じゃあ、ここでお別れですね……」

相変わらず光を失つたままの瞳を向け、ハイクはそう言った。

そんな少年を見たハルカは、胸が痛んだ。

何があつたのかは分からぬ。分からぬが、ハイクがこんな風になつてしまふとは、ただ事ではないだろう。

「短い間でしたが、お世話になりました」

頭を下げてそう言うハイクに、ハルカはかける言葉も見つかなかつた。

自分ではハイクの力になる事は、もうできない。しかし、もっとハイクと親しい中である人ならば、力になれるともしない。

ハイクが言うには、レインもノを探す旅をしているらしい。共通の目的を持つ彼女とは、再び会う事があるだろう。

もし、そんな事があつたならば、レインならばハイクの元気を取り戻せるかも知れない。

ハルカは何も言わず、歩き去っていくハイクの背中を見つめていた。

112番道路

『……いつまでそういうつもりだ？』

今日の空は朝から淀んだ雲に覆われており、今にも雨が降つてしまつた。

キンセツシティから111番道路へ行き、さらにもう一歩を越えた所にある道路、112番道路に着いた時、モンスター・ボールの中からジュカインが声をかけてきた。

幸い、111番道路では一度もポケモンに襲われる事は無かつた。そのため、ハイクは112番道路に着くまでの間、重い雰囲気のまま無言で歩いて來たのだ。

さすがのジュカインもそんなハイクを見ていらねず、声をかけたのだ。

「…………これまでって……そんなの……分からなによ…………」

ハイクは足を止め、ボールの中のジュカインに曖昧に答える。そしてそのまま、ハイクはまた俯いてしまつた。

しばらくの沈黙。

その後、ジュカインがボールの中から勝手に飛び出した。

『あんたも……覚悟を決めた方がいい……。あんたの元手持ちであるライチュウがそうだったなら、他の連中も、あんな風に襲つて来るかもしねり……』

そしてジュカインが、ハイクにそう言った。

「……………分かつてるよ」

それに対し、ハイクはそう答えた。
そんな事、言われるまでもない。

オダマキ博士の研究所から姿を消したポケモンは、全部で六匹。その中の一匹であるライチュウが、カナズミジムのショイミのよう^{リメの}に、力に捕られ、凶暴化していたのだとしたら、ほかの五匹も同じような状態になつていてもおかしくない。そう考えてしまつのが、普通だろ^う。

なら、戦う時が来てしまふかもしない。だとしたら、今の内に覚悟を決めておく、と叫ぶジュカインの考えは妥当だろ^う。しかし、

「けど……怖いんだ……。他のみんなもあんな風になつてしまつてるんじゃないかなって思つていると……自分で知らない内に、それを否定しようとしてちゃうんだ……。他のみんなは大丈夫だ、あなつてこるのはライチュウだけだ、って……」

ハイクは決められなかつた。

淡い期待、妄想で自分に嘘をつき、勝手に納得していたのだ。

「どうして……どうしてこんな事になつちやつたんだろう……。
あいつらに、罪は無い……。なのにどうして、あんなに苦しむなく
ちゃいけないんだ……」

俯いたまま、ハイクはこの朝で一番大きな声を上げる。

その声には、キンセツジムの時と同じような気持ちが込められていた。

『ハイク……さん……』

すると、今度はボールの中から、ヒノアラシとラプラスがほぼ同時に飛び出した。しかし、ハイクは全く動じない。相変わらずの表情で、俯いたままだ。

ヒノアラシは、心配そうな表情でハイクを見上げていた。ハイクの気持ちは、痛いほど伝わってくる。それは、ラプラスもジュカインも感じているだろう。

大切な仲間だった人が、急に牙をむいて襲いかかって来る。それがどんなに辛い事か、平和な日々を過ごしていた頃には、想像も出来なかつただろう。

しかし、今は違う。

既にその平和な日々は崩れ、いつ、誰が、どうなつても、おかしくない状況にまでなつてしまつた。

『ハイク、貴方の気持ちは私にもよく分かります。……私も、もしにジュカインが牙をむいて襲いかかつて來たとしたら、それはシヨツクだと思います……』

ラプラスがハイクにそう言つた。

『しかし、時に戦わなければいけない事も、あるのですよ?……仲間の……命を……奪わなければならぬ事も……しかし……』

そこで、ラプラスは話すのを止めてしまった。今は、それ以上の事は話すべきではないのだ。

仲間の命を奪う。その言葉が出た時は、ハイクも少し反応した。反感は、抱いていたのだろう。だが、ハイクはなにも言わなかつた。

……もはや、諦めているのだ。

ライチュウ達は、もう救えない。戦つて殺さなければならぬ。そう、思つてしまつてゐる……。

『（しかし、方法は他にある。……でも、今の彼にはそれを成し遂げる事は出来ない……。すべてを諦めてしまつて、今の彼には……。彼自身が、それに気づかなければならない……。けど、彼の心を動かす程の、大きな存在があれば……もしかしたら……）』

淀んだ雲に覆われた空。

それは今のハイクの気持ちを、そのまま映し出しているかのようだつた。

淀んだ空（後書き）

今回から第5章です。

感想、評価等 楽しみにしています。

いや〜、ずっとハイク sideと書くのよりも、別のキャラの視点も欲しいですよね？

と、いつ訳で、レインsideスタートです！

ちなみに時間は、第3章でハイクと別れた直後です。

それでは、どうぞ！

ラプラスを仲間にしたハイクと115番道路で別れてから、少し経つた。

一面に広がる海のすぐ横の道を、レインは鼻歌交じりで歩いていた。

時折、海の方から塩の匂いのする風が、ピュウと音を立てて吹いてくる。

今は冬であるため、その冷たい風は少々忌々しいが、夏であったなら塩の良い香りのする心地よい風、と捉える事が出来るだらう。

海の近くであるためなのか、115番道路はかなり寒い。

コートなどで隠している部分は良いが、肌が露出している顔などの部分は、かなり冷えてしまっている。普通なら、一刻も早く暖を取りたいと思うのだろうが、鼻歌交じりで歩くレインを見る限り、そんな事はあまり気にして無いようだ。

平均よりはやや香氣、という事は彼女は自覚がない。と言ひよつゝ、自覚が無いから香氣、と言ひべきか……。

現在のレインの目的地は、一応ハジツゲタウンだ。そこに行くには、このまま115番道路を進めばいい訳だが、途中で通らなければいけない場所が、一つ。

「あ、見えてきた……」

レインの眼前には、大きな岩山があった。

全体的に白っぽい岩でできているようだが、その自然の産物には人の手がかけられているようで、進み易いように整備されていた。そして、その岩山に開いている洞窟の入口のような物。その横にチョコソと立てられている看板には、【流星の滝】と書かれていた。

そう、ここは流星の滝の入口。ハジツゲタウンに徒步で向かうためには、必ず通らなければならぬ場所だった。

「うん。ここを抜ければ、ハジツゲタウンは目の前だね」

流星の滝を抜けば、ハジツゲタウンはすぐそこだ。レインも思わず声を出してしまう。

太陽は、ちょうど真上辺りにあるので、今は正午くらいだひつ。この調子なら、夕方までには着きそうだ。

レインは相変わらずの軽い足取りで、流星の滝へと入って行つた。

流星の滝

流星の滝は、神秘的な雰囲気に包まれた、不思議な場所だった。

クリーム色の砂に、クリーム色の岩。辺り一面クリーム色だ。

入口は洞窟のような物に見えたが、中はかなり明るい。それもそのはず、この洞窟の天井には大きな穴が開いており、そこから太陽の光が漏れているのだ。

お陰で、視界に不自由は無く、スイスイ進めそうだ。

洞窟に入った瞬間、レインの耳に、「ゴオオと轟音が飛び込んで来た。その音の正体は無論、流星の滝の流れる音だった。

流星の滝は、ホウエン地方の中でも最も有名な絶景スポットの一つだ。

その神秘的な姿は、見る者すべてを魅了する。この滝を見るために、わざわざホウエンまで赴く人もいる程だ。

「うーん。ここも変わっていないなあ……」

伸びをしながら、レインはそう言った。

流星の滝には、もう随分前から来ていなかつたが、レインの記憶が正しければ前 来た時と内部構造はほとんど変わっていない。

「ん……？」

しかし、滝の音の他に何か別の物の音が、レインの耳に飛び込んできた。

「何……だひ? ……? 話し声……?」

「オオと言つ音の他に、ぼそぼそと明らかに誰かが話しているような音が聞こえた。

観光客か何かかな?と思いつつも、声のする方へ向かつてみる。そして、声の主と思われる人物が目に入つた時、レインは驚愕した。

「つー? あの人って……」

レインは思わず、近くの岩陰に身を潜めてしまう。心臓の鼓動の高まりを覚えつつも、恐る恐る岩陰から声の主を覗き込む。

そこには、二人の人物が居た。

一人は、何かの研究員だろうか? 白衣を着ており、黒髪を短く綺麗に揃えた男だった。

だが、肝心なのはもう一人の方だ。

レインは、そいつを知っている。見たことがある。真紅のローブに身を包み、フードを深くかぶつて顔を隠している人物だった。そう、カナズミジムで出会った、あの紅ローブの人物だったのだ。

「あの人……カナズミジムの時の……。でも、一体何を話しているの……?」

ボソリとそう呟きながらも、レインは一人の会話の内容を探るべく、耳を傾けた。すると、こんな内容が聞き取れた。

「……で、調整は完璧です。これで長時間、石の力を抑え込む事が出来るでしょ?」

白衣の男がそう言いつと、紅ローブの人物は手に持つていて黒いモンスター・ボールのような物をまじまじと眺めた。

「あ……」

そのボールを見た瞬間、レインは思わずそんな声を出してしまった。なぜなら、そのボールがカナズミジムで茶色のロープの人物が、異常な力のナットレイを入れていたボールにそっくりだったからだ。幸い、あちらには気づかれなかつたみたいだが、不用意に声を出すのは、慎んだ方が良さそうだ。

二人は話を続けた。

「これにより、わざわざヘルドールを使いにならなくとも、人の力だけでポケモンを操る事が出来ます」

白衣の男がそう言いつと、今度は紅ローブの人物が口を開いた。

「……なるほど。」これで従来のボールより長時間 石の力を抑え込み、ポケモンの暴走を止める事が出来る、と……。て、言う事は、あなたが言いたいのはこれ以上 召喚陣を使つた、という事ね……

「おお……。流石、お察しが早い」

紅ローブの人物の声を聞いた時、レインはある事に引っかかつた。

「（ん……？女人の人……？）」

レインは、心中でそう考えていた。声の質から考へるに、男性の声とは思えなかつたのだ。

「召喚陣は莫大なエネルギーを使ひますので、どうか」理解を……」

白衣の男は、申し訳なさそうに紅ローブの人物へそう言つた。
一人のこれまでの駆け引きから察するに、白衣の人物の方が位が下なのだろう。

「けど、グレイはもうキンセツシティに向かつたみたいだけど？彼にはまだ伝えてないでしょ？」

「（）心配なく。召喚陣は、あと一回 使用が許可されますから……」

紅ローブの人物の質問に対し、白衣の男はニヤニヤしながらそつ答えた。

「（へ……？グレイ……？グレイって、誰の事……？）」

一人の会話を聞いている内に、レインの頭は段々とこんながらがつてきた。それもそのはず、二人の会話の中には、聞き慣れない言葉がてんこ盛りだつたからだ。

グレイと言う人物名もそうだし、ヘルドールだとか、召喚陣とか言われても、レインからして見れば何の事だかさっぱりだ。

そんな事を思つてゐる少女に盗み聞きされてゐるとは露知らず、

一人はまた話を進める。

「……でも、召喚陣を使わないとなると、例のポケモン達はどうするつもり？あのポケモン達の力は、並みのポケモンとは桁が違う。力を抑えるにしても、限界があるんじゃないの……？もし、人の手で連れて行く最中、暴走なんかしたら……、一溜りもないけど……？」

なんとなく心配そうに紅ローブの人物が尋ねるが、白衣の男は相変わらずの緩い表情を崩さぬまま、

「その点も、ご心配なく。既に検証済みです……。少なくとも、五時間以上は力を抑えていられるでしょう」

と、答えた。

例のポケモン達、と言つ所に引っかかつたが、おそらく、並みのポケモンとは桁が違う力を持つポケモンとやらでまた何かを企んでいるに違いない。

それなら、今ここで止めるべきではないだろうか？

レインの手持ちには、十分な戦力が揃つていて、相手は一人だが、力を合わせれば何とかなる……はず。けど、上手く出来るだろうか？

躊躇はしていられない。が、飛び出すにしても心の準備が出来てない。

レインがまじまじしている内にも、まだ一人の会話は終わらない。

「まあ、あのホウエンリーグチャンピオンのポケモンです。用心するのも無理ないでしょ？」

「チャンピオン！？」

白衣の男の一言を聞いた瞬間、レインは驚きのあまり声を上げてしまった。それほど大きな声では無かったが、驚いた拍子にレインは大きく動いてしまったのだ。そのため、レインの足が岩に当り、「ゴンッ」と鈍い音が響いてしまった。

「つーっ！」に居るのは誰だ！？」

真っ先に白衣の男がそれに気づき、顔を上げる。

レインは「あちや～……」と胸のよくな気持ちになり、渋々岩陰から出てきた。

「あなたは……」

レインの姿を見た紅ローブの人物が、そう呟いた。その反応を見ても分かるように、紅ローブの人物はレインの事を覚えていたようだ。

「その……ボールの中に……」

どうせ見つかってしまったのだ。レインは言いたい事を言つ事にした。

「そのボールの中に、ハイクのポケモンが入っているんですね…

……？

「…………」

白衣の男は「何……？」と反応を見せていたが、紅ロープの人物は何も言わない。

それでも構わない。レインは話を続けた。

「お願いです！　そのポケモンをハイクに返して下さい！　今ハイクは、必死になつてその子達を探しているんです！　だから……」

「残念だがな、お嬢さん。俺達は、その頼みを聞く訳にはいかないんだよ……」

だがしかし、その叫びはあつさりと打ち砕かれた。白衣の男は、子供に話す時のような口調でレインにそう言い返した。

そして一步一歩レインに歩み寄りながら、懐からモンスターーボルを取り出す。

「話を聞かれてしまつたんだ。ここから君を生きて返す訳には……いいかないなあ……」

そういう終わった後、白衣の男は不気味にニヤリと笑つた。

「う……私は……まだ死にません！　サンダース、お願い！」

レインは咄嗟に、ボールからサンダースをくり出した。元気な鳴き声を上げ、サンダースがボールから飛び出す。

「まつ……懲々戦いに来るとは……面白いー！」

かなり自信があるのか、白衣の男はニヤついた表情を変えずに、モンスター ボールを投げた。

中から出てきたのは、円盤状の身体に、アンテナのような突起物。そしてH字型の磁石のような物が付いており、フワフワと空中に浮かんでいるポケモン、ジバコイルだった。

だが、どんなポケモンが出てきても、レインは屈しない。このままで、ハイクの大切な仲間^{ポケモン}が、カナズミジムの時のシェイミのように悪用されてしまう。

それだけは、是が非でも避けたい。

レインは、ハイクが悲しむ顔なんて見たくないのだ。

辺り一面クリーム色の洞窟の中。

レインと彼女のポケモン達の、罪の無い人たちの笑顔を守るために戦いが始まった。

あれ? サンダースの鳴き声って……どんな感じでしたっけ?
誤字、脱字があるかもしれないのに、見つけたらどうかと指摘下
さい。お願いします。

another memory -流星の滝…? - (前書き)

更新遅れて、申し訳ありません。

知っている方もいると思いますが、実は最近、新連載を始めたんですね。

「ポケットモンスター ツワライライト」です。ぜひ、ご覧になつて下さい。

それでは、本編どうぞ!

流星の滝では、何度も激しい発光が繰り返されていた。

現在 戦っているレインのサンダースと、白衣の男のジバコイルは、主に電気タイプの技が主力攻撃となっている。そのため、二匹どちらかの技が発動する度に、電気タイプ特有の光が放たれる訳だ。

「フフ……。中々やるな、お嬢さん」

白衣の男が、関心するかの様にレインに言った。

電気、鋼タイプのジバコイルにとって、電気タイプのサンダースは、決して相性の良い相手とは言えない。だが、今の白衣の男の余裕な口調からも分かる通り、彼はかなりポケモンバトルに自信がある様だ。

これまでのレインの戦い方は、特殊攻撃を受けた際、それを倍返しするジバコイルの技“ミラー・ポート”を警戒してか、“雷の牙”などの打撃技で攻めると言う戦法を取っていた。

しかし、ジバコイルのその頑丈な身体相手では、打撃技では大きなダメージは期待できない。況してや、電気タイプのポケモンに電気タイプの技で攻めるなど愚の骨頂。

ジバコイルは、ほとんどダメージを受けて無かった。

だが、サンダースが一方的にやられているかと言つて、そうではない。

レインの適格な指示により、ジバコイルの技のほとんどを、ひらりひらりとかわしているのだ。おそらく、白衣の男が関心しているのはそこだろう。

「だが、相手が悪かつたな。流石のお嬢さんでも、この俺が相手じゃ……。勝率はほとんどゼロだろ？」

随分と高飛車な台詞に、レインは少しムッとしたが、言い返しはしなかつた。

基本的に白衣の男ジバコイルは、“スパーク”などと言った相手に突進する形の技で攻めてくる。サンダースは特殊攻撃より打撃攻撃に弱いので、妥当な判断と言えるだろう。

しかし、だ。電気タイプのサンダースにとって、“スパーク”なんかはそれほど驚異的な技ではない。むしろ、あっちから接近してくれるるので、素早く回避した後すぐに反撃、と言った戦法がとれるので好都合だ。

だが、レインは相変わらずサンダースに“雷の牙”を使いつづき示し続けている。

大きなダメージを期待している訳ではない。かと言つて手数で勝負している訳でもない。

「（何だ……？）こいつ、本当に俺に勝つ気はあるのか……？）」

白衣の男は、そこが引っかかっていた。

白衣の男のジバコイルは、残念ながら“ミラーコート”以外の使える技は、すべて電気タイプか鋼タイプだ。タイプだけ見れば、相手に与えられるダメージ量は少ない。ならば、少しでも大きなダメージを期待できる技か、連続してダメージを与える技で攻めるまでだ。

しかし、彼女は違う。

大きなダメージどころか、相手を倒す事すら考えて無い。本当に

勝機が無いので、ほとんど諦めているのか？

……いや、違う。

「…………やつぱつ」

それまで技名以外の言葉を口にして無かつたレインが、そこでボソリと呟いた。

今まで技は、攻撃ですら無い。ただ、読んでいたのだ。
白衣の男のジバコイル。その攻撃パターンや、自分とのレベルの差を……。

一いちから攻撃を仕掛けず、まず相手の動きを見る。

その合間に、隙があれば少し攻めてみる。それにより、相手がどの様な反応を見せるか観察する。これで、どの程度ダメージを取れたか大抵判断出来る。

ジバコイルは、ほとんどダメージを受けてない様に見えるが、完全にゼロでは無い。多少のダメージは、受けているのだ。

そしてジバコイルの攻撃パターン。

ただ一直線に突進を繰り返すだけ。多少軌道の調整はしているものの、やはりきこちない。

それらを引っ括めて、相手のレベルを判断するのだ。

あのジバコイルは、防御力に特化しているものの、バトルの経験は多くない。つまり、レベルは高くない。

これにより、レインの敗北は揺らぐ物となつた。

「あの……、あなたをつき、私の勝率はほとんどゼロ、と言いましたよね？」

レインは少し肩の力を抜き、笑みを零しながらも白衣の男にそう言った。

「……だったら、何だ？」

既に勝った気でいる白衣の男にとって、何故レインがこんな状況なのに笑っているのか、疑問符が浮かんでいた。

「なら、その言葉……、そつくそのままお返しますよ?」

そんな白衣の男に向かつて、レインは軽い表情のまま、そういう言い放つた。

レインの頭の中では、既に勝利の方程式は出来上がっている。サンダースも殆ど本気を出していないはずだから、ここからが本調子だ。

そう、これがレインの本当の戦い方。相手を観察し、レベルを見極めてから、攻めに入るのだ。

思えば、ハイクもこれと似たような戦い方をしていた。

しかし、彼にはレインとは決定的に違う所が一つ。それはレベルを見極める際、相手のポケモンを観察するとしつ動作を完全に省いているのだ。

彼の場合、ただポケモンを見つめるだけ。ただそれだけで、自分

と相手のポケモンとのレベルの差が、分かつてしまふのだ。

今思い返してみれば、ハイクはあの頃、既にポケモンと心を通わす能力を開花させていたのかも知れない。そして、今はその最高潮。完全にポケモンの気持ちが分かり、会話までも出来てしまふ。

それは、天性の才能。常人には真似する事の出来ない、特別な力。

その力が、リーグ優勝のきつかけの一つだったのかも知れない。常人よりも、ポケモンと心を通わし、ポケモンの気持ちをしっかりと理解出来る彼だからこそ、ポケモンとの連携も群を抜いていたのだ。

「チイ……。小娘め……！ ちょっと手加減したらいい気になりやがつて……！」

レインの余裕の一言を聞いた白衣の男は、それにより一気に苛立ちを募らせた。

白衣の男は、自分ではかなり手加減しているつもりだ。子供相手にむきになるなど、大人げないと思つたのだ。

だが、あつちがあんな態度なら、容赦はしない。もう、遠慮もない。徹底的に叩き潰してやる。

「ふうん……。あなた、かなりバトルに自信があるみたいね？」

その姿を見ていた紅ローブの人物が、白衣の男に声をかけた。

「ええ、それはもう！ あんな小娘、すぐにでも始末できますよ？ そうですね……、一分。一分も経てば、このバトルは終わつていま

す」

紅ローブの人物の言葉に対し、白衣の男は自身満々でそう答えた。
それを聞いた紅ローブの人物は、

「へえ……。それは楽しみ」

と緩い口調で答えた。

その口調から察するし、彼女はあまり期待してないだろう。だが、

白衣の男は、そんなに氣にして無かつた。

期待されてないのなら、今ここで力を見せつけてやれば良い。

白衣の男は、そう思つていた。

「そう言つ訳だ。悪いがさつさと終わらせてもらひつぎ

白衣の男は向き直り、レインに「そう言つた。

「はい。ぜひ、そうして下さー」

そんな白衣の男に対し、レインはニッコリと笑いながらも、そう
答えた。

これにより、白衣の男の怒りがさらと高まつたのは、言つまでも
ないだろ？

「調子に乗るなよ小娘えええ！ー」

白衣の男は、レインを怒鳴りつけた。

かなりの迫力だったが、白衣の男がこのよつた行動をとる事は大
体予想が出来たので、レインはあまり驚かなかつた。それよりか、
あまりに予想通りだったので、そっちの方が驚いているくらいだ。

「ジバコイル！“マグネットボム”で粉碎しろ！」

そして、白衣の男がジバコイルに、次の技の指示をした。

それを聞いたジバコイルは、素早く自身のH字型の磁石の様なもので、素早く円を描いた。するとそこに、黒っぽい色の球体がみるみる内に生成されていく。

そして、ある程度の大きさになつたそれを、サンダースに向けて飛ばした。

その球体は、空中を移動している内に、少しづつだが速度を上げていく。

「サンダース、避けて！」

しかしサンダースは、水の様にしなやかな動きで上手く身体を捻らせ、その攻撃をかわした。

速度が上がつていても、あまり速い速度ではないのだ。

「無駄だ！」

しかし、サンダースの横を通り抜け、不発に終わったかと思った“マグネットボム”が、急に軌道を変えた。それはあまりにも自然に、ほとんど逆の軌道に、だ。

だが、サンダースは、ある程度それを予想してたかの様に動き、またもや攻撃を避けた。しかし、また“マグネットボム”は軌道を変え……。

「いらっしゃり避けても無駄だ！ビームでも追い続けるぞー。」

白衣の男が、勝ち誇った様な笑みを浮かべ、そう言った。

そう、これが“マグネットボム”と言つ技だ。ビームでも追いかけ、目標の物を捕らえるまで止まらない。

「あ、そうでしたね。それじゃあサンダース、“10万ボルト”で撃ち落として」

それを聞いたレインが、何かを思い出したかのようにポンッと手を叩き、サンダースに技の指示をした。

ビリビリと身体が発光したかと思うと、それを一気に解放し、雷として飛ばした。

サンダースの10万ボルトは上手く“マグネットボム”に直撃し、それにより爆発が起きた。

「くそ……、面倒くさい奴め……！」

白衣の男は爆風を浴び、思わず片腕で顔を覆いつつも、そう呟いた。

「オオオという音と共に、砂埃が舞い上がる。勿論、サンダースもジバコイルもダメージを受けておらず、状況は相変わらずだ。

「なら、これならビリビリ、もう一度“マグネットボム”だ

だが結局、白衣の男は同じ技の使用を指示した。

レインが、なんだあ……。と思つていいと、

「……ただし、連續でな」

と、白衣の男が付け加えた。

ジバコイルが先ほどと同じ様に球体を何個も作り出し、それを一気に連續で飛ばした。

その球体は、ほとんど同じ軌道を描き、サンダースに迫る。

「サンダース、打ち落として！」

サンダースは、やはり10万ボルトを上手く使い、次々にそれを打ち落とした。

“マグネットボム”は、その名の通り爆弾。少しの刺激を『』える度に、爆発が起こる。

そして、今回は数がかなり多い。そのため、爆発の大きさもかなりの物だった。

さつきよりも高く、大きく砂埃が舞う。

「掛かつたなー！」

すべての“マグネットボム”を打ち落とし、ホツとしたレインだつたが、白衣の男は高々と笑つた。

まるで、『』なるのを予想してたかのよう……。

「えつ……？」

呆気にとられたレインだつたが、砂埃が治ると、白衣の男が笑つていた意味が分かつた。

そこには、何かの技を最大にまで溜めたジバコイルがいた。

「これで最後だ！ジバコイル、“電磁砲”！」

ジバコイルは、視界が悪くなつてゐる隙に、“電磁砲”的チャージをしたのだ。そして、既に技の準備は万全になつてゐる。

ジバコイルは、自ら溜めたその電気の塊を、サンダースを狙つて発射した。

物凄い轟音と共に、その大砲の様に飛ばされた電気の塊が、サンダースに迫る。

次の瞬間、激しい光が起きた。

“電磁砲”が、炸裂したのだ。

「ハハハハ！終わりだな、小娘！」

勝つた。

このバトルに勝つたんだ。

轟音に負けないくらいの大声で、白衣の男は、吐き捨てる様にそう言つた。

「……はい。もう終わりです」

しかし、レインはまだ余裕そうな口調でそう言つた。

「いつ、何を言っている？」と白衣の男は思っていた。砂埃の所為せいである小娘の表情は見えないが、おそらく彼女は開き直っているのだろう。いや、開き直っているはずだ。だって、あいつは負けたのだから。

そう思った。

しかし次の瞬間、白衣の男は自分の眼と耳を、疑った。

「……『穴を掘る』」

少女のそういう声が聞こえたかと思つと、急に「ゴォン」と大きな音が響き渡つた。

一瞬だった。

訳の分からぬまま、ジバコイルは吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「なつ……！？」

白衣の男がジバコイルの様子を確認するが、既に目を回していた。

「一撃……だと……！？」

信じられなかつた。

自分は負けた……。負けたんだ……。

まさかこんな小娘に、こんな無様な負け方をするとは思っていないかつた。

頭の中の整理が、追いつかない。

「サンダースとジバコイルには、レベルの差がありました。それに、ジバコイルは電気、鋼タイプですので、地面タイプの技に滅法弱いんですね」

砂埃が治まつた後、レインはゆっくりと白衣の男に歩み寄り、最後に二ヶ「ゴリ」と笑みを浮かべた。

白衣の男は、この時初めて、自分はとんでもない奴を相手にしていたんだと悟った。

マグネットボムは、どんな様な技かよく分からなかつたので、描写はかなり適当ですね。すいません……。

次回は、ひょっとしたら短いかも?

思つたよつと長く書けました。

今回で、レインsideは最後です。

それでは、どうぞ…

another memory -流星の滝…-

和やかに微笑むレインを前に、白衣の男は唖然としていた。

信じられない。今の白衣の男の気持ちは、こうだ。

こんな名前も知らない子供にバトルで負けるなんて、想像もして無かつたのだ。

「な、何故だ……。こんな事……！」

悔しさのあまり、握る拳に力が入る。

こんな事、あり得ない。白衣の男は、その言葉を口にしようとしたが、それ以上に強い感情を感じており、口が動かなかつた。

「のままでは、知られて欲しく無い」ことが知られてしまつ。

「……あなた、さつきバトルに自信がある、みたいな事 言つてたよね？」

いや、もうバレている。

バトルを見ていた紅ローブの人物が、ため息混じりに白衣の男に声をかけてきた。

「え、ええ。そりや勿論！」

白衣の男は、最後の抵抗と言わんばかりに、頭の中に浮かび上がってきた言葉を、なんとか声にした。

「……嘘でしょ」

しかし白衣の男の抵抗も虚しく、紅ロープの人物は、キップリとそう言った。

こうなる事は、少し予想出来ていたのかもしれない。だが、白衣の男のプライドが許さなかつた。

少しでも認めて貰いたい。少しでも良い所を見せたい。そんな小さな欲が、彼を動かしたのだろう。

しかし、予想外の強者の登場により、期待していた結果と真逆の事態を招いてしまつた。

「う、嘘……？　な、何を仰いますか……？」

無駄な抵抗。この言葉がそつくり当てはまる状況だ。今更　誤魔化そうなど、愚か以外の何物でもない。

分かっているのだけれども、ついつい口走つてしまつ。

「サンダースの特性、知つてる？」

「と、特性……でありますか……？」

紅ロープの人物が投げかけた質問に対し、白衣の男は答えられない。言葉が詰まつてしまつ。

彼の背中は、既に嫌な汗でぐつしょりだつた。

「……サンダースの特性は、普通“蓄電”。電気タイプの技を受けた時、ダメージを受けないばかりか、逆に吸収してしまう特性……。でも、見た感じあの子のサンダースは“蓄電”ではなく“逃げ足”だつたみたいね。だけど、普通サンダース相手に電気タイプの技は使わないよね……？」

「…………」

ああ、もう……。出来れば逃げ出したい。

白衣の男は、心の中でそれを強く望んでいた。

特性の事を、何も考えて無かつた。本気で忘れていた。“電磁砲”を放つた時、歡喜の笑みを浮かべた自分は何だつたんだ。思い出すだけで恥ずかしい。屈辱だ。

愚の骨頂。それは自分の方じゃないか。

「い、いやしかし……。確かに、と、と、特性の事は……、その、あれでしたが……」

まだ抵抗する。

いい加減、認めた方が良いのではないだろうか。自分のポケモンの知識は、ほぼ皆無に等しいという事を。

「それでも！ あんな攻撃でジバコイルが一撃でやられるとは、思えません！ たしかに、効果は抜群でしたが……、あんな……名も知れない小娘のポケモンに……」

段々と声が小さくなつたような気がするが、まあ、そこは気にしないとしよう。

白衣の男は、頭に浮かんだ言い訳を、片つ端から口にしていく。
ほとんど無心でだ。そのため、あらぬ事を口走つてゐるかもしれない。

その事が結果的に、さうに自分を悪い状況に追い詰めてしまつ事もある。

やはり、無駄な抵抗は止めた方が良いのかもしれない。

「あの子の名前は、レイン。聞いた事、ない？」

「レイン……？ キ、聞いた事 ありませんな……」

ほんと、諦めてしまつたいる。

紅ローブの人物も、呆れ顔だ。

これにより、白衣の男の人物は、ポケモンバトルの事をえも良くな
知らない、という事が確定した。

「ホウエンリーグ。トレーナーなのに見てないの？ あの子は前回
のリーグでベスト3入りを果たした、凄腕のトレーナーよ？」

「く……？」

トレーナーなら、誰でも目標とする大会だろう。何年かに一回、
この地方の中でポケモンリーグが存在する街、サイコウシティで開
かれる大会。

例え、出場権を手に入れる事が出来なかつたとしても、大会の結果
くらいはトレーナーなら気になるだろう。

それに、結果は大会翌日にはテレビで放送されるはず……。しかも
今回は、四天王と呼ばれる程の凄腕のトレーナーが、ハイクとレイ
ン、二人の子供に全滅させられると言つ大波乱が起きたのだから、
人々には印象深い。

きちんと見ていれば覚えているはずだ。つまり、白衣の男は、そ
れさえも見てない事になる。

「べ、ベスト3……！ な、な、何故それほどのトレーナーが、こ

んな所に……！」

白衣の男は、驚きのあまり滑舌も悪くなっていた。
それもそつた。自分は気づかぬ内に、そんなトレーナーに対し高飛車な台詞を吐き捨て、愚弄していたのだから。

「お、俺如きが敵うはず……」

へナヘナと、力が抜けて行くのを感じていた。

自分がした事を、ひどく後悔しているが、今更 後悔しても、もう遅い。今は冬だと雪の上に、なぜか背中だけは汗だくだった。

「た、確かに……俺は無能だ……。しかし……」

色々な事がバレてしまい、その所為か白衣の男の脈拍は速かつた
が、それでもノロノロと顔を上げた。

「ま、まだ終わりじゃない……。まだこの方がいる……。ククク……」

「…」

もう、自分のプライドとか、そんなのはどうでも良かつた。だが、
このままではいられない。この小娘を、生かしてはおけない。
なら、自分よりも強いトレーナーに頼めばいい。

「あとは頼みますよ……口サさん……」

白衣の男は、紅ローブの人物にそれだけを言い残すと、その場からそそくさと逃げ出した。

あまりにも恥ずかしくて、どうかしてしまってやつた。いや、

もつ既にどうかしているのかもしれない。

「あ……」

白衣の男の逃げ足は、予想以上に速かつた。そのため、レインはそんな声を上げただけで、見す見すと彼を逃がしてしまった。折角の情報源だったのに、だ。

しかし、いつまでもそんな事は気にしてられない。

情報を持っている人なら、ここにもいる。白衣の男が駄目なら、彼女から情報を聞き出せば良いだけだ。

「ロサさん……ですか」

レインは、ゆっくりと彼女の名前を口にした。
それに対し、ピクリと反応を見せたが、そのローブの人物は無言のままだ。

フードを深く被っているため、はつきりとは分からぬが、おそらく視線はレインの方を向いているだろう。

しかし、全く動かない。ポケモンすらも出そりともしない。こちらの様子を窺っているのだろうか？

長い沈黙の末、不振に思つたレインが、ついに口を開いた。

「どうしたんですか？　あなたは私を殺そうとしているはずじゃ……」

レインは、恐る恐る質問した。少しでも隙を見せた瞬間　殺される。そう思ったのだ。

しかし、次に口サが口にした言葉は、レインにとって思いがけない内容だった。

「私はあなたと戦う気はない」

「は……？」

何を言つて居るの？

レインが、まず初めに思つたのはそれだつた。

戦う気はない、と言つ事は、殺す気は無いと言つ事なのか？ それでは、白衣の男と口サとでは意思が違う事になる。

「あなたは元々、私達の計画に関わらなくても良いはずだつた。けど、あのチャンピオンの傍にいた所為で、巻き込まれてしまつた。ただ、それだけなのよ？ 私は、そんな子を殺す趣味はない。……悪い事は言わない。早く家に帰りなさい」

レインは、淡々たる口調で発せられる口サの言葉を、ただ静かに聞いていた。

口サの言葉を聞く限り、レインをここから生かして帰してくれるようだ。普通に考えれば、そこは喜ぶ所だらう。

「何を言つて居るんです……」

しかしレインは、喜ぶどころか、怒りを感じていた。

「ふわけないでトドい！ 私は関わらなくて良かつたつて……、それじゃあ、ハイクはどうなんですか！ 関わるどころか被害にあってる！ 大切なポケモンを……奪われてるんですよ！ どうして……」

…、どうしてハイクがこんな目に遭わなくちゃいけないんですか！いや、ハイクだけじゃない……。ポケモン達だって……」

「…………」

「ハイクが、チャンピオンだからですか！？ そんなの関係ありません！ ハイクとポケモン達が苦しむ理由なんて、どこにも無いんです！」

レインは関わらなくて良い。彼女の気に障ったのは、そこだった。自分だけ生き残つて、自分だけ助かる。それがレインには耐えられなかつた。

なぜ、ハイクだつたのだろう。なぜ、ハイクとポケモン達だけが、あんな思いをしなければならなかつたのだろう。

ハイクは、レインの前では普通の表情を出していたが、本当は、とても辛かつたはずだ。

正直 言つて、ハイクは嘘が下手だ。
レインに心配をかけまいと思って、表向きでは笑つていたのだろうが、レインにとって、それが一番 辛かつた。

隠してほしくない。辛かつたら、辛いと言つてほしい。一人で抱え込むなんて、そんな事はしなくていい。いや、してほしくないのだ。

「急にポケモン達がいなくなつて……、辛かつたはずです！ もしかしたら、今も苦しんでるかもしない……。だけど、もしハイクが苦しみに押し潰されそうになつても、私が何度だつて支えます！」

関わる関わらないの問題じゃない。ただレインは、ハイクの心が傷ついたまままでいてほしくないのだ。その為にも、一刻も早く真相

を確かめる。ハイクのポケモン達も、全員 助け出す。

「それが、仲間と言つものでしょ、ひ？」

高ぶつた感情を抑えつつも、レインはロサに訴えかけた。ロサがレインの言葉をどう受け止めるかは、分からぬ。でも、少しだけ、少しだけいい。ロサの心が揺らいでくれたら、レインの気持ちを分かつてくれたのなら、それで良かつた。

レインの訴えを無言で聞いていたロサは、フウと息を吐いた後、

「あなた、本当にあのチャンピオンの事が好きなのね」

と、言った。

「えつ……？」

その言葉を聞いたレインは、少し固まってしまった。思いも寄らぬ事をストレートに言われたのだから、無理も無いだひつ。そんなレインにロサはゆっくりと歩み寄った。

「残念だけど、チャンピオンは多分もう手遅れよ。彼に田を付けられちゃ、無事ではいられない」

「彼……？」

止まりかけた試行を必死に戻しながらも、レインはボソリとロサの台詞を繰り返した。

「ま、待って下さい！ 手遅れって、どうこう意味ですか…？」 田

を付けられてるって、命を狙われているって事ですか！？」

予想外の情報に、レインは混乱していた。確かに、計画とやらにてってハイクという存在は邪魔かもしれないが、既に消される算段がされていたのだろうか。

「……詳しい事は、言えない。聞かない方がいい。けど、このまま私達の計画に觸れたのならば、あなたまでも狙われる可能性は、十分ある」

しかし、詳しい事は教えてくれなかつた。
それもそうだ。態々 敵に情報を漏らすような真似などしないだろ？

頭の整理が出来てないレインに対し、また口サガ口を開く。

「警告は、した。もし、あなたの心が、本当にチャンピオンを助ける事を望んでいるのならば、私は止めない。それを決めるのは、あなた自身……」

この時 初めて、口サガはしっかりとレインの目を見て、言葉を発した。

深く被つたローブから見え隠れする髪は薔薇のよう^{ひめ}に紅く、レインを見つめるその瞳もまた、紅かつた。

「（あれ……？　この人の瞳……、何か違つ……）」

口サの瞳は、先ほどの白衣の男と比べると、何か違つものがあつた。

白衣の男は、敵意をむき出した。邪悪な瞳だった。
だが、彼女のは違う。どこか温かみがあり、その温かさを、優しく包んでくれるような、そんな瞳だった。

「（）の人……ひょっとして……」

そんな瞳で見つめられ、レインは完全に動きを失った。

レインの頭の中は、さうに混乱の度合を増した。

この人は、本当にこんな事を望んでいるのだろうか。敵であるはずのレインを逃がそうとし、あんな温かい瞳まで持っている。そんな人が、本当に、誰かを傷つける事を望んでいるのだろうか。

しばらくレインを見つめた後、口サはそっと後ろを振り返り、そのまま立ち去りました。

「あ……、あのー。」

しかし、レインがそれを止めた。

レインが声をかけると、口サは立ち止まる。

「ハイクのポケモンを使って、何をするつもりですか……？ わつきのボールの中に、入ってるんですね……？」

しかし、口サはまた口を開じてしまった。
何かを拒んでいた。そんな感じだった。

「お願いです！ その子を返してください！ カナズミジムのショイミみたいに、悪用するつもりなんですよね？ 本当は、あなただ

つてそんな事は望んでいないはずです！　だつて……あなたのさつきの瞳は……」

「……その頼みは、聞けない」

レインはもう一度 頼み込んだ。さつきは白衣の男に邪魔されたが、今度は邪魔されない。

しかし、レインのその望みが、叶うこととはなかつた。

その言葉を最後に、口サは白衣の男から手渡されたボールを投げた。

そして、中にいたポケモンが、出現する。狐のよつな姿をしており、美しい金色の体毛に包まれたその身体に、何本もの尻尾が生えているポケモンだった。

「」の……ポケモンは……」

レインは、このポケモンに見覚えがあつた。

キュウコンという名前のポケモンだとは、誰もが見ても分かるだろつ。

そんな事ではない。レインは、なぜかなんとなく分かつていた。このポケモンは、紛れもなくハイクの仲間であつたポケモンだと言うことを。

さつきの会話を聞いていたからではない。ただ、そのポケモンを見た瞬間、ハイクが持つていたポケモンと、同じものを感じたのだ。

「“火炎放射”」

口サが指示をすると、キュウコンの口から、大量の火炎が放射された。

その火炎は、まっすぐにレインに向かって、進んでいく。

「う……」

しかしその技がレインを捕らえるよりも先に、彼女の傍らにいたサンダースが“10万ボルト”を放ち、“火炎放射”を焼き消そうと試みた。

だが、二つの技がぶつかると同時に、爆発が起きた。

激しい爆風により、レインは思わず顔を覆う。

「口サ…… もん……」

爆風が治まり、レインが顔を覆っていた腕を退けると、そこには既に口サの姿も、キュウコンの姿もなかつた。

あまり有力な情報を得られず、もどかしさを感じながらも、なぜかモヤモヤとしているレインの心だけが、そこにあつた。

another memory -流星の滝…? - (後書き)

白衣の男は、無能キャラにしてみましたが、ちょっと知識なぞ過ぎでしたかねえ……。

次回からは、ようやくハイク視点に戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6307w/>

ポケットモンスター デスティニーエピソード1 ~憎しみを碎く絆~
2012年1月12日22時45分発行